

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 509 集

さかした

坂下遺跡第 10 次発掘調査報告書

一関遊水地事業国道 4 号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査

2008

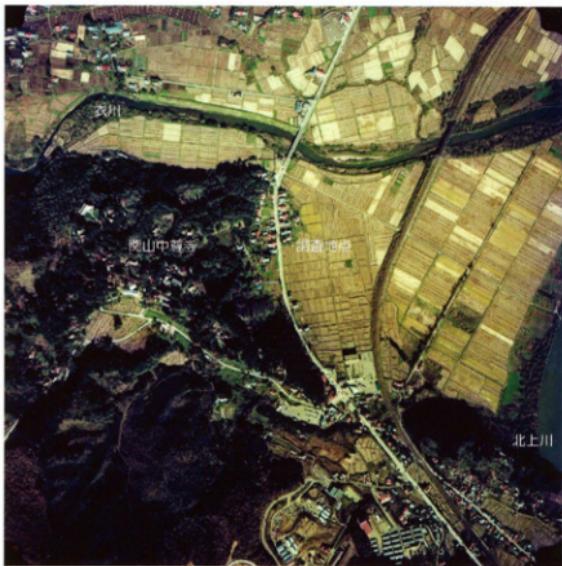
国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

坂下遺跡第10次発掘調査報告書

一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査



関山中尊寺と調査区（東方上空から）



遺跡周辺の航空写真（国土地理院撮影 昭和 51 年）



調査区より東福山を望む



散石遺構と池状遺構



敷石遺構の帯状敷石面（南から）



敷石遺構 敷石面の状況



出土遺物の一部

序

岩手県では旧石器時代をはじめとする一方箇所以上の遺跡の所在が知られており、地中には貴重な埋蔵文化財が豊富にのこされています。地域の風土が生み出したこれらの遺産は、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であるとともに、岩手県民のみならず国民的な財産といえます。現代に生きる私たちが、これらの埋蔵文化財を将来にわたって大切に保存し、その活用に力を注ぐべきであることは言うまでもありません。

一方、豊かな地域づくりのためには社会資本の整備・充実が必要不可欠であることもまた事実です。故郷の大地と共にある埋蔵文化財の保護と開発行為との調和は、現代社会に暮らしを営む私たちに与えられた大きな課題といえましょう。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を実施し、調査成果を記録化し保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事に伴い発掘調査を実施した、平泉町坂下遺跡第10次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、国指定特別史跡中尊寺の東縁に隣接する調査区内において、12世紀の建物跡とともに敷石造構や池状造構など当時の景観の一端を垣間見せる種々の遺構が発見され、奥州藤原氏の時代の平泉の姿をまた一つ明らかにすることができました。

本書が学術研究や教育活動などに広く活用されることにより、埋蔵文化財への理解と关心が一層深められ、ひいては埋蔵文化財保護思想の漸養に資するものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、平泉町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年3月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本書は岩手県西磐井郡平泉町平泉字坂下43-5ほかに所在する坂下遺跡第10次調査の成果を収録したものである。
- 2 岩手県遺跡台帳における本遺跡の登録番号はNE 76-0000、調査略号はSS-06-10である。
- 3 本遺跡の発掘調査は、一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施したものである。
- 4 野外調査を実施した期間／調査面積／調査担当者は下記の通りである。
平成18年4月11日～平成18年10月18日 / 8,420 m² / 村上 拓・菅野 梢
- 5 室内整理の期間／担当者は下記の通りである。
平成18年11月1日～平成19年3月30日 / 村上 拓・菅野 梢
- 6 本文の執筆は、Iを国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、IIの1・2・4を菅野、そのほかを村上が行った。
- 7 本書中に示した平面座標値は平面直角座標第X系（世界測地系）を用いたものである。
- 8 各種の分析・鑑定・保存処理は下記の機関に委託した。

石質鑑定 花崗岩研究会

放射性炭素年代測定 (株) 加速器分析研究所

火山灰同定・微化石分析 パリノ・サーヴェイ (株)

鉄製品保存処理 JFEテクノリサーチ (株)

木製品保存処理・樹種同定 (株) 古環境研究所

- 9 基準点測量業務は(株)総合上木コンサルタントに委託した。

- 10 写真測量および空中写真撮影は(株)シン技術コンサルに委託した。

- 11 野外調査では下記の機関・個人の協力を得た。(敬称略・順不同。所属は平成18年度。)

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、岩手県教育委員会生涯学習文化課、平泉町教育委員会・平泉町商工観光課、一関市教育委員会、奥州市教育委員会、一関警察署交通課。

斎藤邦雄・及川司・八重樫忠郎・島原弘征・菅原計一(平泉町教育委員会)、工藤武(一関市教育委員会)、石崎高臣・鹿野里絵(奥州市教育委員会)、酒井宗孝(花巻市博物館)、菅常久・櫻井友梓(岩手県教育委員会生涯学習文化課)、網伸也(財団法人京都山埋蔵文化財研究所)、井上雅孝(滝沢村教育委員会)。

- 12 今次調査で得られた出土遺物および諸記録類の一切は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1	(5) 土 坑	39
II 立地と環境	1	(6) 溝 跡	47
1 遺跡の位置	1	(7) 壊穴住居跡	55
2 周辺の地形	2	(8) 陥し穴状遺構	58
3 基本層序	2	(9) 沢 跡	61
4 周辺の遺跡	3	3 遺 物	64
5 調査履歴	6	(1) かわらけ	64
III 野外調査と室内整理	7	(2) 国産陶器	64
1 野外調査	7	(3) 中国産磁器	64
2 室内整理	10	(4) 鉄 製 品	64
IV 検出遺構と出土遺物	11	(5) 木 製 品	65
1 概 要	11	(6) 土師器・須恵器	65
2 遺 構	14	(7) 繩文時代の石器	65
(1) 掘立柱建物跡	14	V ま と め	89
(2) 敷石 遺 構	21	附 編	93
(3) 池 状 遺 構	29	1 放射性炭素年代測定	93
(4) 取水口状遺構	36	2 火山灰同定・微化石分析	99
		3 出土木梶の樹種同定	115
		報告書抄録	153

表 目 次

表1 周辺の遺跡	5	表6 土器・陶磁器類	78
表2 調査履歴一覧	6	表7 金属製品	88
表3 基準点一覧	7	表8 木製品	88
表4 柱穴一覧	19	表9 石器	88
表5 陥し穴状遺構一覧	61		

図版目次

第1図 遺跡の位置	1	第9図 建物跡2	16
第2図 基本層序模式図	2	第10図 建物跡3	17
第3図 周辺の遺跡	3	第11図 建物跡4	18
第4図 過去の調査地点	6	第12図 敷石遺構（北半）周辺	23
第5図 調査区とグリッド配置	8	第13図 敷石遺構（南半）周辺	24
第6図 遺構配置図(1)-④⑤・⑦・⑧区-	12	第14図 敷石遺構・溝跡2・3断面(1)	25
第7図 遺構配置図(2)-⑥区-	13	第15図 敷石遺構・溝跡2・3断面(2)	26
第8図 建物跡1	15	第16図 敷石遺構・溝跡2・3断面(3)	27

第17図 敷石遺構周辺の遺物出土状況	28
第18図 池状遺構	32
第19図 池状遺構断面(1)	33
第20図 池状遺構断面(2)・取水口状遺構断面	34
第21図 池状遺構周辺の遺物出土状況	35
第22図 土坑(1)	44
第23図 土坑(2)	45
第24図 土坑(3)	46
第25図 溝跡 1・2-e・2-f	51
第26図 溝跡 2-a・2-b	52
第27図 溝跡 2-c・2-d	53
第28図 溝跡 3	54
第29図 住居跡 1(1)	56
第30図 住居跡 1(2)	57
第31図 陥し穴状遺構(1)	59
第32図 陥し穴状遺構(2)	60
第33図 沢跡トレンチ	62
第34図 上器・陶磁器(1)・建物跡 1~3とその周辺 敷石遺構・池状遺構周辺(1)	66
第35図 土器・陶磁器(2) -敷石遺構・池状遺構周辺(2)	67
第36図 上器・陶磁器(3) -敷石遺構・池状遺構周辺(3)-	68
第37図 土器・陶磁器(4) -敷石遺構・池状遺構周辺(4)-	69
第38図 土器・陶磁器(5) -敷石遺構・池状遺構周辺(5)-	70
第39図 土器・陶磁器(6)・敷石遺構・ 池状遺構周辺(6)、土坑(1)-	71
第40図 土器・陶磁器(7) -土坑(2)、溝跡(1)-	72
第41図 土器・陶磁器(8)・溝跡(2) ⑥区南縁周辺(1)-	73
第42図 土器・陶磁器(9) -⑥区南縁周辺(2)-	74
第43図 土器・陶磁器(10) -⑥区南縁周辺(3)-	75
第44図 土器・陶磁器(11)・⑥区南縁周辺(4). 陥し穴居跡 1・②・③区-	76
第45図 金属製品・木製品・石器	77

写真図版目次

写真図版 1 調査開始時の状況	119
写真図版 2 掘立柱建物跡(1)	120
写真図版 3 掘立柱建物跡(2)	121
写真図版 4 敷石遺構・池状遺構(1)	122
写真図版 5 敷石遺構・池状遺構(2)	123
写真図版 6 敷石遺構・池状遺構(3)	124
写真図版 7 敷石遺構・池状遺構(4)	125
写真図版 8 敷石遺構・池状遺構(5)	126
写真図版 9 敷石遺構・池状遺構(6)	127
写真図版10 敷石遺構・池状遺構(7)	128
写真図版11 敷石遺構・池状遺構(8)	129
写真図版12 敷石遺構・池状遺構(9)	130
写真図版13 敷石遺構・池状遺構(10)	131
写真図版14 敷石遺構・池状遺構(11)	132
写真図版15 敷石遺構・池状遺構(12)	133
写真図版16 ⑦区の調査	134
写真図版17 土坑(1)	135
写真図版18 土坑(2)	136
写真図版19 土坑(3)	137
写真図版20 土坑(4)	138
写真図版21 溝跡(1)	139
写真図版22 溝跡(2)	140
写真図版23 陥穴居跡(1)	141
写真図版24 陥穴居跡(2)	142
写真図版25 陥し穴状遺構(1)	143
写真図版26 陥し穴状遺構(2)	144
写真図版27 基本土層・沢跡	145
写真図版28 出土遺物(1) -土器・陶磁器類-	146
写真図版29 出土遺物(2) -土器・陶磁器類-	147
写真図版30 出土遺物(3) -土器・陶磁器類	148
写真図版31 出土遺物(4) -土器・陶磁器類-	149
写真図版32 出土遺物(5) -土器・陶磁器類-	150
写真図版33 出土遺物(6) -土器・陶磁器類	151
写真図版34 出土遺物(7) -金属製品・木製品・石器類-	152

I 調査に至る経過

坂下遺跡第10次調査は、北上川上流改修一閣遊水地事業衣川地内の事業区域内に所在する「坂下遺跡」の記録保存を目的とし、当該事業の施工に先立ち実施したものである。

当該地区における事業内容は、一般国道4号の延長約1.1kmの付け替え工事等を行うもので、平成17年度に用地取得から事業着手し、一般国道4号衣川橋の桁下高不足の解消を図り支川衣川の周辺地域を洪水から守るために、堤防整備をすめている。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、平成17年度、施工主体である国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が協議し、平成18年度、財團法人岩手県文化振興事業団に調査を委託することとした。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

II 立地と環境

1 遺跡の位置(第1図)

坂下遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町字坂下に所在する。JR東北本線平泉駅の北約2.0km、北緯38度59分54秒～北緯39度16分9秒、東経141度6分21～40秒付近に位置する。



第1図 遺跡の位置

1 遺跡の位置

本遺跡の所在する西磐井郡平泉町は、岩手県の南部に位置する。北は奥州市、西・南は一関市と接している。面積は 63.39 km²、人口は 8707 人である（平成 19 年 1 月現在）。町域のおよそ半分は山林・原野が占め、水田・畑地の割合は 3 割弱である。

遺跡が所在する坂下地区は町の北側に位置しており、本遺跡の北端は衣川と北上川の合流点一帯に形成された氾濫原、それより南は関山丘陵の北東側縁辺に当たる緩斜面地となっている。標高は 23 ~ 25 m 前後を測る。調査開始以前は水田・畑地であった。

(菅野)

2 周辺の地形と地質

平泉町周辺は、東は北上山地、西は奥羽山脈に囲まれ、その中央部を一級河川北上川が南流している。平泉町は北上川の中流域にあたり、この川によって形成された氾濫平野や谷底平野、後背湿地などの低地と河岸段丘上にのる。町は北上川を境として、西側の平泉地区と東側の長島地区に大きく二分されるが、北上川西岸の平泉地区はそのほとんどが衣川丘陵からなり、開析が及んでいない丘陵西部の緩斜面では、牧場などに利用されている。

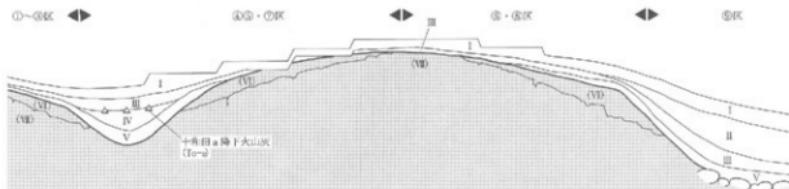
平泉町周辺の地質は、北上川の左岸、東稻山地は古生代の石灰岩・礫岩・泥岩、中生代の花崗岩により構成される。北上川右岸では新生代第三紀の安山岩・砂岩・泥岩が主体である。当地においては金沢層、油島層を基盤とし、表土から浅い深度にかけては河川浸食により形成された第四紀以降の比較的新しい粘土・微砂・シルトといった沖積土に被われている。土壌は丘陵部で黒ボク土壌、低地では灰色低地土壌が主体である。

(菅野)

3 基本層序 (第2図、写真図版 27)

野外調査では、遺跡内に堆積する土層の新旧関係や各層の時期を把握するよう努めた。

第2図は調査区内における層序の模式図である。大きく I ~ VII 層に分けることができる。



第2図 基本層序模式図

- I 層 暗灰色土。現表土（現耕作土）。現代の盛土等、擾乱層含む。
- II 層 黄褐色土。洪水堆積層。本層下部はやや暗く、12世紀遺構の埋土上部にみられる褐色土に類似する。歴時期あると思われるが層界不明瞭で細分困難。
- III 層 暗褐色土。炭片目立つ。12世紀遺物を包含。遺構埋土の主土上。
- IV 層 暗褐色砂～砂礫。沢路等にのみ堆積。グライ化すると青灰～緑灰色。
- V 層 黑褐色土。織文時代遺物わずかに含む。上面が古代以前（主に12世紀）の遺構検出面。
- VI 層 黄褐色土。高位面に近いほど層厚薄く砂質を帯び、低位面に向かっては層厚を増し粘土質を帯びる。これ以下、地山構成層。
- VII 層 淡黄色風化裸層または暗褐色砂。主に高位面にみられる。風化した基盤岩盤及びその崩落層と思われる。

(村上)

4 周辺の遺跡（表1、第3図）

平成18年度末の岩手県教育委員会のまとめでは、平泉町内には102カ所、奥州市衣川区には117カ所の遺跡が確認されている。このうち第3図には、本遺跡を中心とした平泉町38カ所、隣接する奥州市衣川区19カ所の遺跡を図示した。

平泉町内で登録されている遺跡の主体となるのは、平安末期に平泉を拠点とした奥州藤原氏関連遺跡である。これを狭義の「平泉遺跡群」と呼び、特に濃密な分布を示す範囲を「拠点地区」と呼ぶ。

拠点地区は、北は衣川、南は太田川、東は北上川氾濫原との段丘境界、西は奥羽山脈東端の小起伏山地の縁辺を境とする範囲で、東西、南北共に約2km四方の広がりをもつ。藤原氏関連遺跡は、北は上川周辺や支流の河川、小起伏丘陵をこえて衛星状の広がりを持つことが知られており、これを「周辺地区」と呼ぶ。北は奥州市衣川区に隣接する瀬原地区、東は北上川左岸の氾濫原微高地である里・本町地区、南は祇園・宿・大佐地区と北上川の氾濫原微高地である高玉地区、西は小金沢・達谷地区などである。

拠点地区には現在、中尊寺境内、毛越寺跡附鎮守社跡、無量光院の3カ所が特別史跡に、柳之御所遺跡1カ所が国の史跡に指定されており、平成15年度には金鶏山遺跡が史跡指定の答申を受けている。本遺跡は、この拠点地区の北東部の一角を占めており、国指定特別史跡中尊寺とは国道4号線を境に西側で接し、同様に南東側で高館遺跡と接している。

次に、図幅中に示している遺跡の中で、過去に当埋蔵文化財センターによって調査された遺跡について述べることにする。



＜志羅山遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北半に位置する。平成4・5・7・9・10年度に発掘調査が行われた。調査の結果、道路状遺構・池・建物跡・柱列・井戸・溝跡・土坑などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。

＜泉屋遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北半に位置する。平成5・6・7・8・11・12年度に発掘調査が行われた。調査の結果、堅穴住居跡・堅穴建物・建物跡・井戸・土坑・溝跡・柱列・焼土・カマド状遺構・土器埋設遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、縄文時代・古代・12世紀・13世紀後半～14世紀前半・近世・近代と多岐にわたっている。

＜花立I遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北側に位置する。平成6・7・8年度に発掘調査が行われた。調査の結果、堅穴住居跡・建物跡・土坑・柱穴列・溝跡・便所遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は平安時代が中心となっている。

＜衣闌遺跡＞平泉町の中心部、北上川の西の平泉段丘の北側に位置する。平成9年度に発掘調査が行われた。調査の結果、土坑・溝跡・堀跡・石敷遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。

＜矢崎I遺跡＞平泉町の中央部を南流する北上川の東側の氾濫平野と丘陵地の境界付近に位置する。平成12年度に発掘調査が行われた。調査の結果、堅穴住居跡・堅穴状遺構・溝跡・土坑などが検出された。堅穴住居跡は平安時代・堅穴状遺構は縄文時代に属するようである。

＜里遺跡＞平泉町の中央部を南流する北上川の東側の氾濫平野と丘陵地の境界付近に位置する。平成12年度に発掘調査が行われた。調査の結果、堅穴住居跡・井戸・土坑・溝跡・カマド状遺構・建物跡・陥し穴・柱穴などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、弥生時代・平安時代・12世紀と多岐にわたっている。

＜本町II遺跡＞平泉町の中央部を南流する北上川の東側の自然堤防上に位置する。平成13年度に発掘調査が行われた。調査の結果、堅穴住居跡・工房跡・住居状遺構・畠跡・土器埋設遺構・焼土遺構・堀跡・溝跡・周溝・墓壙・道路状遺構・建物跡・柱穴列・配石・井戸跡・カマド状遺構・炭窯・土坑・柱穴などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世と多岐にわたっている。

＜六日市場遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・柱穴・溝跡・土坑などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。遺構は西隣の細田遺跡に連続していくようである。

＜細田遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・柱穴・溝跡・土坑などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀と近世である。遺構は東隣の六日市場遺跡・西隣の接待館遺跡と連続していくようである。

＜接待館遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・柱穴・溝跡・堀跡・土坑・堅穴住居跡・焼土などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は、12世紀が中心となるが、出土遺物から建物跡の中には中世に属するものもあると推測されている。遺構は、東隣の細田遺跡と切れ目無く連続していくようである。

＜衣の関道遺跡＞奥州市衣川区の南東部、衣川北岸の河岸段丘上に位置する。平成17年度に発掘調査が行われた。調査の結果、建物跡・土坑・溝跡・池状遺構・テラス状遺構・墓壙・カマド状遺構などの遺構が検出された。これらの遺構の所属年代は12世紀が中心となっている。

(菅野)

表1 周辺の遺跡

No.	市町村名	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	平泉町	糸ヶ城(和泉ヶ城)	散在地・城跡跡	縄文・平安	縄文土器、石器、土師器
2	平泉町	瀬原日	散在地	(奈良)・平安	土師器
3	平泉町	里	散在地	平安	土師器
4	平泉町	里前II	散在地	平安	土師器
5	平泉町	里前I	散在地	平安	羽口
6	平泉町	本町	散在地	平安	土師器、墓域
7	平泉町	二反田II	散在地	縄文	縄文土器
8	平泉町	森の沢	散在地	縄文	土器
9	平泉町	畠中	散在地	平安	土師器
10	平泉町	中尊寺	散在地・寺社跡・経塚	縄文・平安	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器、池跡、木製品、壇跡、石器
11	平泉町	鈴懸の森	経塚	平安	陶磁片
12	平泉町	大沢	散在地	縄文	縄文土器、石器
13	平泉町	毛道II	寺跡跡	平安	
14	平泉町	毛道III	寺跡跡	平安	
15	平泉町	坂下	散在地・寺社跡	平安	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
16	平泉町	衣門	寺跡跡・墨敷地	平安	かわらけ、陶器片、建物跡
17	平泉町	高瀬(衣向館)	城址跡	縄文・平安	「塗」、堤、かわらけ
18	平泉町	別開問切湖	池跡	平安	池跡、かわらけ、陶磁器
19	平泉町	柳之御所	城址跡	平安	かわらけ、陶磁器、壺、罐
20	平泉町	童ヶ坂	散在地	縄文	縄文土器
21	平泉町	佐藤屋星雲	城址跡	平安	
22	平泉町	新田	散在地	縄文	縄文土器
23	平泉町	久峰II	散在地	土器	
24	平泉町	久峰I	散在地	平安	土師器
25	平泉町	金剛山	城跡	平安	塗、壺、鉢
26	平泉町	無量光院	寺跡跡	平安・近世	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
27	平泉町	形立I	寺社跡・城跡跡	平安	健石、塗、かわらけ、陶磁器
28	平泉町	花立II	寺跡跡	平安	瓦、かわらけ、陶磁器
29	平泉町	伽羅之御所	城趾跡	平安	十塗、かわらけ、陶磁器
30	平泉町	白山社	寺跡跡	平安	かわらけ、木製品、土壘、塙、踏脚
31	平泉町	毛利跡	寺跡跡	縄文・平安・近世	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
32	平泉町	銀行在千院	寺跡跡	平安	伽藍遺構、かわらけ、陶磁器
33	平泉町	新井の池	油井跡		
34	平泉町	志羅山	散在地・笠置跡	平安・中近世	かわらけ、陶磁器
35	平泉町	合町	扇形跡	平安	かわらけ、陶磁器
36	平泉町	泉塩	散在地	縄文・平安・中近世	かわらけ、陶磁器
37	平泉町	国香館	城趾跡	平安・中世	かわらけ、陶磁器
38	平泉町	下柄	散在地	近世	塙
39	奥州市	桜瀬	城跡	近世	塙
40	奥州市	御城場	城跡跡	近世?	
41	奥州市	衣川園(杉木屋敷)	城趾跡	中世?	平塙
42	奥州市	大手	城趾跡		
43	奥州市	雪森			
44	奥州市	家の樹			
45	奥州市	九龍塔	墳墓		墓石
46	奥州市	宿(上宿)	石垣跡		
47	奥州市	下宿	散在地	縄文	縄文土器
48	奥州市	流の辻切岸敷	城跡跡		築脚
49	奥州市	七戸市場	市街跡		須恵器
50	奥州市	接待館	城跡跡	中世	「塗」、土師器、郭
51	奥州市	六斗市場	市街跡		
52	奥州市	衣の間道	闕跡跡・散在地	古代	土師器、須恵器
53	奥州市	源澤	散在地	縄文・古代	縄文土器、土師器
54	奥州市	池田	散在地	縄文・古代・近世	石器(縄文)
55	奥州市	上野	散在地	近世?	陶磁器片
56	奥州市	清水の上	散在地		
57	奥州市	緑田	散在地	縄文・近世	石器(縄文)

II章 1・2・4 参考文献

岩手県農政部北上山系開発室 1978『北上山系開発地域 土地分類基本調査 一回』

岩埋文 1995『伊達山遺跡第14・25次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第216集

岩埋文 1997『泉屋遺跡第10・11・13・15・15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集

岩埋文 1999『花立I遺跡(第9次・第12次・第13次)・衣間濱跡(第5次)発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第285集

岩埋文 2000『伊達山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集

岩埋文 2001『久峰I・道跡第1・1次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第372集

岩埋文 2002『伊達山遺跡第46・66・74・21次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第383集

岩埋文 2003『泉屋遺跡第16・17・21・21次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第399集

岩埋文 2003『本町I遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第410集

平泉町教育委員会 2004『中尊寺跡第65次発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第84集

※岩埋文=岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

5 調査履歴

これまでに実施された坂下遺跡の調査は下表の通りである。

表2 調査履歴一覧

	年	調査機関	調査の種類	事業者	原因	遺構	遺物
1次	昭和 56	平泉町教育委員会	(調査のみ)		駐車場建設		
2次	平成 7	平泉町教育委員会	試掘	平泉町	駐車場建設	近世末～近代礎石建物1棟、土坑1基、石敷遺構	近世末～近代遺物が主体。12世紀陶磁器片少量。
3次	平成 10	平泉町教育委員会	試掘	民間	店舗建設	なし	かわらけ片(擾乱層から)
4次	平成 15	岩手県教育委員会	試掘	岩手県	道路		
5次	平成 17	平泉町教育委員会	試掘	個人	住宅建設	なし	近現代陶磁器
6次	平成 17	岩手県教育委員会	試掘	国交省	鉄道	柱穴	
7次	平成 17	岩手県教育委員会	試掘	国交省	道路	土坑、構	かわらけ
8次	平成 17	岩手県教育委員会	試掘	国交省	鉄道	柱穴	
9次	平成 18	岩手県埋文センター	本発掘	国交省	鉄道	柱穴	かわらけ
10次	平成 18	岩手県埋文センター	本発掘	国交省	道路		
11次	平成 18	平泉町教育委員会	本発掘	民間	施設建設		

平泉町教委による坂下遺跡第1次調査は、隣接する中尊寺の第26次調査と重複してカウントされたものであるが、調整の結果、掘削を伴う調査は発生していない。第6～8次は第9次・第10次（今次調査）に先立って岩手県教育委員会が実施した一関遊水地事業関連の試掘調査である。

(村上)



第4図 過去の調査地点

III 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) 調査区(第5図)

登録されている坂下遺跡の範囲は、南北約700m・東西約250m、面積にして約17万5千m²に及ぶ。今回の調査区は、遺跡範囲の北西部に位置し、岩手県教育委員会が実施した試掘調査の結果本発掘調査を要すると判断された、幅約30~60m・全長約300mの範囲である。調査区は南西部で現国道4号と接し、これと分岐するように北東方向へと延びている。

周辺はほぼ東西・南北に軸の描った畦畔が連なる水田地帯で、調査区はこの中を縦断している。本次調査では、この水田区画を利用し、便宜的に調査区を①~⑨区に区分した。

(2) グリッド設定と基準点(第5図、表3)

検出される各種遺構・遺物の詳細な座標値を記録するため、調査区を覆う基盤目状のグリッドを設定した。まず、調査対象区域の北西側に原点(世界測地系、平面直角座標第X系、X=-110,500・Y=23,600)を設け、ここから南及び東にのびる軸線を等分して100×100mの大グリッドを設定した。さらに大グリッドの一辺を25等分して小グリッド(4×4m)とした。

大グリッドは北から南に向かってローマ数字I~V、西から東に向かって英大文字A~Bとして「IA」または「IB」のように表し、さらに小グリッドも同様に北側から順に算用数字1~25、西側から順に英小文字a~yとして「1a」ま

たは「2b」のように表した。特定の小グリッドを指し示すには、これらを組み合わせて「IA 1a」のように表記した。現地では各小グリッドの北西隅に位置する杭にその名称を表記して用いた。本書中の平面図でも同様に小グリッドの北西隅に位置する杭点にグリッド名を併記している。

上記のグリッドを実際に調査区に割り付けるため、現地には基準杭及び区画割付杭を打設した。基準点測量業務は㈱総合土木コンサルタンツに委託した。基準杭及び区画割付杭の第X系座標値・標高値、及び対応するグリッド杭名は右表の通りである。

(3) 試掘・表土除去

調査ではまず対象区域に任意に試掘トレンドを設定し、重機・人力を併用して土層の堆積状況と遺構の存否を把握した。試掘により遺構・遺物が存在しないことを確認した範囲はこれをもって調査終了とし、一方、遺物包含層および遺構が確認された場合は、その上面を面的に広げるよう土層を除去した。この際、バックホー・キャリアダンプ等の重機を積極的に用いたが、検出面までの上層が薄い場合や遺物が集中的に出土する場合など、重機の使用が適当でないと判断した区域では人力による掘削を行った。

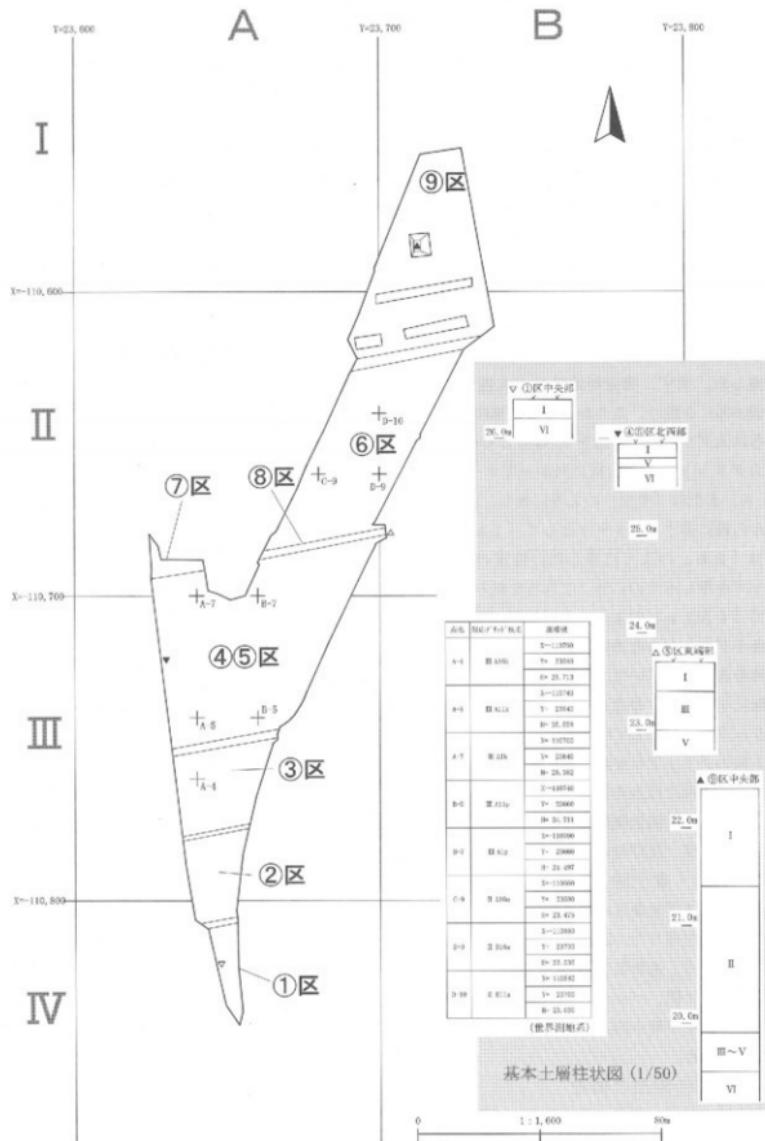
(4) 遺構の検出と精査

表土除去の後、鋤簾(じょれん)・両刃草刈り・移植ベラを用いて遺構検出を行い、必要に応じてスプレー塗料による白線で遺構プランにマーキングを施した。

表3 基準点一覧

点名	対応するグリッド杭名	X座標	Y座標	標高
A-4	III A 16 k	-110760	23640	25.713
A-5	III A 11 k	-110740	23640	25.558
A-7	III A 1 k	-110700	23640	25.382
B-5	III A 11 p	-110740	23660	24.711
B-7	III A 1 p	-110700	23660	24.497
C-9	II A 16 u	-110660	23680	23.475
D-9	II B 16 a	-110660	23700	23.036
D-10	II B 11 a	-110640	23700	23.030

(世界測地系)



第5図 調査区とグリッド配置

精査では遺構の規模や性質に応じて2分法・4分法を使い分け、土層断面を観察しながら埋土を除去した。検出時に遺構の重複が認められた場合、なるべく平面観察で新旧関係を把握するように努め、原則として新期のものから順に埋土の掘削を行った。この場合、両者を縦断する断面を設定し上層の堆積状況からも併せて新旧関係を検討した。また、平面プランの確定や埋土の解釈が困難な場合には、積極的にサブトレンチを活用してこれらの確認に努めた。これにより完掘段階には平面プランの一部がサブトレンチで續された状態になったものも含まれる。遺物は、遺構名やグリッド名および出土層位を記録して取上げ、必要に応じて出土状況図の作成・写真撮影を行った。

(5) 遺構名

① 野外調査での仮名称

遺構には検出時点に随時固有の仮名称を与えた。仮名称には区名を示す丸数字を冠し、その後ろに遺構略号と数字を組み合わせ、「⑥SKO1」のように表記した。遺構略号としては、S B=建物跡、S D=溝跡、S I=住居跡、S K=土坑、pp=柱穴状土坑などを用いている。ただし、精査の初段階で遺構種別が判然としない場合などは、「○○グリッド付近暗褐色土落ち込み」のように特徴を端的に示す語を付し、遺物の取り上げや諸記録に用いた。

以上の仮名称は、室内整理段階でも作業用遺構名としてそのまま用いた。

② 本書中の掲載名称

遺構名は、掲載にあたって仮名称を変更し、遺構種名を冠した1からの連番とした（「土坑1」・「陥穴2」など）。一方、柱穴状ピットは改名せず「pp ○」として調査時の名称をそのまま用いた。ただし、調査の過程で名称が不明となったものや未命名のままだったものには、pp101で始まる連番名を新たに与えた。本書ではこれらの柱穴群から建物跡を構成すると思われる柱穴を抽出し、建物跡復元案として「建物跡！」のように示した。また、溝跡についても室内整理によって得られた検討結果を反映させた新たな名称を与えている。

(6) 実測

遺構や出土状況などの平面実測は、小グリッドを再細分した1m方眼を基準に実測・作図する「簡易直り方測量」を行った。縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10図を作成した。このほか平板・光波トランシットを用いて、トレンチ位置図・遺構配置図・現況地形図等の作成を行い、調査区主要部については、（株）シン技術コンサルに委託し、ラジコンヘリによる写真測量を行った。

断面図は水平に設定した水系を基準にして実測・作図した。縮尺は1/20を基本とし、細部表現を要する場合には1/10図も作成した。

(7) 土層断面の分層と注記

遺構やトレンチなどの土層断面は慎重に観察し堆積状況を把握するよう努めた。分層は堆積過程を表現するのに必要と思われた場合は細部にも配慮したが、薄層が連続的に互層をなす部分や、偶然の結果と思われる混入物の偏りなどは徒らに細分せず、有意と思われるまとまりの境界を表現した。

この分層の根拠を示すため、各層の性状を記録した。土層は主土と混入土（物）によって構成されるものと考え、色調・土性・混入物・粘性・締まりの程度等を記載した。また、解釈可能な場合は、その層の持つ性格を想定し付記した。

遺構埋土等の堆積層の「主土上」には、認識可能な場合、その層が堆積した時点で周辺の表土を形成していたと思われる土（埋没開始時点における最新期の土）をあてた。例えば地山土のブロックが大半を占める遺構の壁の崩落層であっても、当時の表土と思われる黒色土が僅かに含まれている場合は、後者を主土とし、「地山土が大量に混入している状態」と解釈している。主土と基本土層の

対比から、その層の堆積時期を推定することが可能だと考えたからである。

土色の表記は新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局）に準じたが、調査員が受ける層間の印象の差が土色名の違いとして反映されない場合も多くあった。このため、各層の記録には調査員個人による相対的な層全体の印象（明暗や色味の差）も併記した。例えば、「○層よりも明るい」・「焼土含み全体に赤味」・「炭化物多く黒味強」・「地山土含み黄味がかる」などの表現がこれにあたる。また混入物の量について「極微」・「やや多」等の表記を行っているが、調査員の主観的基準を土色帖に示されているパーセント表記に置き換えれば、概ね、極微（1～2%）・微（3～5%）・少（5～10%）・やや多（15～20%）・多（30～50%）・大量（50%以上）となろうか。

(8) 写 真 摄 影

野外調査では $6 \times 7\text{ cm}$ 判カメラ（モノクロ）、 35 mm 判カメラ（カラーリバーサル）、デジタルカメラを用い、各種遺構の全景・土層断面・遺物出土状況等を撮影した。撮影に際しては、撮影状況を記したカードをその都度写し込み、現像後これを元に整理した。なお、一部の遺構ではいざれかのカットを省略した場合がある。また、カメラの故障などで必要なカットを撮影できなかつたものも含まれる。またこれらとは別に、ラジコンヘリによる空中写真的撮影を行つた。

(9) 遺構の保全・埋め戻し

今次調査では、岩手県教育委員会の指導により、12世紀の遺構面までを記録対象とすることとなつた。12世紀の遺構については報告書作成に必要なデータを確保しつつ、必要以上の破壊を行わないよう留意した。「池状遺構」や土坑・溝の一部では、埋土の掘り上げを一部に限定し、断面の観察・記録にはサブトレレンチを活用した。「敷石遺構」でも、礫面の除去は行わず、礫面以下の観察にはサブトレレンチを利用し断面の観察・記録を行つた。「池状遺構」・「敷石遺構」とともに、断面観察に用いたベルトは除去せずそのまま埋め戻すこととしたため、調査終了時の図・写真等にはこれらが残つた状態で記録されている。しかしながら、度重なる降雨・冠水によりベルトの崩壊が進み、結果的には良好な状態で保存できたとは言い難い。調査終了後は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の了解のもと、遺構が集中する調査区中央部（④～⑧区）については埋め戻しの材として山砂を用い、遺構面の上を 50 cm の厚さで覆うように敷きならして遺構面の保全を図つた。

2 室 内 整 理

(1) 作 業 手 順

山上遺物の洗浄と地点別の仕分け作業、土器を除く各遺物の分類は、野外調査と並行して現地で行つた。野外調査終了の後、室内において上器の接合・復元作業を開始し、隨時掲載資料の選別、登録を行つた。その後、実測図作成・拓影作成・トレースの順に作業を進めた。調査員はこれらの作業の統括と並行して図面合成・遺物観察表作成・原稿執筆を行つた。

(2) 遺 構

各遺構は必要に応じて第2原図を作成し、これをもとにトレースののち図版を作成した。図中には縮尺を示すスケールを付し、方位マークで座標北を示した。

(3) 遺 物

土器は出土地点・遺構別に分けた後、掲載に適した資料を選抜し、実測等の作業対象資料とした。全ての遺物についての掲載番号・出土地点・層位・計測値・その他観察事項等を記載した一覧表を作成した。なお、実測図から読みとれる属性については、記載を省略したものもある。各図版には掲載縮尺を示すスケールを付している。

IV 検出遺構と出土遺物

1 概 要

(1) 検出遺構と出土遺物

① 12世紀

＜遺構＞ 挖立柱建物跡4棟、敷石遺構1箇所、池状遺構1箇所、取水口状遺構3箇所、土坑12基、溝跡13条。

＜遺物＞ かわらけ（ロクロ・てづくりね）、国産陶器（渥美・常滑・須恵器系ほか／甕・鉢）、中国産白磁（碗・壺・皿）[以上、大コンテナ5箱]、刀子・鉄釘[各数点]・木梶[1点]。

② 古代（平安時代前期）

＜遺構＞ 壁穴住居跡1棟、陥し穴状遺構6基、沢跡2条。

＜遺物＞ 土師器（壺・甕）・須恵器（壺・甕）[以上、小コンテナ1箱]・刀子

③ 縄文時代

＜遺構＞ なし

＜遺物＞ 上器細片（時期不明、後晩期か）[小袋1]・石器（石鏃・石錐・石匙・剥片）[各数点]

④ その他

＜遺構＞ なし。上記の一部（柱穴等）に含まれている可能性あり。

＜遺物＞ 近世以降の陶磁器[中コンテナ1箱]・鉄釘・煙管雁首・煙管吸口・銭貨（寛永通宝）

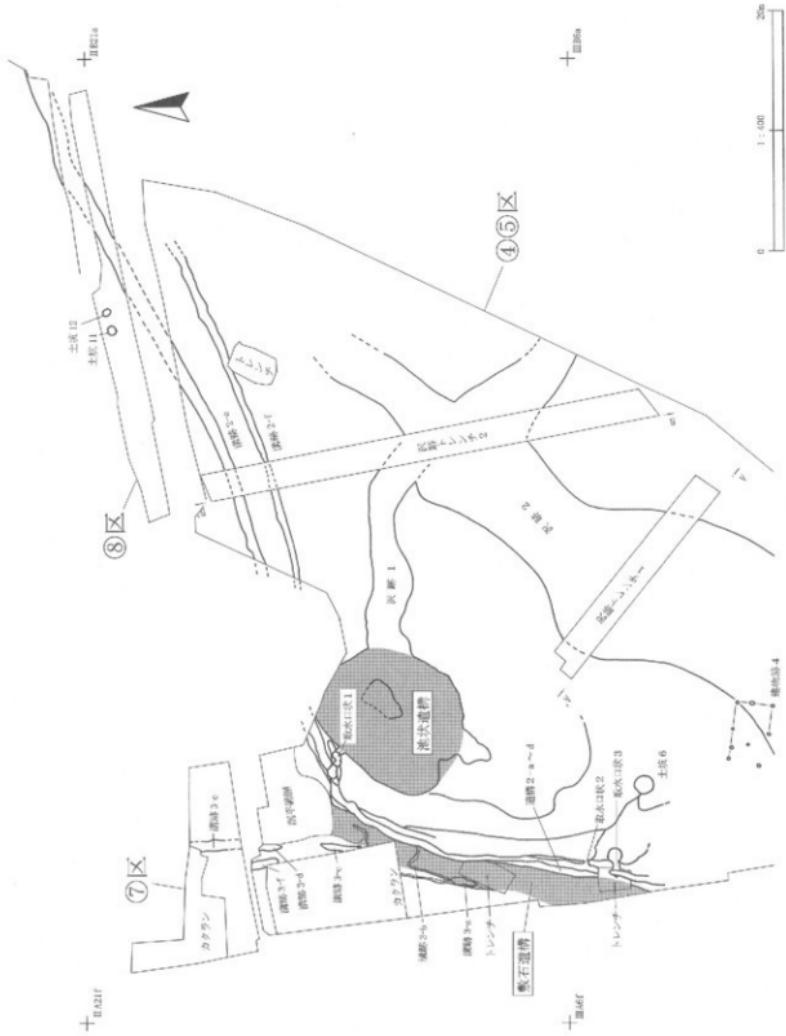
(2) 成 果 の 概 要 (第6・7図)

今次調査区は閑山丘陵の東側縁辺に接する緩斜面地に立地し、その中央部は閑山側からのびる沢跡に挟まれた舌状の微高地となっている。上記の遺構・遺物は、主にこの微高地周辺（⑥・⑦・⑧区）から検出されたものであり、12世紀に帰属するものが主体となっている。一方、微高地の周縁（④・⑤区南東部及び⑨区）は、洪水土砂に幾度も被覆されている低位面へと連続しており、遺構・遺物ともに著しく希薄であった。

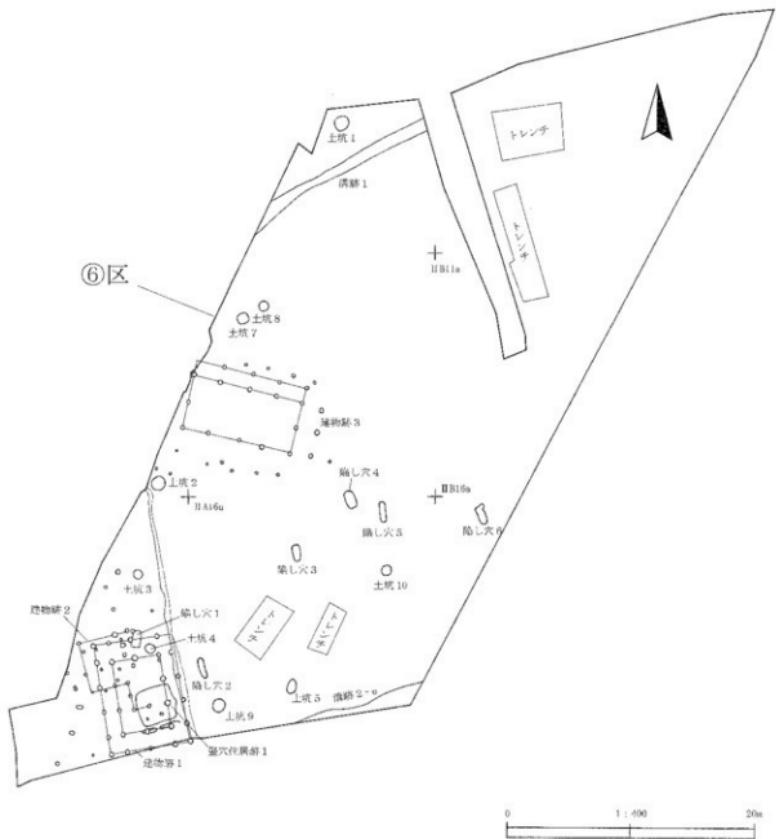
掘立柱建物跡を構成する12世紀の柱穴と直径1m前後の円形土坑は、北辺と南辺を溝で区画された微高地頂部（⑥区）に集中して分布していた。四面に扉を持つ建物跡（建物跡1）は微高地南縁の区画溝（溝跡2-e）に面しており、本建物跡の前面（南東面）付近からは概ね12世紀第3四半期に帰属するかわらけ等の遺物がまとまって出土した。今次調査区において遺物の集中が最も顕著なのがこの地点であった。

一方、調査区西側の閑山（中尊寺）に接する地点（④⑤区西縁部）からは、ほぼ南北方向に走行する帶状の敷石面が検出された。側溝状の溝を両脇に伴っており道路跡と推定される。東縁の側溝は途中で東向きに屈曲し微高地南辺の区画溝へと連続している。屈曲部付近では敷石面の幅が広くなりテラス状の高まりが生じていることから、この箇所が南北走行の道路と東側から上ってくる別の道路との合流点であった可能性もある。さらに、屈曲部の下方には池状の落ち込みが検出された（「池状遺構」）。遺物の集中廃棄などはみられないが、山上遺物は12世紀代のものに限定される。

以上の遺構群は、一時期、中尊寺の寺域の一部を構成していた可能性が高いものと思われる。



第6図 遺構配置図(1) -④⑤・⑦・⑧区-



第7図 遺構配置図(2) -⑥区-

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡

建物跡1(第8図、写真図版2)

〔位置〕⑥区南西部、II A 20 t グリッド杭付近に位置する。

〔重複〕建物跡2のプランと重複する。

〔平面形式〕 3×2 間の身舎の四面に廟を伴う掘立柱建物である。桁行き 900 cm、梁間 650 cm である。

〔建物方位〕N -81° - E (梁)、N - 9° - W (桁)。

〔住間寸法〕身舎の柱間は 200 cm、廟は桁方向で 150 cm、梁方向で 120 cm である。

〔付属施設?〕南面廟 pp84・86 の南側に、梁行方向と平行して並ぶ2基の土坑が検出された(土坑11・12)。自然の流入上によって埋没した浅い落ち込みであり柱穴ではない。本建物に伴う何らかの施設か、雨垂れ等の痕跡の可能性があろう。

〔出土遺物〕(第34・45図、写真図版28・34)

建物構成柱穴の多くは埋土に上師質の土器縦片を含んでいた。このうちpp84から出土したてづくねかわらけの破片(6)1点を掲載した。柱穴からはこのほか鉄釘(303・306)が出土している。須恵器壺(4)、土師器壺(5)の口縁部破片は近接する平安時代住居跡からの混入であろう。本建物跡の付近の検出面からは常滑産陶器片(7・8)の出土もみられた。本遺構付近では多くの12世紀遺物が出土しており、特に建物跡の南東側に近接した溝跡2-eの検出面(⑧区周辺)には、かわらけや陶器類が集中的に分布している。第41~44図に示した「⑥区南縁周辺」の出土遺物(178~240)がこれにあたる。12世紀第3四半期を中心とするかわらけ、陶磁器類である。

〔帰属年代〕平面形態や柱穴埋土の主体土及び出土遺物から12世紀代に帰属すると思われる。

建物跡2(第9図、写真図版2)

〔位置〕⑥区南西部、II A 19 s 付近に位置する。

〔重複〕建物跡1のプランと重複する。

〔平面形式〕柱配置の復元が不完全であるが、東西方向に主軸を持ち南面に張り出しを持つ形態と考えられる。

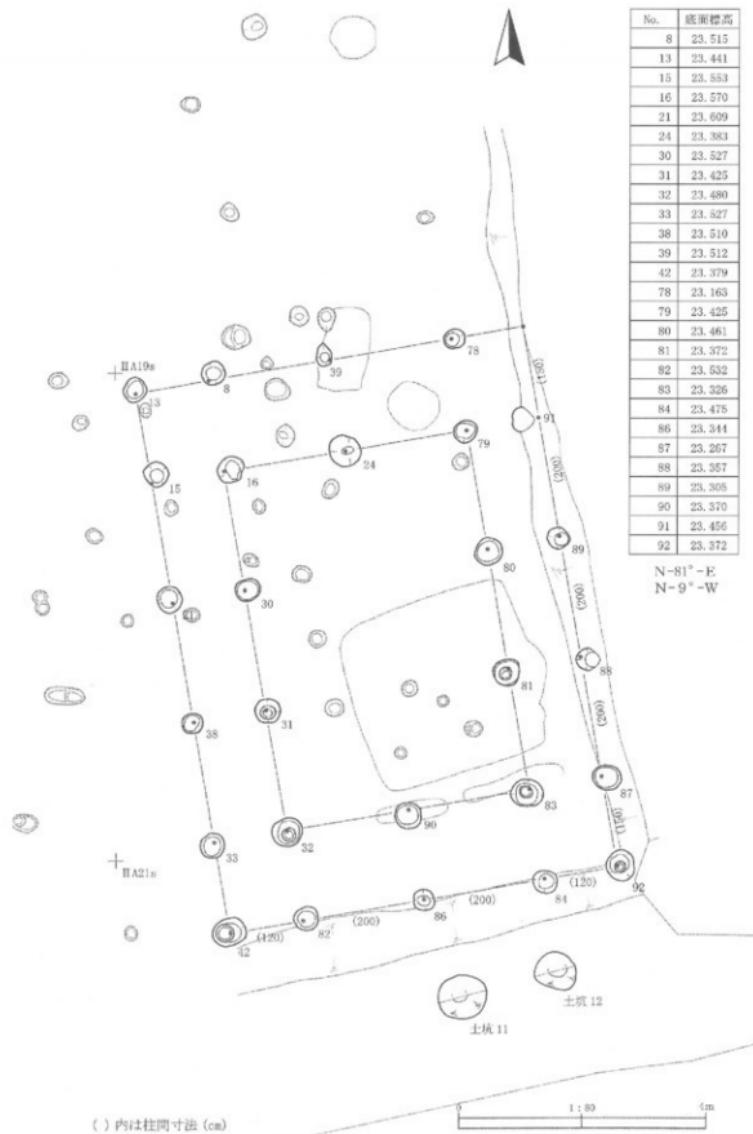
〔建物方位〕N -14° - E (梁)、N -76° - W (桁)。建物跡3と軸方位を同じくする。

〔柱間寸法〕桁方向で 120 cm・300 cm、梁方向で 150 cm・270 cm、張り出し部では 120 cm となっている。

〔出土遺物〕(第34図、写真図版28)

建物構成柱穴から掲載可能な遺物の出土はなかった。常滑産陶片(7・8)、近世軒平瓦片(11・12)はいずれも本建物跡及び建物跡1が位置する⑥区南西部の検出面から出土したものであり、本遺構との関連をもつ可能性がある遺物である。須恵器壺破片(10)は付近の平安時代住居跡からの混入と見られる。

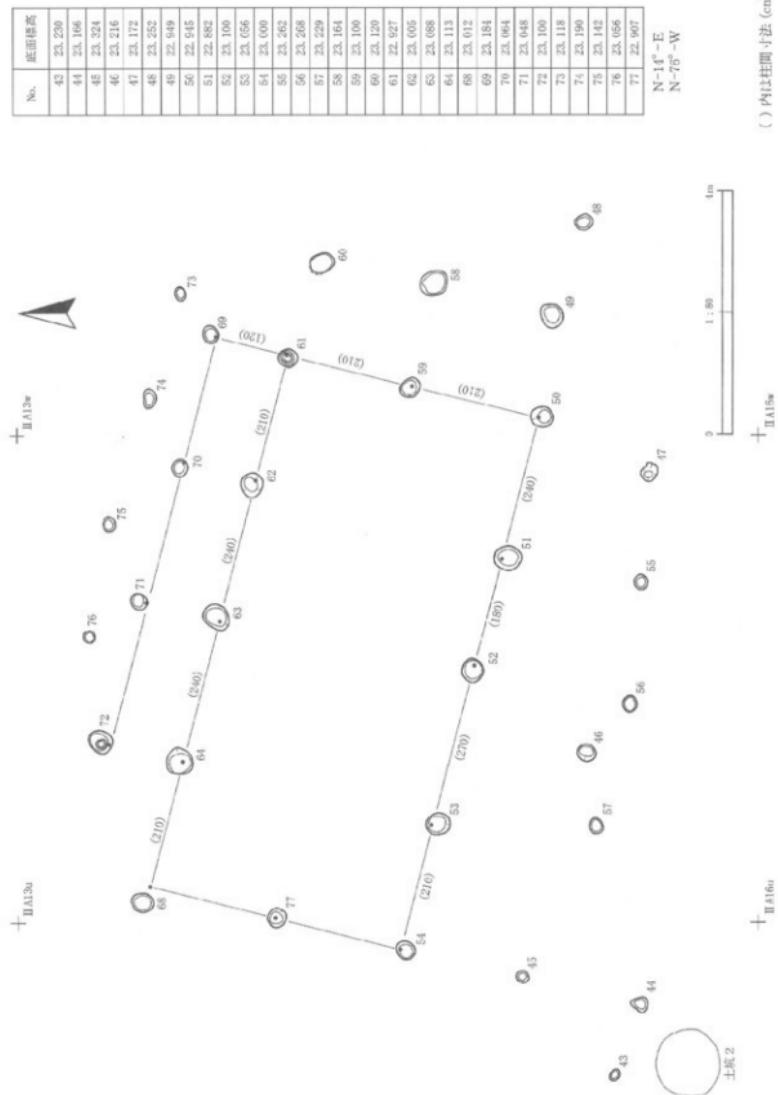
〔帰属年代〕出土遺物から12世紀代後半を上限とする。埋土主体土は他の12世紀遺構に似るが下限年代確定の根拠を欠く。



第8図 建物跡1



第9図 建物跡 2



第10図 建物跡3

建物跡3（第10図、写真図版3）

〔位置〕⑥区中央西部、II A 14 v グリッド杭付近に位置する。

〔重複〕本建物跡は柱穴群から抽出したものであり、周囲の他の柱穴が構成する建物跡等とプランの重複がある可能性がある。

〔平面形式〕4間×2間の身舎の北側に廂を伴う掘立柱建物であると思われる。桁行き 900 cm、梁間 540 cm。周囲には軸方向を同じくする柱穴列が認められ、これらが本建物に伴う可能性がある。

〔建物方位〕N-14° - E（梁）、N-76° - W（桁）。建物跡2と軸方位を同じくする。

〔柱間寸法〕身舎は桁方向で 180 ~ 270 cm、梁方向は 210 cm、廂は 120 cm である。

〔出土遺物〕（第34・45図、写真図版28・34）

建物構成柱穴の一つ、pp70 からは常滑産鉢の破片が出土した。また pp53・pp63 からは鉄釘（307・308）も出土している。本建物跡の東辺に平行する柱穴 pp49 からは渥美産（2）及び常滑産（3）の甕破片が出土している。

〔帰属年代〕出土遺物から12世紀代後半を上限とする。埋土主体土は他の12世紀遺構に似るが下限年代確定の根拠を欠く。

建物跡4（第11図、写真図版3）

〔位置〕④⑤区南西部、III A 10 1 グリッド杭付近に位置する。

〔重複〕十和田a降下火山灰層を切る。重複する遺構はない。

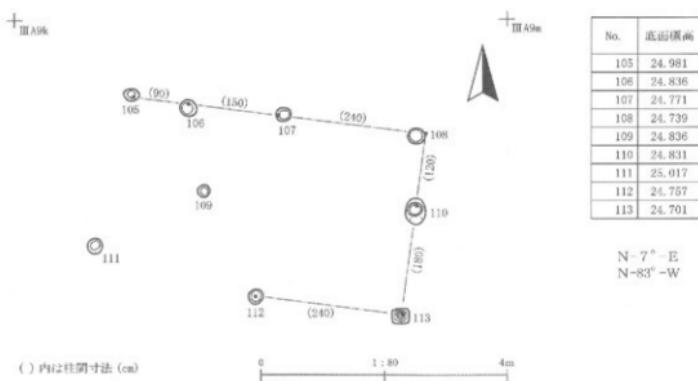
〔平面形式〕柱配置の復元が不完全であるが、東西方向に主軸を持つ形態と考えられる。

〔建物方位〕N-7° - E（梁）、N-83° - W（桁）。

〔柱間寸法〕桁方向では 90 cm・150 cm・240 cm、梁方向では 120 cm・180 cm である。

〔出土遺物〕なし。

〔帰属年代〕十和田a降下火山灰層を切るために10世紀代を上限とする。下限年代は不明である。



第11図 建物跡4

表4 柱穴一覧

No.	区	アグリッド	掘り方(万字)	柱穴	剖面	柱高さ (cm)	上面標示	側面標示	実測 (新>旧)	柱上構物(複数基)	
							土質	柱入物	柱底標示	柱上標示(複数基)	柱上構物(複数基)
1	②	II A 17z	10YR3/3 ~ 4/3	粘シ	地山堅微・根幹堅微	20	23,482	-	-	-	土質質上器片
2	②	II A 17z	10YR3/4	シ	地山堅微・根幹堅微	-	23,644	-	-	-	土質質上器片
3	②	II A 18z	10YR3/4	シ	地山堅少	16	23,599	-	-	-	-
4	②	II A 18z	10YR3/1 ~ 4/4	砂シ	地山堅微	-	23,563	-	-	-	-
5	②	II A 18z	10YR3/4 ~ 4/4	砂シ	地山堅微	-	23,620	建物跡 2	-	-	-
6	②	II A 18z	10YR3/2 ~ 3/3	シ	地山堅微	-	23,635	-	-	-	-
7	②	II A 18z	10YR3/3	粘シ	地山堅少	-	23,677	建物跡 2	-	-	-
8	②	II A 18z ~ 19z	10YR3/3	粘シ	地山堅少	16	23,515	建物跡 1	-	-	-
9	②	II A 19z	10YR3/3	粘シ	地山土ブロック微	-	23,673	-	-	-	-
10	②	II A 19z	10YR3/3	粘シ	地山土ブロック微	-	23,649	-	-	-	-
11	②	II A 19z	10YR3/3 ~ 1/3	粘シ	地山堅少や多	-	23,725	建物跡 2	-	-	-
12	②	II A 19z	10YR3/3 ~ 4/3	粘シ	地山堅微	-	23,597	-	-	-	-
13	②	II A 19z	10YR3/3 ~ 1/3	粘シ	地山堅多	17	23,413	建物跡 1	-	-	-
14	②	II A 19z	10YR3/3 ~ 4/3	粘シ	地山堅多	12	23,516	-	-	-	-
15	②	II A 19z	10YR3/3 ~ 4/3	粘シ	地山堅多	12	23,553	建物跡 1	-	-	-
16	②	II A 19z	10YR3/3	シ	地山土ブロック少・泥分微	-	23,570	建物跡 1	-	-	-
17	②	II A 19z	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	-	23,671	-	-	-	-
18	②	II A 19z	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	-	23,620	-	-	-	-
19	②	II A 19z	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	-	23,641	建物跡 2	-	-	-
20	②	II A 19z ~ 20z	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	-	23,795	建物跡 2	-	-	-
21	②	II A 19z	10YR3/3	シ	地山堅少や多	16	23,669	建物跡 1	-	-	-
22	②	II A 19z ~ 20z	10YR3/3	シ	地山土ブロック微	-	23,753	建物跡 2	-	-	-
23	②	II A 19z	10YR3/4	シ	地山堅少や多	-	23,674	-	-	-	-
24	②	II A 19z	10YR3/3	シ	地山堅多	16	23,383	建物跡 1	-	泥質面付口部裂片(4)	-
25	②	II A 19z	10YR3/4	シ	地山堅少	-	23,435	建物跡 2	-	-	-
26	②	II A 20z	10YR3/3 ~ 4/3	粘シ	地山堅少	-	23,631	建物跡 2	-	-	-
27	②	II A 20z	10YR3/3	シ	地山堅少	-	0,000	-	-	-	-
28	②	II A 20z	10YR2/3	シ	地山土ブロック少	-	23,655	-	-	-	-
29	②	II A 19z	10YR2/3	シ	地山土ブロック微	-	23,652	-	-	-	-
30	②	II A 19z	10YR2/1	シ	地山堅多	12	23,327	建物跡 1	-	土質質上裂片・鉄剣(303)	-
31	②	II A 20z	10YR2/3	シ	地山堅微	-	23,425	建物跡 1	-	十面質土器片	-
32	②	II A 20z	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	-	23,490	建物跡 1	-	土質質土器片	-
33	②	II A 20z	10YR2/3	シ	地山土ブロック少や多	14	23,327	建物跡 1	-	-	-
34	②	II A 21z	10YR3/3	シ	-	-	23,758	-	-	-	-
35	②	II A 19z	10YR2/3	シ	-	-	23,775	< 36	-	-	-
36	②	II A 19z	10YR3/4	シ	地山堅多	-	23,790	> 35	-	-	-
37	②	II A 19z	10YR2/4	シ	地山堅少	-	23,638	-	-	-	-
38	②	II A 20z	10YR3/3	シ	地山堅多	11	23,510	建物跡 1	-	土質質土器片	-
39	②	II A 18z	10YR3/4	シ	地山土ブロック少	-	23,512	建物跡 1	> 肩穴(1)	-	-
40	②	II A 20z	10YR2/3	シ	-	-	23,512	-	-	-	-
41	②	II A 21z	10YR2/3	シ	地山土ブロック少や多	-	23,726	-	-	-	-
42	②	II A 21z	10YR3/3 ~ 4/3	シ	地山堅多	16	23,379	建物跡 1	-	土質質土器片	-
43	②	II A 18z	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	-	23,239	-	-	-	-
44	②	II A 18z	10YR3/3	シ	地山土ブロック少	-	23,166	-	-	-	-
45	②	II A 18z	10YR2/3	シ	-	-	23,324	-	-	-	-
46	②	II A 15z	10YR3/3 ~ 3/4	シ	地山堅微・無土粒微	-	23,216	-	-	-	-
47	②	II A 15z	10YR2/3	シ	地山堅微	-	23,172	-	-	-	-
48	②	II A 15z	10YR2/4	シ	地山堅微	-	23,252	-	-	-	-
49	②	II A 15z	10YR2/4	シ	地山堅微	-	22,949	-	-	井戸壁(2)・水槽壁(3)・土質質土器片	-
50	②	II A 15z	10YR2/4	シ	地山堅微	-	22,943	建物跡 3	-	-	-
51	②	II A 14z ~ 15z	10YR2/4	シ	地山堅微	-	22,852	建物跡 3	-	-	-
52	②	II A 14z ~ 14v	10YR2/4	シ	地山堅微	-	23,100	建物跡 3	-	鉄剣(307)	-
53	②	II A 14z	10YR3/4	シ	地山土ブロック少	15	23,056	建物跡 3	-	-	-

No.	区	グリッド	測り方(堆土・土体上 内側 外質)	流入物	柱高(m)	前面標高 (m)	浮底標高 (m)	充積 (計) (m)	出土遺物 (括弧番号) ※番号無しは不掲載
34	⑥	II A 1a	10VR3/2	シ	地山上ブロック少	-	23.000	建物跡 3	
35	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山標高	-	23.262		
36	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山標高	-	23.268		
37	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山標高	-	23.229		
38	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山上ブロック少	-	23.146		
39	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山上ブロック多	-	23.109	建物跡 3	
40	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山上ブロック多	-	23.125		
41	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山上ブロック微	-	22.927	建物跡 3	かわらけ口縫部片
42	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山上ブロック微	-	23.005	建物跡 3	
43	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山上ブロック微	-	23.088	建物跡 3	上御賀土器片・絞灯(308)
44	⑥	II A 1a	10VR3/4	シ	地山キブロック極	-	23.113	建物跡 3	
45	⑥		10VR4/2	松シ	地土ブロック大	16	0.069		
46	⑥		10VR4/2	松シ	地土ブロック大	20	0.069		
47	⑥		10VR4/2	松シ	地土ブロック大	20	0.069		
48	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.012	建物跡 3	
49	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山上ブロック微	-	23.184	建物跡 3	
50	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.064	建物跡 3	常滑4(1)・十郎賀土器片
51	⑥	II A 1a	10VR4/4 ~ 4/6	シ	地山上ブロック微	-	23.048	建物跡 3	土御賀土器片
52	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山上ブロック集	-	23.100	建物跡 3	
53	⑥	II A 1a	10VR4/4	シ	地山キブロック微	-	23.118		
54	⑥	II A 1a	10VR4/4	シ	地山上ブロック微	-	23.199		
55	⑥	II A 1a	10VR4/4	シ	地山キブロック微	-	23.142		
56	⑥	II A 1a	10VR4/4	シ	地土ブロック微	-	23.056		
57	⑥	II A 1a ~ 1a	10VR3/3	シ	-	-	23.007	建物跡 3	根掛石(延約 10 cm)
58	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	-	-	23.163	建物跡 1	
59	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.425	建物跡 1	
60	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.461	建物跡 1	土御賀土器片・鉢打(306)
61	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	-	-	23.372	建物跡 1	土御賀口縫部片(5)・かわらけ片
62	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.532	建物跡 1	上御賀土器片
63	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.323	建物跡 1	十郎賀土器片
64	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.475	建物跡 1	かわらけ片(6)・土御賀土器片
65	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山標高	-	23.640	建物跡 2	鉢片(絶文)
66	⑥	II A 2a	10VR3/4	シ	地土ブロック大	15	23.344	建物跡 1	
67	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.267	建物跡 1	十郎賀土器片
68	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	10VR4/2 シルトブロック少	-	23.357	建物跡 1	
69	⑥	II A 1a	10VR4/4	砂	地山キブロック	-	23.305	建物跡 1	
70	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山キブロック微	-	23.370	建物跡 1	
71	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.456	建物跡 1	
72	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.372	建物跡 1	
73	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.372	建物跡 1	
74	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.372	建物跡 1	
75	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.372	建物跡 1	
76	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.372	建物跡 1	
77	⑥	II A 1a ~ 1a	10VR3/3	シ	-	-	23.007	建物跡 3	根掛石(延約 10 cm)
78	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	-	-	23.163	建物跡 1	
79	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.425	建物跡 1	
80	⑥	II A 1a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.461	建物跡 1	
81	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	-	-	23.372	建物跡 1	
82	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.532	建物跡 1	
83	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.323	建物跡 1	
84	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.475	建物跡 1	
85	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山標高	-	23.640	建物跡 2	
86	⑥	II A 2a	10VR3/4	シ	地土ブロック大	15	23.344	建物跡 1	
87	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山上ブロック少	-	23.267	建物跡 1	
88	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地土ブロック少	-	23.357	建物跡 1	
89	⑥	II A 1a	10VR4/4	砂	地山キブロック	-	23.305	建物跡 1	
90	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山キブロック微	-	23.370	建物跡 1	
91	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.456	建物跡 1	
92	⑥	II A 2a ~ 2a	10VR3/3	シ	地山キブロック微	-	23.372	建物跡 1	
93	⑥	II A 2a	10VR3/3	シ	地山上ブロック微	-	23.905		
94	⑥	II A 2a	10VR4/4	砂	地山キブロック	-	23.492	建物跡 2	
95	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.560		
96	⑥	II A 1a	-	-	-	-	23.588		
97	⑥	II A 2a	-	-	-	-	23.609		
98	⑥	II A 2a	-	-	-	-	23.616		
99	⑥	II A 2a	-	-	-	-	23.981	建物跡 4	
100	⑥	II A 9 k	-	-	-	-	24.836	建物跡 4	
101	①	III A 9 l	-	-	-	-	21.771	建物跡 4	
102	⑥	II A 1a	-	-	-	-	24.739	建物跡 4	
103	⑥	II A 2a	-	-	-	-	24.836	建物跡 4	
104	⑥	II A 2a	-	-	-	-	24.836	建物跡 4	
105	④	III A 9 k	-	-	-	-	24.836	建物跡 4	
106	④	III A 9 k	-	-	-	-	24.836	建物跡 4	
107	①	III A 9 l	-	-	-	-	24.821	建物跡 4	
108	④	III A 9 l	-	-	-	-	24.739	建物跡 4	
109	④	III A 9 l	-	-	-	-	24.836	建物跡 4	
110	④	III A 9 l	-	-	-	-	23.017		
111	④	III A 9 k	-	-	-	-	24.737	建物跡 4	
112	④	II A 10 k ~ 10 l	-	-	-	-	24.737	建物跡 4	
113	④	II A 10 l	-	-	-	-	24.701	建物跡 4	

(2) 敷石遺構(第12~17図、写真図版4~10・16)

〔位置・検出状況〕

⑦区西半部及び④⑤区北西部～西部中央、II A 23 i～III A 7 hグリッド付近に位置する。調査開始当初に④⑤区北西部に設定したトレンチの断面(B-B')において、整地層の上面に集中する礫群が検出された。現水田耕作土の下面に接して見つかったことや、県教育委員会の試掘成果で同地点付近に自然礫層の分布することが報告されていたことから、当初この礫群を記録対象とすべきか否かについては判断としなかった。その後、④⑤区西部の表土除去を進めたところ、帯状の礫群が面的に展開することが確認されたため、人為的な構築物と認定し本格的な精査に着手した。

〔規模・形状〕

礫面の分布範囲は南北方向に最大約38m、幅は概ね1.5mから最大3.0m程である(以下、礫面の分布範囲全体を「敷石遺構」と称する)。このうち特に整った敷石面が認められるのは、北端がIII A 1 iグリッド東部、南端がIII A 7 hグリッド東部の範囲である。幅1.5m前後の平坦な敷石面が概ね南北方向に帯状に伸展し、北部でやや東に傾いて全体的には緩い弧状を呈している(「敷石遺構」全体のうち当該部分を限定して「帯状敷石面」と称する)。この区間の全長は約26mである。礫の分布は帯状敷石面のさらに北側にも広がりを見せるが、礫の密度は疎らとなり面が傾斜や凹凸を持つなど、帯状敷石面とは様相を異にしている。

敷石遺構に伴う礫は後世の削平等によって失われた部分も多いと思われ、残存部のみで遺構の全体像を理解することは難しい。帯状敷石面の側線に並走する溝跡(溝跡2・溝跡3)が木構造に伴う「側溝」であるとすれば、これらが帯状敷石面の範囲を越えそれぞれ北側・東側へと展開することは、同様の敷石面がさらに広がりを持っていた可能性を示している。特に帯状敷石面の東縁北端から東側に屈曲して⑥区南縁部に沿ってのびる溝跡2-eの埋土上半には、周囲から流入したとみられる多量の礫が含まれており、敷石面残存範囲のさらに東方にも礫を用いた構築物が展開していた可能性を強く示唆している。

また、帯状敷石面北部のIII A 2 iグリッド付近では低位面側(「池状遺構」側)に張り出すテラス状の高まりが認められる。この高まりの上面に敷石面は残存しないが、標高からみて削平を受けた可能性が高く、本来的な敷石面の有無は不明である。この高まりがIII A 3 iグリッド付近の敷石面とIII A 1 i東部の敷石面を分断していることから、帯状敷石面を覆って新期に構築されたものである可能性が疑われたが、断面を確認したところ、この高まりは地山の削り出しによって設けられたものであり、下部に古期の敷石面が潜っていないことが確認された。よって、帯状敷石面は元々この地点に明瞭な段差を有していたということが明らかとなった。

以上のことから、敷石遺構の全体像は、ひな壇状の平坦面と自然傾斜をこした斜面部が複合して構成された空間であったと考えられる。

〔敷石面及び周辺の礫の状況〕

帯状敷石面が良好に残存するのは、北から順に、III A 1 iグリッド東部～同1 jグリッド西部、III A 3 iグリッド西部、III A 5 iグリッド杭付近、III A 6 hグリッド東部～同7 hグリッド東部の4地点である。本来は各地点間にも敷石面が連続していた可能性が高いが、後世の擾乱等により多くが失われている。

敷石は直径10cm未満の円礫を主体とし、切り土・盛り土によって平坦に整地された地面に直に敷き詰められている。これらの礫の間隙にはさらに径の小さい礫が充填され、密で締まった敷石面が形

成されている。

敷石面の上には、直径 20 cm 程度の中型の礫が点在する状況が認められ、また、特に III A 2 i・同 3 i グリッド付近では直径 30 cm を超える大型の礫が集中的に積み重なって出土した。これらの中型～大型礫群は上部が安定した面を形成せず配置に規則性もみられない。また、敷石面の上位に堆積した土層中に混在して出土するものも多く含まれる。よって、これらの礫は現位置を保った本遺構の構築部材ではなく、廃絶後に敷石面上に遺棄・転落したものと判断される。

次に帯状敷石面以外の礫分布状況について。礫の分布範囲の北部にあたる II A 24 i グリッド杭付近(⑦区)及び II A 25 i 中央付近では、礫の分布面が東に下る緩斜面となっており、礫の密度も疎らで緻密さを欠いている。図上で礫の空白域となっている⑦区西端部、⑦区東半部、II A 24 h グリッド南半部、II A 25 j グリッド周辺は明らかに後世の擾乱を受けており、本来の礫面の有無については不明である。II A 25 j グリッド杭及び III A 1 j グリッド杭付近に点在する礫群は、近世以降の水田耕作土の下面に二次的に集積したものであり本来の位置を保っていない。

〔周辺遺構との関係〕

帯状敷石面の西縁には断続的に連なる溝跡 3 (a～c)、東縁側には溝跡 2 (a～d) が並走している。溝跡 3 は帯状敷石面の延長上さらに北側にむかってほぼ南北方向に真っ直ぐ抜けていく (d～f) のに対し、溝跡 2 は平坦な敷石面が残存する範囲の北端にあたる III A 1 j グリッド付近で急激に向きを東側へ転じ、溝跡 2-e へと連続している。また、帯状敷石面の東側には溝跡 2 を間に挟んで池状遺構がある。溝跡 2・3 及び池状遺構の底面からは敷石遺構側から転落・流入したと思われる拳大の礫が多く出土しており、埋土も類似していることなどから、敷石遺構とこれらの遺構は同時的に構築され機能したものと考えられる。

〔層位的所見〕

本遺構を横断する上層断面の観察から、構築～廃絶～埋没過程が部分的に復元できる。

B-B' 4 層や E-E' 6 層は敷石を施す面を造成するための盛土層で、一方 C-C' 11 層や D-D' 10 層は、地山を切って平らにした敷石面の西側(山側)に土を盛り上げ、高位の段を形成した盛土層と見られる。このことから礫敷設の前段階に、切土・盛土により敷石を施す面の造成が行われたこと、敷石面の山側に明瞭な段差を持った高位面の形成が意図されたことが読み取れる。この空間全体の造成を終えた後、帯状の平坦面とその周囲には密に礫が敷き詰められたと考えられる。

次に本遺構が機能していた間の状況についてである。土層断面では帯状敷石面東縁の溝(溝跡 2)が幾度かの造り替えを経ている状況が確認できる。これらの溝が敷石面にともなう「側溝」であるとするならば、敷石面も同様に更新された可能性が高いと思われる。しかし上層断面等にその痕跡を見出すことはできなかった。敷石面は廃絶後、漸次、III 層相当の暗褐色シルトによって覆われ埋没していく様子が観察される。上述の中～大型礫や各種遺物片は、この土層の堆積の過程で敷石面上に遺棄・転落したものと思われる。敷石面を被覆する土層には径 5 mm 程度のやや大きめの木炭粒の混入が顕著で、この特徴は池状遺構の埋土(2 a 層)やその他の 12 世紀遺構(上坑等)の埋土主体上も共通している。この付近一帯の 12 世紀構造物が廃絶を迎えた時点の環境と、本層に含まれる木炭粒の生成要因との間に何らかの因果関係が存在するか興味深いところである。

〔放射性炭素年代測定〕(一附編 1)

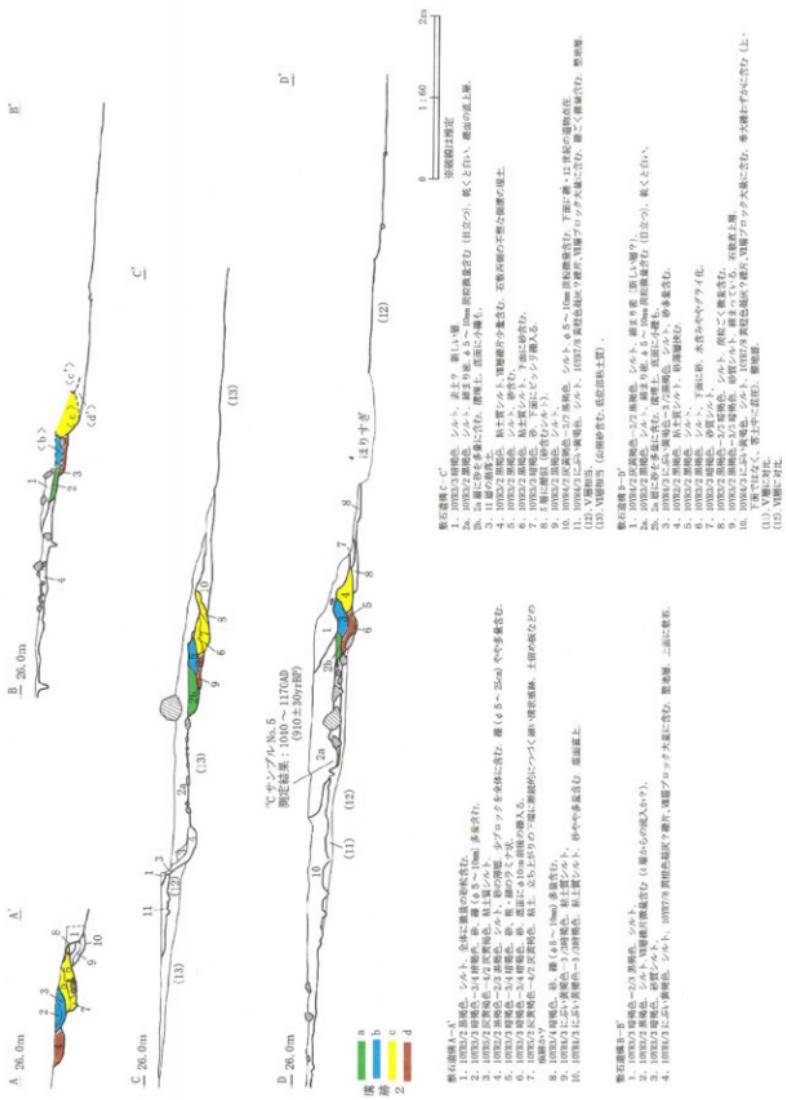
帯状敷石面の断面 D-D' の 2 a 層下面付近から採取した炭化物粒(^{14}C サンプル NO. 5)の年代測定(AMS 測定)を委託実施した。測定結果は、1040～1170 AD (910±30 yr BP) である。この値は池状遺構底面直上から採取した ^{14}C サンプル NO. 1 と一致しており、両者は「共に平安時代後期後



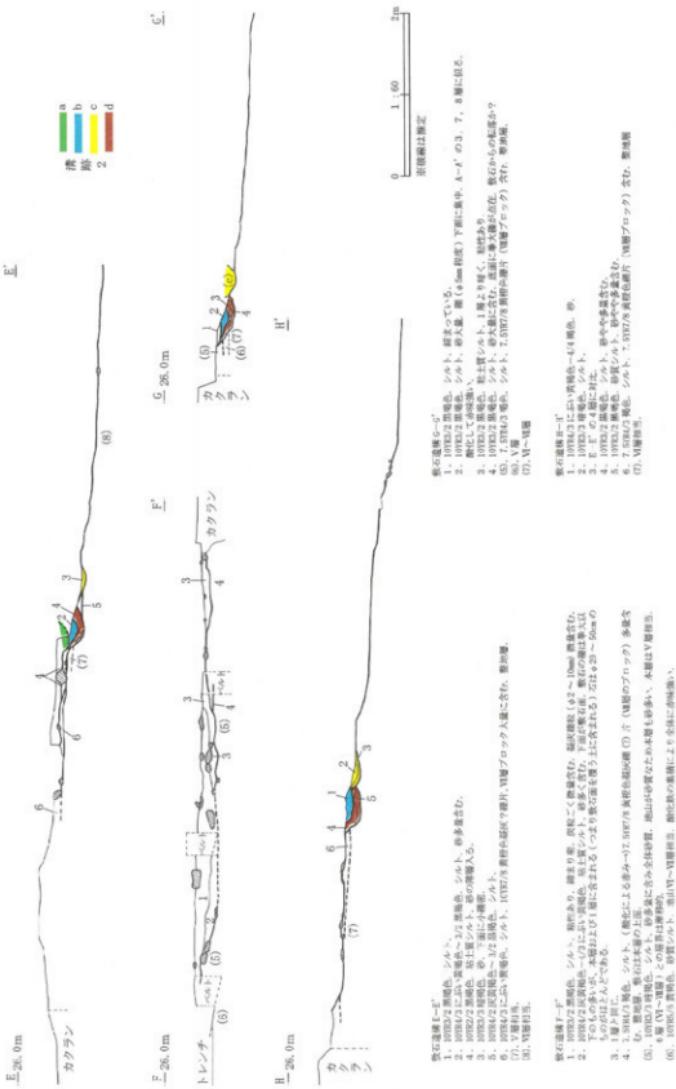
第12図 敷石遺構（北半）周辺



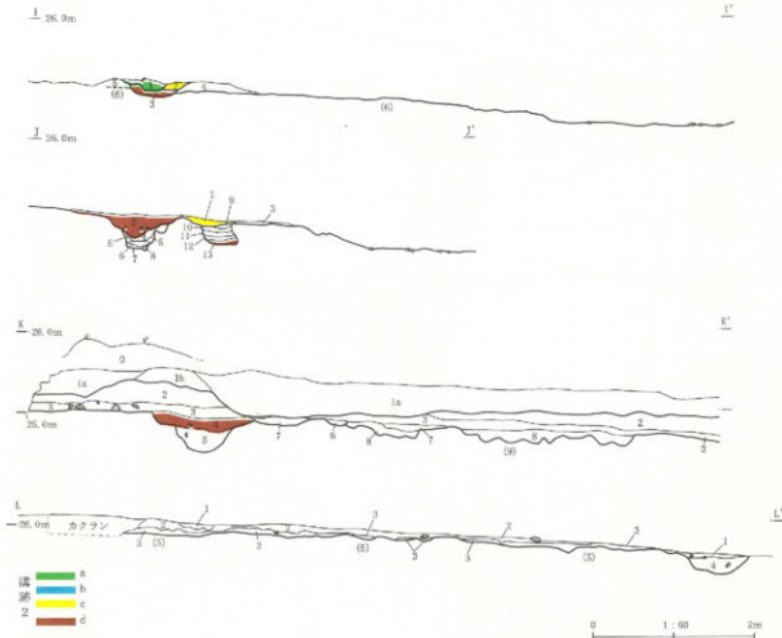
第13図 敷石遺構（南半）周辺



第14図 敷石遺構・遺跡2・3断面(1)



第15図 敷石遺構・遺跡2・3断面(2)



第 16 圖 敷石遺構：遺跡 2・3 斷面 (3)



第17図 敷石遺構周辺の遺物出土状況

半に相当する曆年較正年代であり、同一時期の堆積物と考えられる」との見解を得ている。

〔出土遺物〕(第34~39図、写真図版28~30)

本遺構及び池状遺構周辺では、遺構の形状や堆積状況の詳細がまだ不明だった調査の初段階から多くの遺物が出土した。これらの多くは主にグリッド単位で取り上げを行ったが、特徴的なものについては個別番号を付して出土地点を記録した。第17図には本遺構周辺の遺物出土状況を示している。

掲載遺物に見られるように、12世紀後半、特に第3四半期を中心とした時期に帰属する遺物が大半を占めている。かわらけにはてづくねに加えクロ彫形のものが一定量含まれる。国産陶器としては常滑産・渥美産・須恵器系陶器があり、このほか中国産白磁の破片も比較的多く出土している。

〔遺構の時期〕

放射性炭素年代測定結果、出土遺物の年代観、堆積状況等から12世紀に帰属すると考えられる。

〔遺構の保存〕

調査の進捗に伴い12世紀主体の遺跡であることが明らかになった段階で、報告に必要な最低限の記録を得た後は12世紀の遺構面を極力保存し、調査後は山砂で埋め戻すよう県教育委員会から指導を受けた。本遺構については、敷石面以下が保存対象となったことから、礫面や整地層を除去して下部を面的に調査することはしなかった。また、土層断面の観察に用いたベルトは全てそのまま埋め戻した。

(3) 池状遺構(第18~21図、写真図版10~12)

〔位置・検出状況〕

④⑤区北西部、Ⅲ A 2 1 グリッド付近に位置する。敷石遺構及び溝跡2の東部に隣接する不整形な暗褐色土の広がりとして検出された。土器・陶磁器片等の遺物と礫が混在する土層がプランの不明瞭な状態でやや広い範囲に広がっていたことから、土層断面観察のベルトを格子状にのこし、4×4mの小グリッド単位で土層の掘り下げに着手した。

〔規模・形状〕

埋土となる暗褐色土層は長径13m・短径10m程の楕円形の範囲に広がっている。セクションポイント「On」付近をコーナーとして、溝跡2と平行して直線的にのびる等高線(Ⅲ A 2 k杭と同11杭を結ぶライン)と、Ⅲ A 3 k杭付近から南東方向に延びる直線的な等高線が認められることから、本来的にはⅢ A 3 k杭・同41杭・同2n杭等の付近に頂点を持つ隅丸長方形あるいは扇面形のような形状であった可能性がある。底面(埋土上2a層下面)はほぼ平坦で、最も残存状況が良いⅢ A 2 kグリッド付近では、上端から底面までの深さが20cm強となっている。斜面下方の南東部へ向かって埋土は次第に薄くなっておりプランも不明瞭となっている。

〔周辺遺構との関係〕

上記のとおり、敷石遺構の東側に近接し溝跡2の屈曲点付近に位置している。断面II-H'にみる敷石遺構の帯状敷石面(Ⅲ A 1 1 グリッド東部)と池状遺構底面(Ⅲ A 2 k グリッド)との比高は約70cmである。Ⅲ A 1 k 北部の取水口状遺構1は、溝跡2から本遺構への導水施設と思われる。敷石遺構及び溝跡2・3と本遺構の覆土は極めて類似し、また、放射性炭素年代測定結果(一附編1)や出土遺物の年代観等からも密接な関係性(同時性)が認められる。

〔層位的所見〕

はじめにセクションポイントの表記法について説明しておきたい。本遺構の精査では、小グリッド(4×4m)の境界に幅50cmのベルトを格子状にのこして掘り下げを行い、観察に有効な6本のベ

ルト（Mベルト～Rベルト）を選択して断面の記録を行った。この際、土層観察に適した断面の向きがベルトによって異なり、どちら側の面を記録したのかを明示する必要が生じた。そこで、ベルト名（英大文字）に記録面側の方位を表した英小文字を付し、Mベルトの西面はMw-Mw'、Oベルトの北面はOn-On'のように表記することとした。

以下、土層断面Mw-Mw'～Rw-Rw'をもとに本遺構付近の上層堆積過程の復元を試みることとする。池状遺構の南東部は、ⅢA 4 k グリッド付近から④⑤区北半部を通って東側の調査区外に抜ける沢跡1と重複している。断面に見られる土層のうち最も古いのは、沢跡1の下半部に堆積する砂層の4 b層である。ⅢA 2 1 グリッド北半部を中心としてC字状に巡っている落ち込みの内部には、4 b層に酷似した砂層（4 a層）の堆積も認められる。このC字状の落ち込みは池状遺構の中央部に位置し、その内部に擬似的な中島状の高まりが生じている。そこでこの高まりが池状遺構本体の形成時に併せて設けられたものである可能性を考慮にいれ、池状遺構に切られる沢跡の堆積層の4 b層と、池状遺構形成期まで下る可能性を持つ4 a層を区別して扱い検討を進めた。結果的には両者は給源が同じでほぼ同時期に堆積した砂層であるとの解釈に達し（沢跡上流側より一気に流入したものと考えられる）、この中島状の地山の高まりは自然による擬似的なものであるとの認識に至っている。

沢跡1の流路内では、砂層の上位に黒褐色粘土質シルト層（3 a～3 c層）が堆積している。このうち3 a層の上面～上部には層状～ブロック状の1和田a降下火山灰の堆積が顕著にみられる。十和田a降下火山灰は④⑤区南部から北東部にかけて流れる沢跡2の流路上でも、層状に多量に堆積しており、本遺跡付近に当該火山灰のまとまった降下があったことを示している。3 a層の堆積範囲はⅢA 2 mグリッド以東の沢跡1内部に限られ、特にⅢA 2 mグリッド付近においては、層中から9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる須恵器・土師器のまとまった出土があった。池状遺構の北側には平安時代の豊穴住居跡（住居跡1）が検出された⑥区に連続する微高地頂部が広がっており、この付近における該期の人間活動に伴う遺物と考えられる。

さて、池状遺構本体の主たる埋土は、3層の上位に、あるいは3層以下を切って堆積している2 a層である。本層は池状遺構が埋没を開始した時点から、周辺の表土が練や各種の遺物と共に流入したものと思われる。敷石遺構の敷石面を被覆する炭化物混入の顕著な暗褐色土層と同一の可能性が高いことから、敷石遺構と池状遺構は極めて近い時期に廃絶をむかえ、埋没を始めたものと推測される。断面Mw-Mw'・Ps-Ps'に見られるように、本遺構の底面である2 a層下面には敷石遺構側から転落したと思われる小砾群が広がり陶磁器片等の遺物の出土がみられた。本層は斜面上方側にあたる池状遺構西部で良好に残存しており、東側に向かって次第に層厚を減じて東端部では沢跡1の埋土最上部に残存するのみとなっている。池状遺構の水平な底面の直上に堆積した本層が、斜面下方側の東部では後世の流失・削平を受けた結果であろう。

ここで注意すべきなのは、池状遺構本体の主たる埋土である2 a層が、池状遺構本体のプランを越え、沢跡1の流路上に連続して堆積している点である。このことは池状遺構の廃絶直前まで沢跡1と同じ経路を水流が通っていたことを意味し、この自然流路が池状遺構への導排水路の役を担っていた可能性を示唆している。言い換えれば、池状遺構は古くからの沢筋上でなお流水のある地点を選択して設けられた施設であると理解できるのである。

最上位の1層は、後に2 a層上部が攪拌されることによって生成したものと思われ、池状遺構の範囲を超えて溝跡2以東の広い範囲に分布する。1層下面による攪乱は随所に及んでおり、本遺構の主たる堆積層2 a層の本来的な広がりを知ることを困難にしている。しかしながら、池状遺構の範囲外において1層の下位に2 a層類似土が残存する地点が存在する。沢跡1上流側のⅢA 4 j～同6 jグ

リッド付近および取水口 2・同 3 の周辺では、2 a 層類似度の広がりと共に、池状遺構西部底面付近と良く似た遺物・礫の出土状況が観察された。特に、第 13 図の等高線からも読み取れるように、III A 5 j グリッド付近や同 6 i グリッド北東部は方形プランのコーナー部のような状況を呈しており、わずかに残存する平坦な底面上からは 2 a 層類似土層に被覆された遺物や礫の出土が見られた。このことから、現状では削平によって多くが失われているが、本来は溝跡 2 の東側に同様の複数の池状遺構が「棚田」のように連なっていた状況が想像されることを付け加えておきたい。

〔土壤サンプルの分析〕

本遺構の性格や周辺環境・堆積過程の復元を目的とし、遺構内堆積土を試料とした微化石分析の委託を行った（→附編 2. II）。採取地点は堆積状況が最も良好な遺構西部で、P ベルト西部の一部を柱状に切りとり試料とした。以下に分析結果の概要を記す。

珪藻化石の分析では、本遺構は当初「水深の浅い池沼あるいは沼澤地のような水域」であり、その後、上部まで埋積が進んだ頃にも「遺構内に流水の流れ込み」があり「周囲の乾いた場所から陸生珪藻を含む土壤が流水と共に流れ込んだと考えられる」との見解が示された。植生については、木本類の花粉化石の産状から「堆積当時の本遺跡周辺では、後背の丘陵・山地部にはブナ属を主体とする落葉広葉樹林が成立」し、「丘陵縁辺部や低地部などには部分的にスギ属などの林分も認められ」、「河畔や低湿地には、ハンノキ属を主体とした湿生林が分布していた」とみられ、花粉草本類の花粉化石としてはイネ科・ヨモギ属等を主体としたいわゆる「人里植物」を多く含む分類群が検出されたことから、「本遺構周辺の開けた草地にこれらの草本類が生育」する環境であったことが推測されている。このほか栽培種であるソバ属・イネ属も各層位から検出され、これらの栽培が行われた可能性についても指摘されているが、特にイネ属については「池状遺構に水域があった当時の本遺跡周辺における稻作については」、「イネ属の層位的な消長や分布域を確認した上で検討すること」が望ましいとの見解が示された。

〔放射性炭素年代測定〕（→附編 1）

本遺構内から採取した炭化物粒を試料とし、放射性炭素年代測定（AMS 測定）を委託実施した。

断面 Ps-Ps' の 2 a 層下面（池状遺構底面直上）から採取した ^{14}C サンプル NO. 1 については、1040 ~ 1170AD ($910 \pm 30\text{yrBP}$) との測定結果が出された。この値は敷石遺構の敷石面直上層から採取した ^{14}C サンプル NO. 5 と一致しており、両者は「共に平安時代後期後半に相当する暦年較正年代であり、同一時期の堆積物と考えられる」との見解を得た。

このほか、断面 Ps'-Ps'' において 2 b 層と 4 b 層の層界から採取した No. 2 は 700 ~ 870AD (1220 ± 30yrBP)、断面 Qw-Qw' の 4 b 層下面（沢跡 1 底面直上）の No. 3 は 430 ~ 540AD (1950 ± 30yrBP) と測定された。なお断面 Mw-Mw' の 4 a 層下面から採取した No. 4 は測定不能試料（非炭化物）であり年代値は算出されなかった。

〔出土遺物〕（第 34 ~ 39 図、写真図版 28 ~ 30）

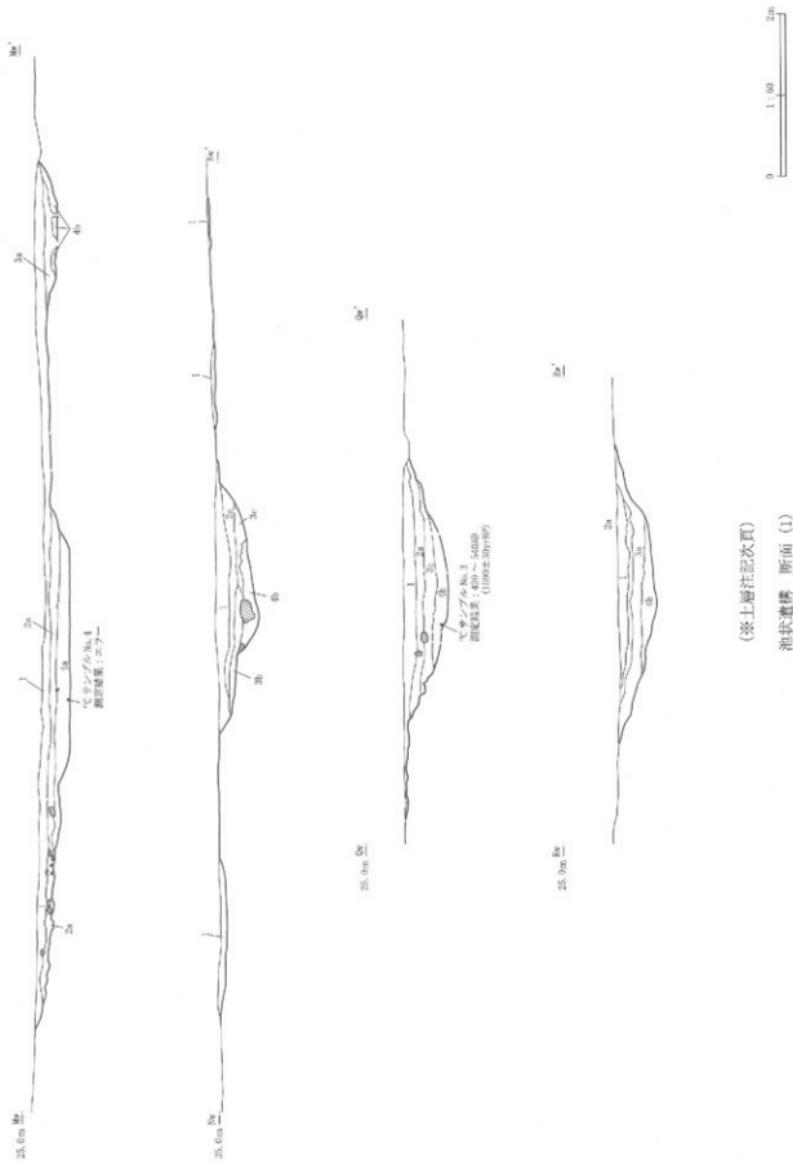
本遺構及び敷石遺構周辺では、遺構の形状や堆積状況の詳細がまだ不明だった調査の初段階から多くの遺物が出土した。これらの多くは主にグリッド単位で取り上げを行ったが、特徴的なものについては個別番号を付して出土地点を記録した。第 21 図には本遺構周辺の遺物出土状況を示している。

掲載遺物に見られるように、12 世紀後半、特に第 3 四半期を中心とした時期に帰属する遺物が大半を占めている。かわらけにはてづくねに加えクロ彫形のものが一定量含まれる。国産陶器としては常滑産・渥美産・須恵器系陶器があり、このほか中国白磁の破片も比較的多く出土している。

III A 2 m グリッド付近で出土した土師器・須恵器は、土層確認のサブトレンチにおいて、本遺構



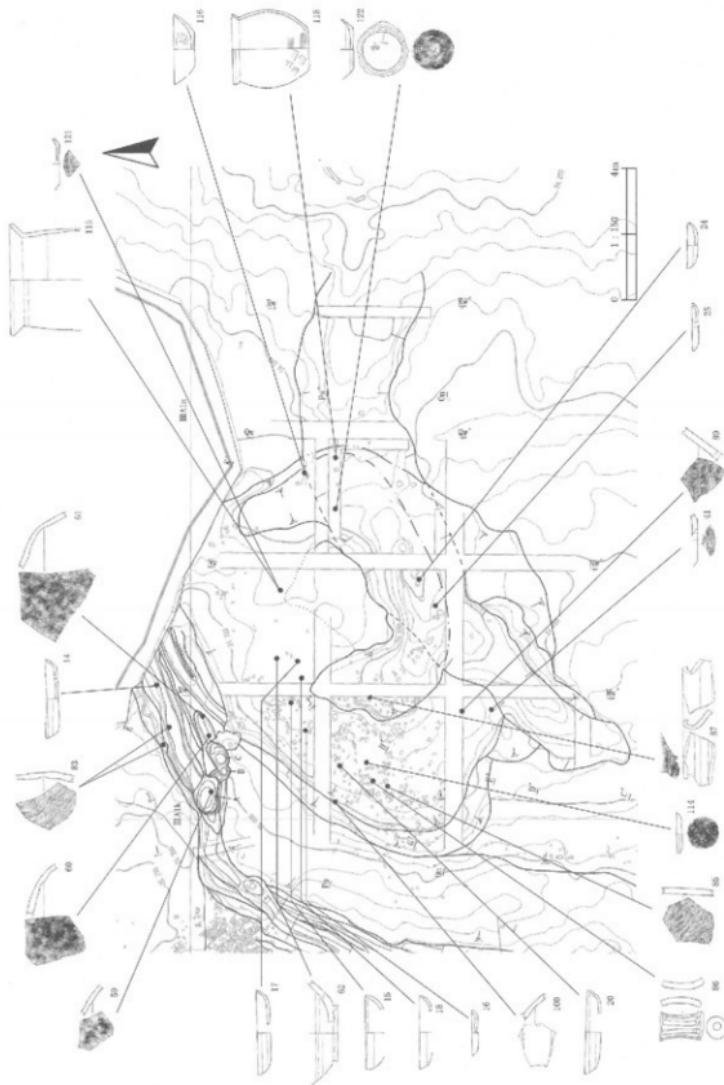
第18図 池状遺構



第19図 池状遺構 断面(1)



第20図 池状構造 断面(2)：取水口状構造断面



第21図 池状遺構周辺の遺物出土状況

埋土の下位に堆積した沢跡の埋土から出土したものである。

[遺構の時期]

放射性炭素年代測定結果、出土遺物の年代観、堆積状況等から12世紀に帰属すると考えられる。

[遺構の保存]

調査の進捗に伴い12世紀主体の遺跡であることが明らかになってくると、報告に必要な最低限の記録を得た後は、12世紀の遺構面を極力保存し、調査後は山砂で埋め戻すよう県教育委員会から指導を受けた。よって本遺構については池状遺構本体の堆積層のみを掘り上げ、土層の観察に用いたM～Rベルトは除去せずにそのまま残して埋め戻す方針をとった。しかし、事実確認や断面記録を進める必要から、下位に重複する沢跡1等の堆積層も掘り上げた箇所があり、調査最終段階に作製した測量図にそのまま図化されている。**III A 2 k・2 l・1 m**グリッド内のC字状落ち込み部埋土（4a層）、**III A 3 k・2 l・1 m**グリッド同2 lグリッドの沢跡1埋土（4b層ほか）がそれにあたり、図上では本来の遺構の様相とは異なり余計に掘り下げられた状態が示されていることに注意されたい。同様に、断面記録のため設定した**III A 2 m**グリッド北辺及び東辺のサブトレーナ、**III A 2 o**グリッド西辺サブトレーナが白抜きで示されている。

(4) 取水口状遺構

取水口状遺構1(第12・18・20・21図、写真図版13・14)

[位置・検出状況]

④⑤区北西部、**III A 1 k**グリッドに位置する。溝跡2の精査の過程で、溝跡底面より一段深い上坑状の落ち込みとして検出された。内部の埋土が池状遺構側に向かって連続していたことから、池状遺構に伴う何らかの施設である可能性を念頭に精査に着手した。

[規模・形状] 溝跡2の内部から池状遺構へ向かって3基の十坑状の掘り込みが連結した構造となっている。記載にあたり溝跡2内部にある西端の掘り込みをA、中央のものをB、池状遺構に接する東端のものをCとする。Aは開口部が115×80cmの楕円形で、壁の下半部がえぐれて袋状の断面形を呈する。Bは直径30cm、Cは直径60cmのほぼ円筒形の掘り込みである。溝跡2はAを境に東側の底面が急激に低くなっている。

[層位的所見]

本遺構は当該地点における溝跡2の掘り下げが進んだ時点での存在が確認されたものである。そのため精査当初に適所に土層断面を設定することができなかった。第16図の断面J-J'には本遺構付近の堆積状況を見る所以ができるので、以下、これを元に説明したい。断面J-J'の2層は溝跡2の埋土上部にあたり、池状遺構埋土2a層や敷石遺構の敷石面を被覆するIII層相当層に対比される。本遺構の掘り込みAは上半部にJ-J' 2層から連続するシルト層が堆積し、その下位にJ-J' 4～8層に類似する壁から流入した砂層が堆積していた。Aの壁面下半部には地山構成砂層V層が露出しており、これが水流にえぐられてオーバーハングしている。掘り込みBの埋土及びCの埋土にはAの埋土下部に似て地山砂層の流入が顕著であるが、いずれの掘り込みにおいても埋土の主体上はIII層類似土であり、最終的にJ-J' 2層から連続するシルト層によって覆われていることから、構築・廃絶とともに池状遺構に連動しているものと考えられる。

[周辺遺構との関係]

III A 1 kグリッド杭付近において、溝跡2と池状遺構の間に位置し、両者と埋土が連続している。

〔出土遺物〕

第21図に出土地点を示した59・60（第36図、写真図版29）は、本遺構の内部から出土した常滑産の壺破片である。また、157のてづくねかわらけ・159の常滑産壺破片は本遺構と埋土の連続する溝跡2内部から出土したものである（第40図、写真図版31）。いずれも12世紀第3四半期に帰属させ得る資料である。

〔遺構の時期〕

埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

取水口状遺構2（第13・17・20図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕

④⑤区西部中央、ⅢA 6 i グリッドに位置する。敷石遺構東縁の溝跡2の精査段階に、東側（斜面下方側）の壁面に生じた開口部として検出された。周囲の遺構との関係性から特定機能が想定される箇所と判断した。

〔規模・形状〕

溝跡2の東壁の切れ目から長さ・幅ともに約30cmの溝状の掘り込みが東側に伸び、斜面下方側に構築された方形プランを持つと思われる掘り込みの南西コーナー部に接続している。溝跡2と溝状掘り込みの底面は連続しており高低差はない。一方、方形状掘り込みの底面は一段低くなっている、溝跡2から分岐した水流は一段低い方形状掘り込みに注ぎ込む構造となっている。

〔層位的所見〕

本遺構は当該地点における溝跡2の掘り下げが進んだ時点で確認されたものであり、初段階に適所に土層断面を設定することができなかった。第20図d-d'には完掘後に記録した溝状掘り込み部の横断図を示した。溝跡2から方形状掘り込みへ連続して堆積していたのは池状遺構埋土2a層や敷石遺構の敷石面を被覆土層に類似するⅢ層相当層である。溝状掘り込みが接している方形状掘り込みのコーナー付近の底面には、小甕に加え陶磁器等の遺物小片が比較的まとまっており、池状遺構西部の底面に類似した状況を呈する。「池状遺構」の項でも述べたが（→(3) 池状遺構〔層位的所見〕）、本来は本遺構及び取水口状遺構3付近にも池状遺構と同種の施設が存在した可能性があり、後世の削平によって上部が大きく失われた結果、現在のような残存状況を呈するに至ったと解釈できる。

〔周辺遺構との関係〕

敷石遺構南部東縁の溝跡2の一部に位置しており、下段の方形状掘り込み側へ導水するために設計された施設と思われる。敷石遺構～溝跡2の一部～方形状掘り込みは、同一の連続したⅢ層相当層に被覆されており、これらが同時的に存在・機能したものと推測される。なお、当該地点の完掘状況を見ると溝跡2の掘り形は2条が並行しており（溝跡2の同位置造替による）、本遺構がこのうち東側の溝（溝跡2-cか）に付属すると見られるのに対し、取水口状遺構3は西側の溝（溝跡2-dか）に付属するとと思われ、両者に時間差が想定される。

〔山上遺物〕

第17図に出土地点を示した遺物のうち、95・96（第38図、写真図版30）が本遺構に帰属させるものと思われる。いずれも須恵器系陶器の破片であり、12世紀中葉～後半の所産とみられる資料である。

〔遺構の時期〕

埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

取水口状遺構 3(第 13・17・20 図、写真図版 15)

〔位置・検出状況〕

④⑤区西部中央、Ⅲ A 6 1～7 1 グリッドに位置する。敷石遺構東縁の溝跡 2 の精査段階に、これと直交して東側（斜面下方側）にのびる溝条の掘り込みが検出され、さらに下段の落ち込みへ埋土が連続する状況が確認された。よって周囲の遺構との関係性から特定機能が想定される箇所と判断し精査着手した。

〔規模・形状〕

溝跡 2 と直交方向に延びる溝状の掘り込みは長さ 130 cm・幅 50 cm 強で、東端部が一段低い面との境界に接している。残存深は最大でも 4 cm 程度とごく極浅い。溝状掘り込みと接する付近の下段面には、直径約 110 cm の略円形で深さ 5 cm 程の浅い落ち込みが生じている。この落ち込みの端部からは北東側に溝状の痕跡がのび、さらに下段にある方形状掘り込みの南西コーナー部へと連続している。

〔層位的所見〕

本遺構は取水口状遺構 2 と同様、当該地点における溝跡 2 の掘り下げが進んだ時点で確認されたものであり、初段階に適所に土層断面を設定することができなかった。第 20 図 a-a'～c-c' には完掘後に記録した溝状掘り込み部の横断図を示した。溝跡 2 から方形状掘り込みへ連続して堆積していたのは池状遺構埋土 2 a 層や敷石遺構の敷石面を被覆土層に類似するⅢ層相当層である。溝状掘り込みの東端部に生じた略円形の落ち込みの底面には小砾と遺物小片の比較的まとまった分布が認められ、池状遺構西部の底面に類似した状況を呈する。

〔周辺遺構との関係〕

敷石遺構南部東縁の溝跡 2 の一部に位置しており、下段側へ導水するために設けられた施設と思われる。敷石遺構へ溝跡 2 の一部～円形落ち込み付近の下段平坦面は、同一の連続したⅢ層相当層に被覆されており、これらが同時的に存在・機能したものと推測される。なお、当該地点の完掘状況を見ると溝跡 2 の掘り形は 2 条が並行しておらず（溝跡 2 の同位置造替えによる）、本遺構がこのうち西侧の溝（溝跡 2-d か）に付属すると見られるのに対し、取水口状遺構 2 は東側の溝（溝跡 2-c か）に付属すると思われ、両者に時間差が想定される。

〔出土遺物〕

本遺構に伴うことが明確な遺物は確認できなかった。周辺のⅢ層相当土からは 12 世紀後半の所産とみられるかわらけ片や常滑窯等の国産陶器片が出土している。

〔遺構の時期〕

埋土の様相と周辺の出土遺物から 12 世紀代に帰属するものと思われる。

(5) 土 坑

土坑1 (第22図、写真図版17)

〔位置・検出状況〕⑥区北西部、II A 8 x グリッドに位置する。V層上面において明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は128×116cmの略円形で、底面までの残存深度は20cmである。

〔埋土と堆積状況〕III層類似の暗褐色シルトを主体とし、自然堆積によって埋没したものと思われる。埋土下部には壁崩落によるV層土ブロックを含む。1層下面に遺物が集中する。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕(第39・45図、写真図版31・34)

127～131のかわらけが出土している。ロクロ成形によるものが目立つ。いずれも12世紀第3四半期の中心とした時期に帰属するものである。このほか、鉄釘が2点(304・305)出土した。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀に帰属するものと考えられる。

土坑2 (第22図、写真図版17)

〔位置・検出状況〕⑥区中央西部、II A 15 t グリッドに位置する。水田造成による削平で露出したV層面で、明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は110×104cmの円形で、底面までの残存深度は24cmである。上部を大きく削平されている可能性が高い。

〔埋土と堆積状況〕III層相当の暗褐色シルトを主体とする。開口部からの流入土と壁面からの崩落土により漸次埋没したものと推測される。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕かわらけ片が出土している。細片につき不掲載とした。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑3 (第22図、写真図版17)

〔位置・検出状況〕⑥区南西部、II A 17 s グリッドに位置する。V層上面においてIII層類似暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は74×68cmの円形で、底面までの残存深度は18cmである。

〔埋土と堆積状況〕III層相当の暗褐色土を主体とする単層である。掘り込みはVI層(地山)に到達せずV層が壁面となっている。埋土は上部から下部まで一様で変化に乏しく、開口部からの流入土により短時間に埋没したと考えられる。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕(第39図、写真図版31)

底面～壁面に貼り付くようにかわらけの大形破片が出土している。132はロクロかわらけ、133はてづくねかわらけである。いずれも12世紀第3四半期の所産とみられる。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑4 (第22図、写真図版18)

〔位置・検出状況〕⑥区南西部、II A 19 t グリッドに位置する。水田造成による削平で露出したV

層面で、明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は $82 \times 78\text{ cm}$ の円形で、底面までの残存深度は 12 cm である。

〔埋土と堆積状況〕壁際底面に崩落土が堆積し、その上を開口部から流入したⅢ層類似暗褐色土が覆っている。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕かわらけ片が出土している。細片につき不掲載とした。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑5（第23図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕⑥区北部、II A 19 wグリッドに位置する。当地点に設定した試掘トレンチ内において遺物を含むⅢ層類似土の不整形な広がりとしてV層上面で検出された。

〔規模・形状〕開口部は $115 \times 75\text{ cm}$ の不整椭円形で、底面までの残存深度は 24 cm である。西側開口部が一部張り出している。

〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層類似の暗褐色土を主体とする。掘り込みはVI層（地山）に到達せずV層が壁～底面となる。埋土下部には壁崩落土と思われるV層土ブロックを多く含み、その上を遺物を多く含むⅢ層相当上が覆っている。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕（第39図、写真図版31）

134～137はてづくねかわらけ、138はクロかわらけで、いずれも12世紀第3四半期の所産とみられる。134・135の2点は、伏せて重ねられた状態で埋土最上部から出土したものである。このほか涙美産甕小片（139）、フイゴ羽口様の焼粘土小塊（140）が出土した。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑6（第23図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕①⑤区中央西部、Ⅲ A 7 j～7 kグリッドに位置する。VI層上面において不整形な黒褐色土の広がりとして検出された。

〔規模・形状〕最上部では開口部は不整形を呈するが、やや内側に径 130 cm ほどの整った円形の上端を持つ。底面までの残存深度は 36 cm で、底面から壁にかけては緩やかに内湾して立ち上がり、全体に丸底状の形態を呈する。

〔埋土と堆積状況〕水を含み粘性に富む黒褐色土が主体である。Ⅲ層土が水により流入したものと思われる。底面直上では砂を多く含み、底面はグライして青灰色を呈する。開口部周縁の壁面上端では拳大の礫が内部に落ち込んだような状態で出土している。

〔重複遺構〕水田造成による削平を受け周辺の状況が明らかではないが、池状遺構に類似する大形遺構に付属する可能性（取水部の施設等の機能）が考えられる。

〔出土遺物〕（第40図、写真図版31）

141～144はいずれもてづくねかわらけで12世紀第3四半期の所産とみられる。また、漆器椀（401）が出土している。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑7（第23図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕⑥区中央西部、II A 12 v グリッドに位置する。V層上面で比較的明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は98×90cmの略円形で、底面までの残存深度は72cmである。開口部でやや広がるが下半部はほぼ円筒形を呈し平坦な底面を有する。

〔埋土と堆積状況〕III層類似の暗褐色土が主体。埋土最下層の6層はやや黄味を帯びるほかはIII層土によく似ており、底面から開口部まで連続して堆積している。この6層を遺構中央で抉り込むように5層以上の堆積層が切っている。この堆積状況からは柱材の抜き取りなどの行為が想起されるが、地山であるVI・VII層を大きく掘り込んだ遺構であるにも拘わらず、埋め戻し土であるはずの6層に地山上土が含まれないのは不自然であり解釈を困難にしている。

〔重複遺構〕直接重複する遺構はない。形態と堆積状況が酷似する土坑8と近接して位置する。本土坑と土坑8との中心を結ぶ軸方向はN-59°-E（直交方向N-31°-W）である。

〔出土遺物〕（第40図、写真図版31）

てづくねかわらけ口縁部片（146）、ロクロかわらけ底部片（147）、常滑産壺破片（148～150）などが出土している。いずれも12世紀後半期の所産とみられる。

〔遺構の時期〕埋土主体土と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑8（第23図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕⑥区中央西部、II A 12 v グリッドに位置する。V層上面で比較的明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は86×80cmの形で、底面までの残存深度は96cmである。開口部でやや広がるが下半部はほぼ円筒形を呈し平坦な底面を有する。

〔埋土と堆積状況〕III層類似の暗褐色土が主体。土坑7によく似た堆積状況を示している。2層はやや黄味を帯びたIII層類似土で底面から開口部まで連続して堆積している。この2層を遺構中央で深く抉り込むように1層が切っている。埋土中部の壇際からは径20cm強のやや大形の礫が数点出土しており、上記の堆積状況からも材の抜き取られた大形の柱穴ではないかと思われた。しかし、地山であるVI・VII層を大きく掘り込んだ遺構であるにも拘わらず埋め戻し土であるはずの2層に地山上土が含まれないのは不自然であり解釈が困難となっている。

〔重複遺構〕直接重複する遺構はない。形態と堆積状況が酷似する土坑7と近接して位置している。本土坑と土坑8との中心を結ぶ軸方向はN-59°-E（直交方向N-31°-W）である。

〔出土遺物〕かわらけ片が出士している。細片につき不掲載とした。

〔遺構の時期〕埋土主体土と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑9（第24図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕⑥区南部、II A 20 u グリッドに位置する。水田造成による削平で露出したVI～VII層面で、明瞭な不整円形の範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は102×100cmの不整円形で、底面までの残存深度は80cmである。開口部下の25cmほどのところでやや窄まり、以下の壁面はほぼ直立する八つの平面からなり、上面襷はやや崩れた八角形を呈する。

〔埋土と堆積状況〕全体的に黒褐色土を主体とする。3～5層は地山VI・VII層土のブロックを含む

土層で堅く締まっている。これらは堆積状況から人為的な埋め戻し土とみられる。2層はこれらの層を上部から深く抉り込むように切っており、一度埋没した後に掘り返された可能性がある。柱材の抜き取りなどが想定されようか。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔遺構の時期〕埋土主体土はVまたはIII層に類似することから12世紀を下限に考えたい。ただし出土遺物はなく詳細は不明といわざるを得ない。

土坑10（第24図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕⑥区南東部、II A 17 x～17 yグリッドに位置する。V層上面において明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は92×85cmの円形で、底面までの残存深度は76cmである。下部は径40cm程の円筒形を呈しており、開口部から上半部は堆積過程の崩落により大きく広がったものと思われる。

〔埋土と堆積状況〕III層相当の暗褐色土を主体とし、全体に自然堆積の様相を呈する。この地点ではV～VI層が砂質を帯びており、埋土内にも壁から流入した砂の混入が見られる。壁の下半部からは湧水が顕著である。壁の崩落を伴いながら、開口部からの流入土により漸次埋没したものと考えられる。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕（第40図、写真図版31）

てづくねかわらけ片（151）が出土している。

〔遺構の時期〕埋土主体土と出土遺物から12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑11（第24図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕⑧区中央部、II A 21 tグリッドに位置する。付近に面的に堆積していたIII層を除去したところ、V層上面において暗褐色土の明瞭な不整円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は80×74cmの略円形で、底面までの深度は12cmである。浅い丸底状を呈し壁面は内部に向かって緩やかに傾斜する。

〔埋土と堆積状況〕上位に面的に堆積していたIII層から連続して流入した黒褐色土の単層である。このことから開口部は削平を受けていないと考えられる。

〔重複遺構〕直接重複する遺構はないが、同じ形態・堆積状況を示す土坑12とは80cmの間隔をおいて並列する関係にある。また、2基を結ぶ軸線は建物跡1の梁行軸と平行することから、建物跡1との関連性が強いものと推測される。

〔出土遺物〕（第40図、写真図版31）

常滑産壺破片（152）が出土している。

〔遺構の時期〕埋土状況や出土遺物などから12世紀代に帰属するものと思われる。

土坑12（第24図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕⑧区中央部、II A 21 tグリッドに位置する。付近に面的に堆積していたIII層を除去したところ、V層上面において暗褐色土の明瞭な不整円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は68×65cmの不整円形で、底面までの深度は12cmである。

〔埋土と堆積状況〕上位に面的に堆積していたIII層から連続して流入した黒褐色土の単層である。

のことから開口部は削平を受けていないと考えられる。

〔重複遺構〕 直接重複する遺構はないが、同じ形態・堆積状況を示す土坑11とは80cmの間隔をおいて並列する関係にある。また、2基を結ぶ軸線は建物跡1の梁行軸と平行することから、建物跡1との関連性が強いものと推測される。

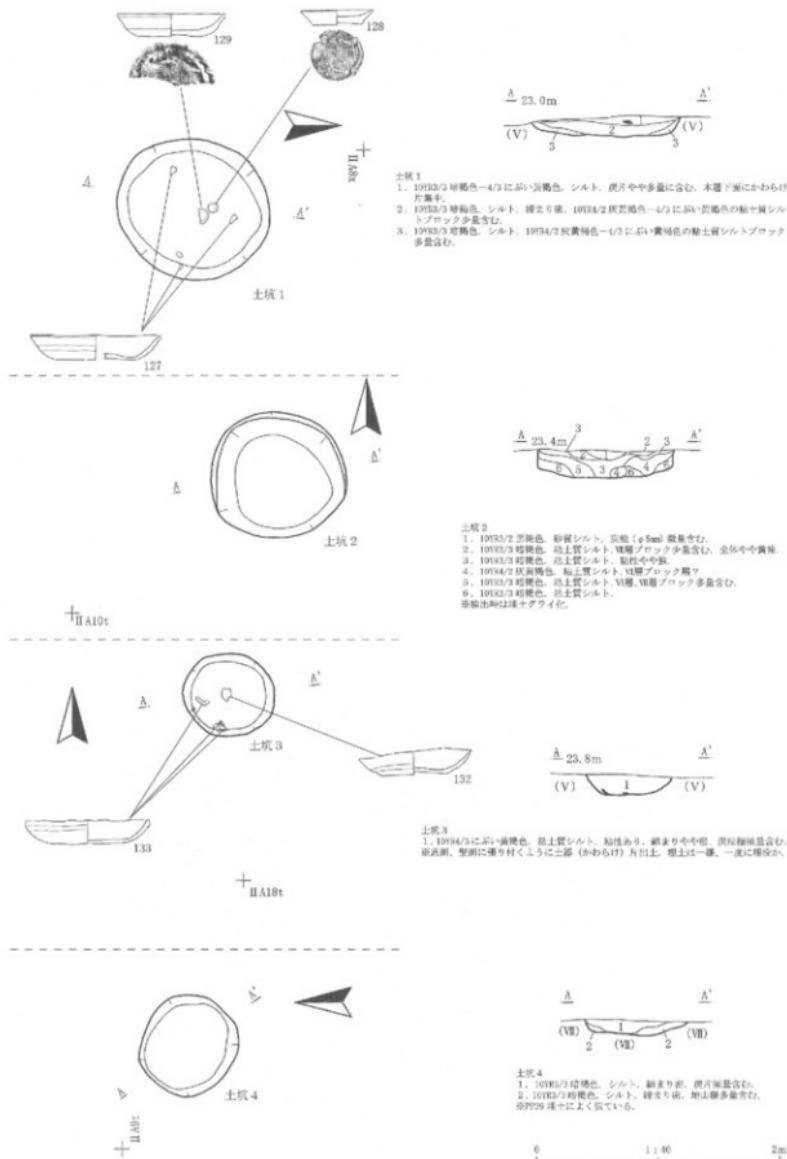
〔出土遺物〕（第40図、写真図版31）

かわらけ片が出土しているが細片につき不掲載とした。153は近接する平安時代住居跡付近から流入したとみられる須恵器坏小片である。

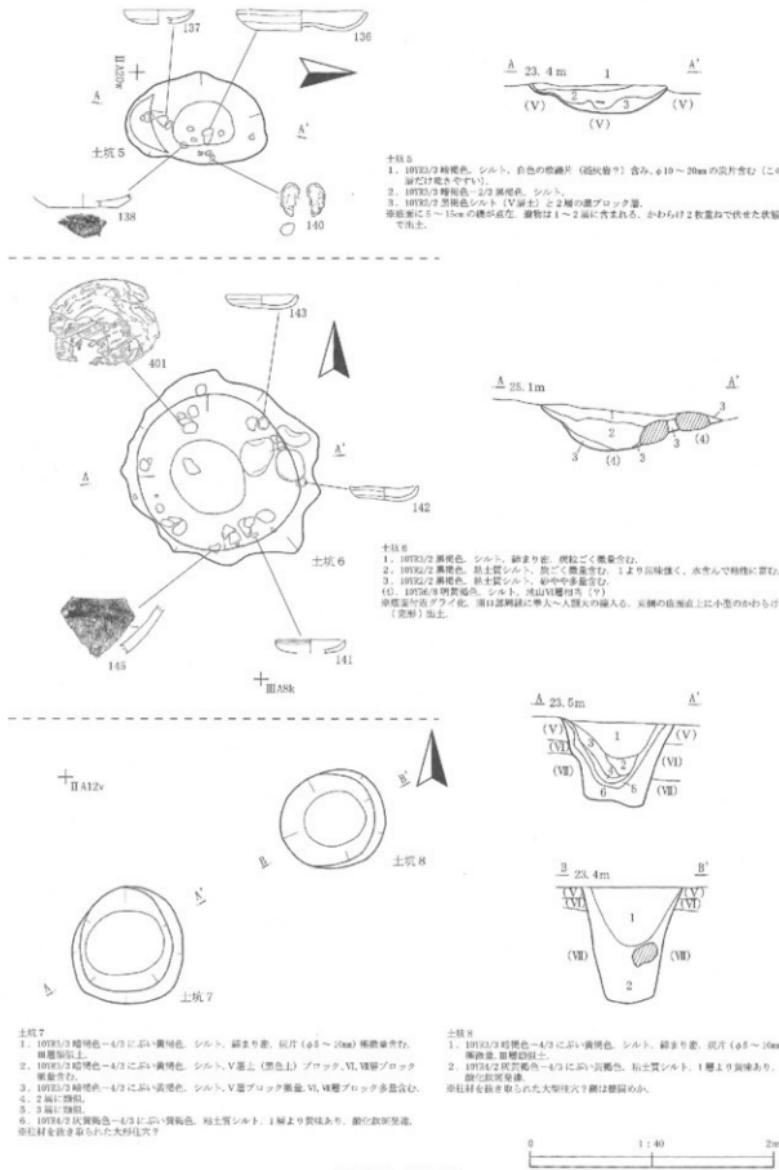
〔遺構の時期〕 埋土状況や出土遺物などから12世紀代に帰属すると思われる。



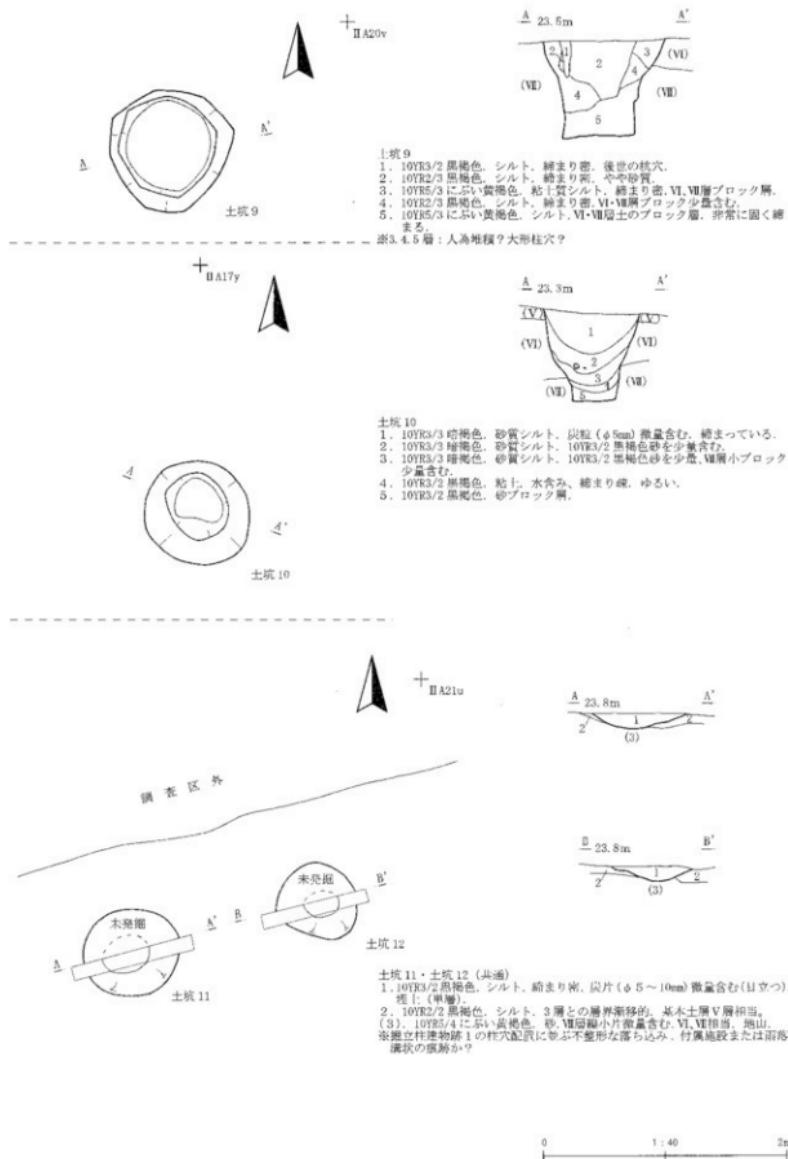
雨の現地説明会（平成18年7月22日）



第 22 図 土坑 (1)



第 23 図 土坑 (2)



第24図 土坑(3)

(6) 溝 跡

溝跡 1 (第 25 図、写真図版 21)

〔位置・検出状況〕 ⑥区北西部、II A 8 y ~ 10 v グリッドに位置する。V 層上面において明瞭な帶状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕 検出した全長は 16.3 m、幅は 45 ~ 70 cm、深さは 20 cm である。走行方向は N -58° ~ 61° - E である。

〔埋土と堆積状況〕 II 層下部に類似する粘土質土を主体とする。埋土の最上部には拳大の礫が点々と入る。付近の他の遺構でも埋土上部に II 層下部類似土の堆積が認められ、本遺構付近に洪水堆積土が及んだことを示唆している。

〔重複遺構〕 なし。

〔出土遺物〕 (第 40 図、写真図版 31)

てづくねかわらけ破片 (154)、常滑産鉢破片 (155) などが出土している。

〔遺構の時期〕 出土遺物と埋土から 12 世紀と考えられる。

溝跡 2 (第 12 ~ 17・25 ~ 27 図、写真図版 21・22)

〔位置・検出状況〕

敷石遺構の東縁に沿い、池状遺構の北西部付近で東に屈曲するものである。主に④⑤区中央西部～北縁部を走行し、⑧区を経由して⑥区南東隅部に延びている。同様の軌跡を通る溝が複数重複・平行しており、これらを一括して「溝跡 2」と呼称している。

〔細分〕

上記のとおり、本遺構は同一箇所に繰り返し設けられた溝跡が重複した状態で検出されたものである。精査着手に際し、これらを峻別し個別に精査を進めることは、埋土の類似性等から極めて困難であると思われた。そこで埋土の掘り上げは一括して行い、その後、敷石遺構の精査で設定したベルトを本遺構にも兼用して堆積状況を確認し、最終的に全体の整合性をもった解釈が得られるよう検討することとした。その結果、敷石遺構東縁を走行する溝跡は a ~ d に細分され、これに④⑤区北縁東部に延びる 2 条を加え e・f とした。以下、個別に記載する。

・溝跡 2-a (第 26 図)

〔細分根拠〕 敷石遺構断面 B ~ E・I から性状の共通する土層を抽出した。

〔埋土と堆積状況〕 黒褐色シルトを主体とし全体に砂の混入が顕著である。地点により底面に豆粒の大の小礫の集中が見られる。

〔周辺遺構との関係〕 敷石遺構の東縁に付属しており、帯状敷石面の南部から北端部付近を経由し、溝跡 2 の屈曲部を越えて東側にも埋土が認められる。溝跡 2-a ~ d のうち最も新しい。

・溝跡 2-b (第 26 図)

〔細分根拠〕 敷石遺構断面 A ~ E・G・H から性状の共通する土層を抽出した。

〔埋土と堆積状況〕 にぶい黄褐色～黒褐色のシルトが主体である。砂を大量に含み、粘土質土の薄層を挟む地点もある。

〔周辺遺構との関係〕 敷石遺構の東縁に付属し、帯状敷石面の南部部から北部付近にかけて埋土が認められる。溝跡 2-a より古く、c・d より新しい。

・溝跡 2-c (第 27 図)

〈細分根拠〉 敷石遺構断面 A～E・G～J から性状の共通する土層を抽出した。

〈埋土と堆積状況〉 埋土の大半が暗褐色の砂で、一部に黒褐色シルト・粘土質シルトが介在する。底面に粗砂・小礫の集中が見られる地点がある。敷石遺構断面 B-B' の中央部に波線で示した (c) はこの地点における掘り形から溝跡 2-c の位置を推定したものである。また (c') は溝跡 2-c の東側に埋土の連続する掘り込み（池状遺構に類似）が想定されたためその堆積層を模式的に図示したものである。

〈周辺遺構との関係〉 敷石遺構の東縁に付属しており、帶状敷石面の南端部から北端部付近を経由し、溝跡 2 の屈曲部を越えて東側にも埋土が認められる。溝跡 2-a・b より古く、d より新しい。取水口状遺構 1 よりは新しく、取水口状遺構 2 の取水源である可能性がある。

・溝跡 2-d (第 27 図)

〈細分根拠〉 敷石遺構断面 A～E・G～J から性状の共通する土層を抽出した。

〈埋土と堆積状況〉 黒褐色～暗褐色シルトを主体とし砂の薄層が挟在する。地点によって砂質が強い。敷石遺構断面 B-B' の中央部に示した (d') は、溝跡 2-d の東側に埋土の連続する掘り込み（池状遺構に類似）が想定されたためその堆積層を模式的に図示したものである。取水口状遺構 3 の下段にある掘り込みと対比される。

〈周辺遺構との関係〉 敷石遺構の東縁に付属しており、帶状敷石面の南端部から北端部付近を経由し、溝跡 2 の屈曲部を越えて東側にも埋土が認められる。溝跡 2-a～d のうち最も古い。取水口状遺構 1 や取水口状遺構 3 の取水源である可能性がある。

・溝跡 2-e (第 25 図、写真図版 21・22)

〈細分根拠〉 ④⑤区北縁東部から⑧区を経て⑥区南東隅に抜けている。溝跡 2-a～d の延長上に位置し、埋土も類似することから溝跡 2 の一部と判断した。

〈埋土と堆積状況〉 黒褐色シルトを主体とする。地山Ⅶ層の礫の混入が比較的顕著である。

「溝跡 2-e」は④⑤区北縁に張り出している調査区外に隠れた部分より東側のみを指しているが埋土や掘り形をみれば、取水口状遺構 1 から東側の一段深い部分（敷石遺構断面 J-J' 2・4～8 層）に連続することは間違いないと思われる。地山のブロックや礫を含む埋土下半部は構築段階～機能段階、拳大礫と遺物片を多く含み炭化物粒の混入が顕著な埋土上半部は廃絶段階以降の堆積層と推測される。また、溝跡 2-e 末端部の⑥区南東隅部では埋土の上部に洪水堆積層である II 層下部類似土の堆積が認められる。他の 12 世紀帰属遺構でも埋土上部に当該堆積層が観察されており、⑥区の一部が増水時の浸水区域であったことを示唆している。

〈周辺遺構との関係〉 溝跡 2-f の北側に並走するが、埋土は異なり底面標高の差も大きいことから f とは時間差がある（f より古い）と考えられる。一方、⑥区北縁の溝跡 1 とは埋土も類似し、走行方向が同じであることから同時存在の可能性が考えられる。

〈遺構埋土の保存〉 ⑧区及び⑥区南東隅部にかけては、検出面以下の精査は行わず埋土を温存したまま埋め戻すこととなった。遺物の集中が顕著な地点であり、埋土には一定量の遺物が保存されているものと思われる。

・溝跡 2-f (第 25 図、写真図版 21)

〈細分根拠〉 ④⑤区北縁東部に位置し溝跡 2-a～d の延長上にであることから、溝跡 2 の一部の可能性があると判断した。

〈埋土と堆積状況〉 黒褐色シルト主体の単層である。溝跡 2-e の埋土最上部にやや似るが、砂

の混入量が異なる。

〈周辺遺構との関係〉 溝跡2-eの南側に並走するが、埋土は異なり底面標高の差も大きいことからeとは時間差がある（eより新しい）可能性が高いと考えられる。走行方向を見ると、調査区外に隠れている西端部は取水口状遺構1付近に向かって延びており、西側に向かうほど溝跡2-cとの間隔は狭まっているものと推測される。a～dのうちの新期のもの、あるいはこれらより新しくすでに痕跡が消失した別の溝跡に連続していた可能性がある。

〔出土遺物〕（第40・41図、写真版図31）

156～173は「敷石遺構東縁の溝跡」から出土したものをまとめて取り上げた資料である。すなわち溝跡2埋土として一括して取り上げた資料となるのだが、細分したいずれの溝に帰属するかは不明である。てづくねかわらけ、ロクロかわらけ、国産陶器（常滑産・渥美産）、中国産磁器などがある。

溝跡2は敷石遺構・池状遺構および取水口状遺構等、近接する各遺構との関連が強いものと思われ、周辺の遺物出土状況（第17・21図）と出土遺物（第34～39図）もあわせて参照されたい。

また、⑥区南縁周辺の出土資料（第41～44図）として掲載したもののうち、特に表6で「⑥区南縁周辺（⑧区）」が出土地点になっているものは、ほぼ全て溝跡2-eの埋土最上部に帰属させることができる。

〔遺構の時期〕

溝跡2-a～fの帰属時期は、出土遺物と埋土から12世紀及びそれ以降と考えられる。

溝跡3（第28図）

〔位置・検出状況〕

敷石遺構帶状敷石面の西縁及びその延長上に断続的に検出されたものである。④⑤区中央西部から⑦区中央部に位置する。溝状の掘り込みとして認識できる6箇所にa～fの細分名を付した。

〔細分〕

・溝跡3-a

〈地点〉 敷石遺構帶状敷石面中央部西縁、III A 3 h グリッド南東隅部に位置する。

〈規模・形状〉 長さ210cm、幅50～60cm。底面に凹凸があり、北側に向かって段階的に深くなっている。

〈埋土と堆積状況〉 敷石遺構断面C-C'の4層が埋土に相当し、敷石面を被覆する2a層の下位に堆積している。III層相当の黒褐色シルト主体。溝跡2と対になるものと思われるが、溝跡2-a～dのいずれと対応するかは不明である。

・溝跡3-b

〈地点〉 敷石遺構帶状敷石面中央部西縁、III A 2 i グリッド南西部に位置する。

〈規模・形状〉 敷石遺構帶状敷石面北部にある「テラス状の高まり」の南辺西端部に、南側から抉りこんだような幅60cm程度の不明瞭な痕跡として残存している。敷石面上においてはほとんど認識できない程度の深さである。

〈埋土と堆積状況〉 敷石遺構断面E-E'において、敷石面を構成する盛地層の6層が西端で切れている箇所が該当する。敷石面を被覆するIII層相当上が連続して堆積しており、溝跡2と対になるものと思われるが、溝跡2-a～dのいずれと対応するかは不明である。

・溝跡3-c

〈地点〉 敷石遺構帶状敷石面北部西縁、III A 1 i グリッドに位置する。

〈規模・形状〉 長さ 340 cm以上、幅 60 cm。非常に浅いシミ状の痕跡で、南端部が攪乱（防火水槽）に切られている。

〈埋土と堆積状況〉 III層相当層が帯状に痕跡的に残存したものであり掘り形は極めて不明瞭である。

・溝跡 3-d

〈地点〉 ④⑤区北西部、II A 24 i グリッド南部に位置する。

〈規模・形状〉 長さ 200 cm、幅 50 cm。底面に凹凸を持つ。北端部が調査不能区域に延びる。

〈埋土と堆積状況〉 III層相当の黒褐色シルト主体の単層。

・溝跡 3-e (写真図版 16)

〈地点〉 ⑦区中央部、II A 23 i グリッドに位置する。

〈規模・形状〉 長さ 280 cm、幅 70 cm。整った底面と内湾して緩やかに立ち上がる壁面を持つ。南北両端が調査区外へと延び、全体形状は不明である。

〈埋土と堆積状況〉 ⑦区を東西方向に継断する敷石遺構断面 L-L' の4層が本遺構の埋土に相当する。埋土中部に拳大の礫が入り、また、層中に炭化物の混入が顕著であるなど、溝跡 2-e や池状遺構の埋土に良く似る。

・溝跡 3-f

〈地点〉 ④⑤区北西部、II A 24 i グリッド南部に位置する。

〈規模・形状〉 長さ 220 cm、幅 70 cm。南端部底面に凹部を持つ。掘り形は不明瞭で北端は調査区外に延びており、全体形状は不明である。

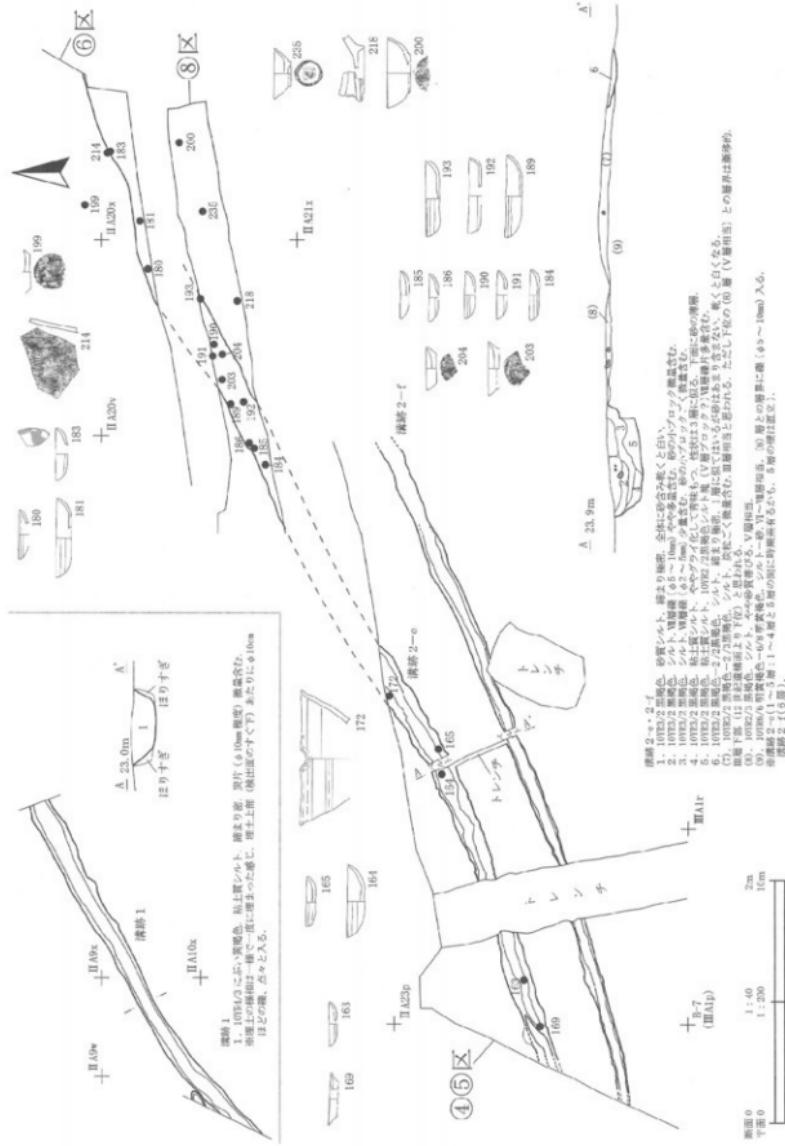
〈埋土と堆積状況〉 III層相当の黒褐色シルトを上体とする。

〔出土遺物〕(第 40・41 図、写真図版 31)

⑦区に位置する溝跡 3-e の埋土から、てづくねかわらけ片 (174)・常滑窯甕片 (176)・須恵器系陶器片 (177) が出土している。

〔遺構の時期〕

溝跡 3-a ~ f の帰属時期は、堆積状況や周囲との関係性から 12 世紀及びそれ以降と推定される。

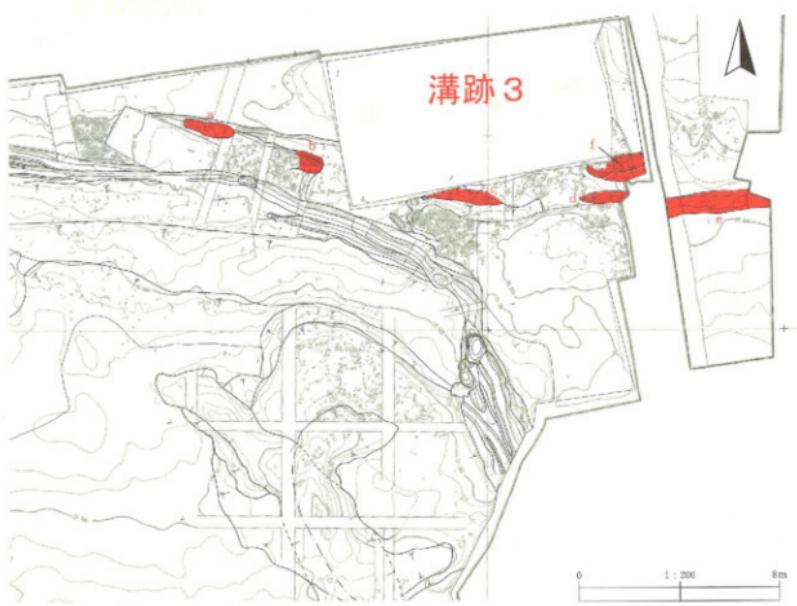


第25図 溝跡1・2-e・2-f





第27図 溝跡2c・2d



第28図 溝跡3



調査の様子

(7) 壁穴住居跡

壁穴住居跡 1 (第 29・30 図、写真図版 23・24)

〔位置・検出状況〕

⑥区南西部、II A 20 t グリッドに位置する。V 層上面で不明瞭な隅丸長方形の範囲として検出された。

〔規模・形状〕

平面形は 300 × 290 cm の方形を呈する。床面までの残存深度は最大 10 cm である。

〔埋土と堆積状況〕

埋土の主体は炭化物を含む黒褐色土 (2 層) である。床面には少量だが纖維方向を残す炭化材が点在し、廃施時の焼失を示唆している。2 層を被覆するのは 12 世紀遺構の埋土主体土となる III 層に相当するもの (1 層) で、南東側に傾斜し床面の一部を切っている。

〔壁・壁溝・床面・柱穴など〕

壁の立ち上がりは北壁及び西壁側でわずかに認められるが全体に削平を受けており残存状況は痕跡的である。特に南壁側の立ち上がりは不自然に緩やかで、さらに外側に平行する溝状の掘り込みを伴うなど、本来の南壁位置は判然としない。床面は壁際まで平坦で、南壁外の溝を除けば、櫻構に相当する可能性をもつものは確認できない。住居内には図示した数個の柱穴が確認されているが、12 世紀以降の柱穴群と重複し、配置も整わないことから、本住居跡に伴う柱穴を特定することはできなかつた。

〔カマド〕

東壁のほぼ中央に設置されている。12 世紀の柱穴 (pp81 : 建物跡 1) によって燃焼部中央が破壊され、焼土はごくわずかに残るのみである。燃焼部の最奥部に倒立して設置された土師器小形甕は支脚であろう。カマド手前の床面に焼上塊とともに点在する拳大の角礫は、カマドの芯材に用いられたものと思われる。外にのびる煙道は認められず、両袖部の間の壁面がやや張り出すような状態となっている。床面付近まで削平を受けたものであることから煙道部の形態は不明とすべきであろう。

〔重複〕

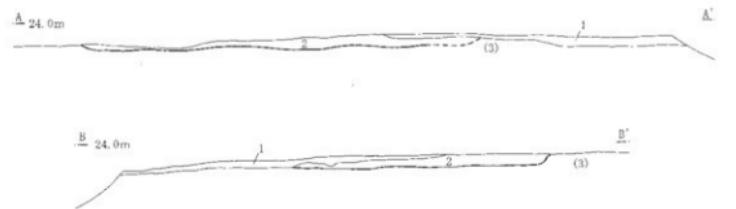
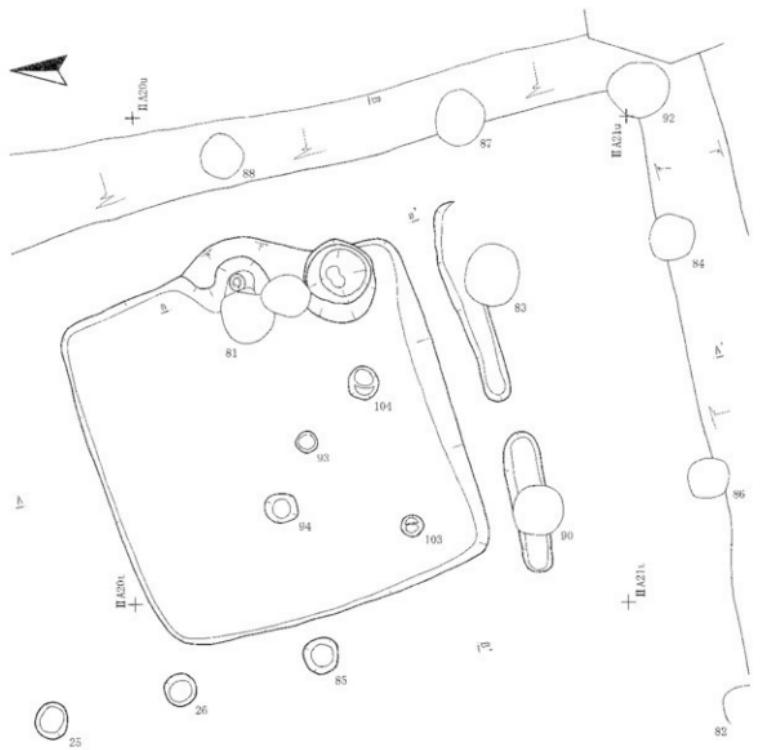
建物跡 1 及び建物跡 3 のプランに重複し、これらを構成する柱穴に切られている。

〔出土遺物〕 (第 44・45 図、写真図版 33・34)

内面黒色処理の施された土師器坏 (241)、ロクロ整形による土師器甕 (242・243)、須恵器甕 (248 ほか)、木質の付着した刀子様の鉄製品 (301) などが出土している。カマド燃焼部からは非ロクロ整形の小形甕 (244) が倒立した状態で出土した。支脚として設置されたものと思われる。

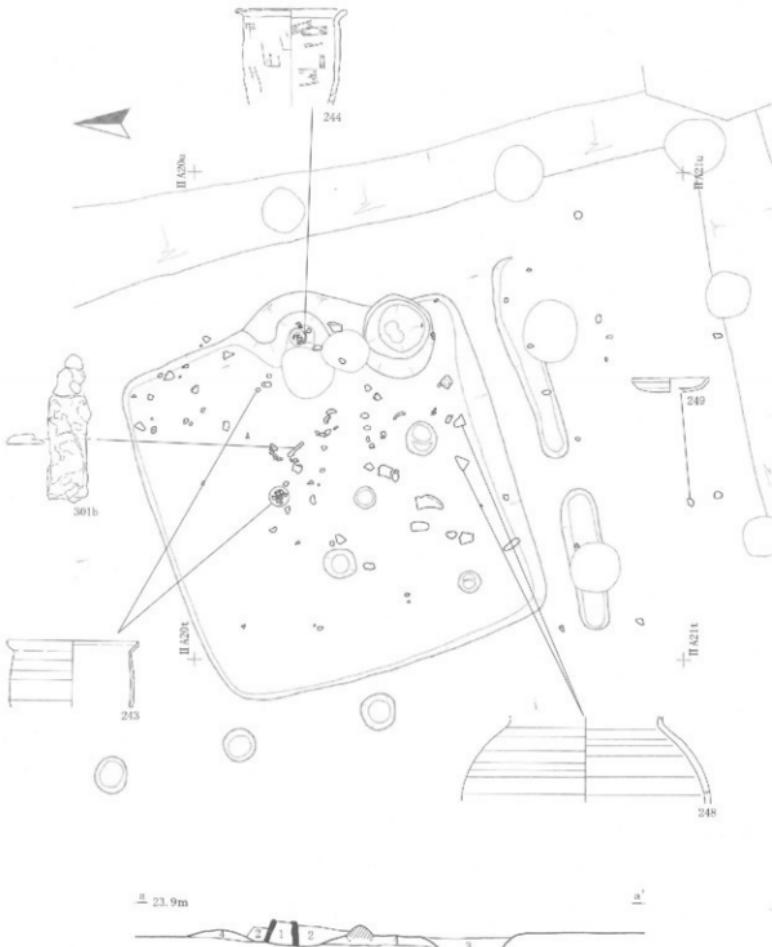
〔遺構の時期〕

出土遺物から 9 世紀後半から 10 世紀初頭に帰属すると思われる。



第29図 住居跡 1 (1)

- 第29図 住居跡 1
 1. 10YR 4/3 に近い黄褐色—3/3 緩粘土色。シルト、乾くと真っ白、斜面下上でかわらけ等を含む12世紀の上層と同じ。
 2. 10YR 3/2 黒褐色—3/3 黒褐色。シルト、本遺構の厚土、炭片少無合む。12世紀下層。
 3. 10YR 2/2 黒褐色。シルト、粘性あり、細まり極前、緩慢漸傾ごく微弱含む。2層より黒褐色。V形相当。
 東北壁、東側ではわずかに立ち上がり見られるが、東側に下る地形のため、東・南壁は失われていて(1層に切られてしまっている)。東壁北側に火葬状の裏が獨立。この付近に遺物、縄が集中する。堆土には比較的炭化材が多い。喪失か?



豎穴性断跡 1 カマド

1. 5YR8/8形赤褐色。シルト、粘土、カマド内の倒壊の内部・支撑？
 2. 10TZR2/黑褐色。シルト、物質を含む、炭酸（5～10 mm）微量含む。4層土ブロックや多量含む。
 3. 2. 3. 黄褐色。カオル、粘土質土（不純物）の薄土。
 4. 10TZR3/褐褐色。4/3にぶく黄褐色。シルト、2層より多く繋接着している。被廻認定。
 5. 例) SIT 101 のカマドはほぼ中央部で露頭。12世紀の陶器（PPB）によって大きく破損されている。断面を取った箇所は透徹部より上堅膜、又は想し窓側立した壁が搬入された地位ある。神は地主は土などを含まない青色シルトで構築されている。石材には角石が用いられていたと思われ、断面にかかっているもののほか、カマド周辺には被焼した黒が残してある。

For more information about the study, please contact Dr. Michael J. Koenig at (314) 747-2146 or via email at koenig@dfci.harvard.edu.



第30図 住居跡1 (2)

(8) 陥し穴状遺構 (第31・32図、写真図版25・26)

〔検出数〕

計6基である。このうち1基(陥し穴6)は検出面以下の精査を行わず埋め戻した。

〔位置・検出状況〕

⑥区南半部に集中し、南西から北東にかけて列状に分布する。

〔規模・形状〕

精査した5基はいずれも隅丸長方形の底面を有する。開口部は崩落等により元の形状を留めていない可能性が高く、本来は底面と同じく長方形を基調とした形状であったと推測される。変形の可能性が小さいと思われる底面の長軸長・短軸長に着目すると、長さ110cm・幅50cm前後の「幅広」のものと、長さ150cm・幅30cm前後の「細長い」ものに大別できる。前者には陥し穴1・3・4、後者には陥し穴2・5が当てはまる。1～5はいずれも底面に複数の小ピットをもち、中央に1個、その両側に2個ずつを配した、賽の目の「5」のようなX字状の配置を基本としている。

〔層位的所見〕

陥し穴状遺構が位置する⑥区は北東部及び南東部に向かって傾斜しており、中央部のやや広い範囲が削平を受けているが、主に東半部では基本土層Ⅲ層以下の層序が比較的良好に残存していた(IV層は④⑤区沢跡内にのみ存在するものであり、これを除く)。

6基のうちの3基、陥し穴4～6は、⑥区の東半部に位置しいずれも縄文時代遺物(後～晩期か)を包含するV層の上面で検出された。第32図に示した陥し穴4・5の断面では、V層を切り込んで構築されている様子が確認できる。埋土の主体は基本層序Ⅲ層に相当する黒褐色～暗褐色シルトである。本遺跡においてⅢ層は、主に平安時代前期～12世紀の遺構埋土の主体土であり、遺跡内に観察される層序関係からも十和田a降下火山灰の降下以降に形成されたと考えられるものである。V層上面を検出面としⅢ層相当土を埋土の主体土とすることからみれば、本遺跡の陥し穴状遺構の帰属年代の上限は10世紀初頭より新しいといえる。

また、陥し穴3・4・6の断面には、埋没の最終段階に上方から流入したやや明るい「暗褐色～鈍い黄褐色」土が観察される。これは12世紀遺構埋土に共通するⅢ層土、および洪水堆積層であるⅡ層土下部に相当するものと思われる。陥し穴1が12世紀の四面庇建物の柱穴(建物跡1のp39)に切られていることも勘案すれば、当該遺構の帰属年代の下限は12世紀となる。

〔周辺遺構との関係〕

陥し穴1がpp39(建物跡1)・pp102に切られている。

〔出土遺物〕

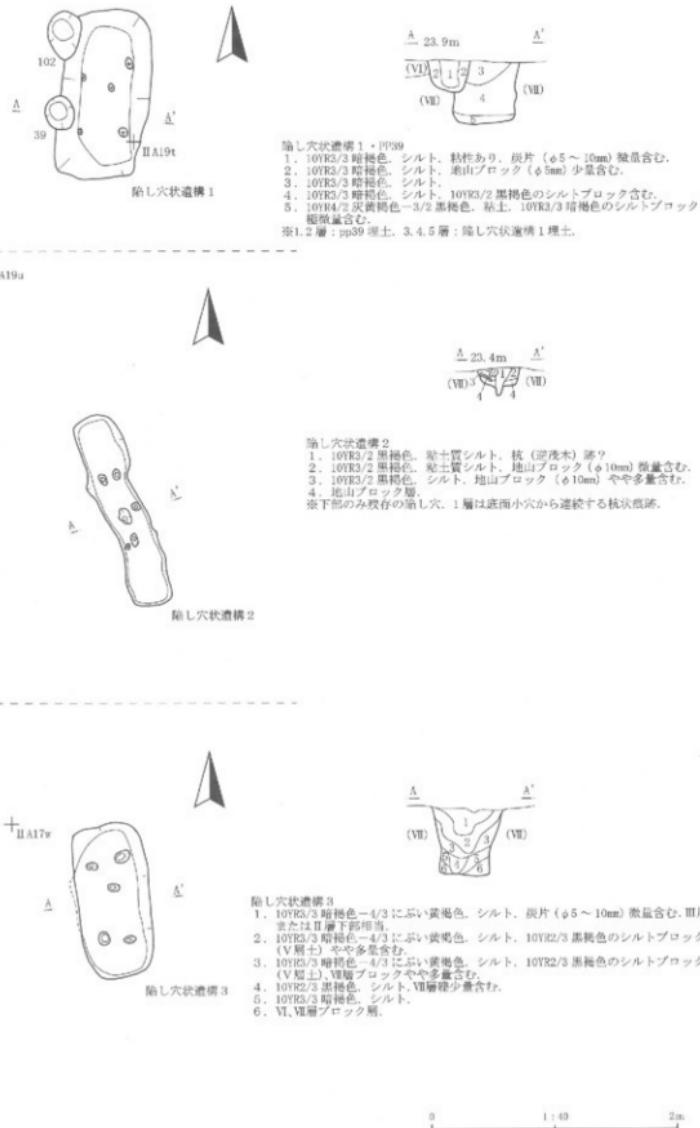
なし。

〔遺構の時期〕

形態的には縄文時代に帰属させるのが自然であるが、それ以外に積極的な根拠を欠いている。層位的観点からは平安時代前期(10世紀?)以降、12世紀以前と考えることができる。

〔特記〕

平成17年度に当センターが調査した奥州市胆沢区の宮沢原下遺跡では、埋土に十和田a下降火山灰を含む陥し穴状遺構が多数確認されている(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第495集)。平安時代前期(10世紀)の当地域において、長方形～橢円形の平面形を持ち底面に小ピットを持つ陥し穴が利用されていたことが明らかとなっており、本遺跡例はこれに類する可能性がある。



第31図 階し穴状遺構(1)



第32図 階し穴状遺構(2)

表5 踏し穴状遺構一覧

	位置(グリッド)	開口部形状 規模(cm)	底面規模(cm)	残存深度(cm)	割穴数 配置	備考
踏し穴1	II A 18 s ~ 19 s	不整圓丸長方形 142 × 52	115 × 40	32	5個 X字状	
踏し穴2	II A 19 u	不整圓丸長方形 165 × 36	158 × 28	15	6個 X字状 + 1?	底部付近のみの残存
踏し穴3	II A 17 w	廣丸長方形 125 × 60	115 × 50	56	5個 X字状	
踏し穴4	II A 15 x ~ 16 x	廣丸長方形 145 × 90	108 × 52	74	5個 X字状	
踏し穴5	II A 16 x	不整圓丸長方形 168 × 72	148 × 35	70	5個 X字状	
踏し穴6	II B 16 a ~ 16 b	廣丸長方形 155 × 60	不明	不明	不明	検出のみ、未精査

(9) 沢跡

沢跡1 (第6・19・20・33図、写真図版27)

〔位置・検出状況〕

④⑤区の北半部に位置する。V~VI層上面及び池状遺構底面で検出された。

〔規模・形状〕

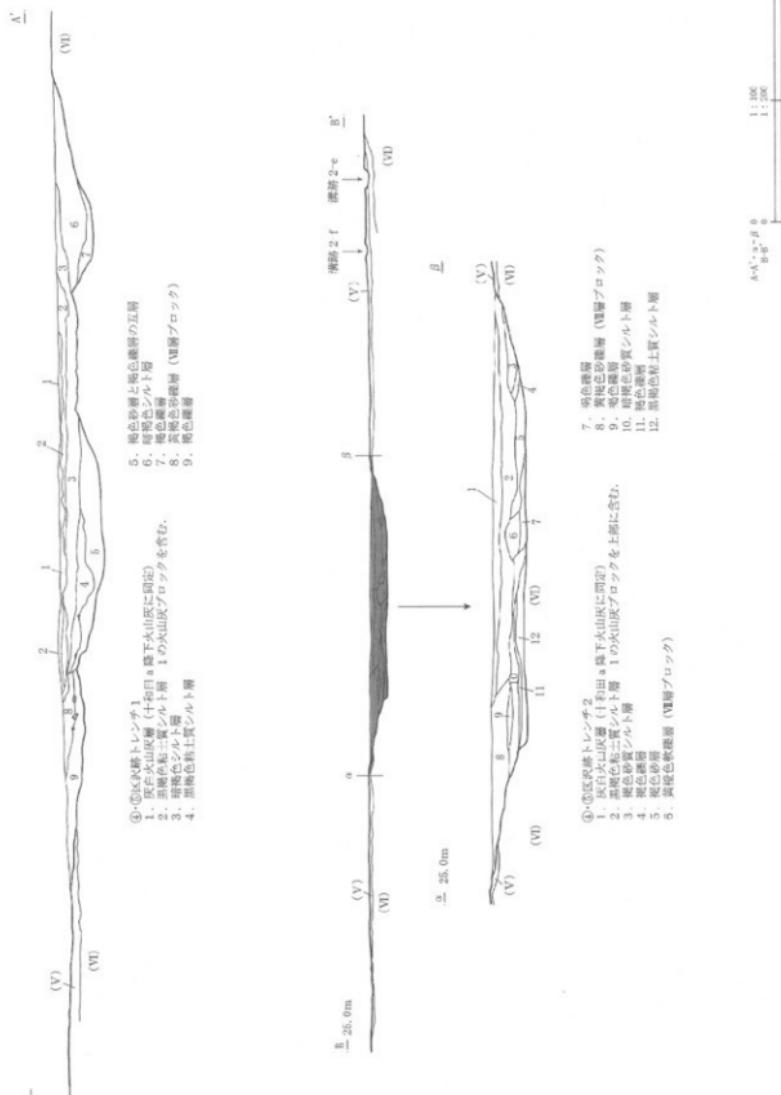
全長は約45m以上、幅は3m前後、検出面からの深さは50~60cmである。III A 4 k グリッド付近が上流側の端で、III A 2 o グリッド付近を頂点とした弧を描き、III A 5 s 付近で調査区外東側へと抜けている。

〔埋土と堆積状況〕

第33図下段のB-B'は、沢跡1と沢跡2の重複地点を南北に断ち切った「沢跡トレンチ2」の断面図である。1~7層までが沢跡1の堆積層に相当する。1層は厚さ20cmを越える十和田a降下火山灰層、その下位の黒褐色粘土質シルト層(2層)は池状遺構埋土の3a~c層に連続するものである。この地点の十和田a降下火山灰層は沢跡1に加え沢跡2の堆積土最上部にも広く堆積が認められる。なお、沢跡1の底面直上から採取した炭化物粒(第19図池状遺構断面Qw-Qw', ^{14}C サンプルNO.3)の年代測定(AMS測定)を実施し、430~540AD(910±30yrBP)との測定結果を得た。

〔重複遺構〕

III A 3 r グリッドで沢跡2と交差している。下部の堆積層は沢跡2の下部堆積層を切っているが、最上部の堆積層は連続している。また、III A 3 l・同2mグリッド付近で池状遺構の南部と重複し、切られている。



第33図 沢跡トレンチ

〔出土遺物〕

池状遺構の記載でふれたとおり、沢跡1流路内の黒褐色粘土質シルトから平安時代前期の遺物が出土している。池状遺構3a層がこれに当たり、特にⅢA 2 mグリッド付近から9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる須恵器・土師器のまとまった出土がみられた。池状遺構の北側には平安時代の堅穴住居跡（住居跡1）が検出された⑥区に連続する微高地頂部が広がっており、この付近における該期の人間活動に伴う遺物と考えられる。

〔帰属時期〕

放射性炭素年代測定結果から5～6世紀までさかのぼる可能性がある。十和田a降下火山灰の堆積時（10世紀初頭）にはすでに大半が埋没していたが、その後の12世紀に至っても池状遺構からの排水経路となるなど、継続して自然の流水があったものと思われる。

沢跡2（第6・33図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕

③区北端部～④⑤区南部～東縁部に位置する。V～VI層上面で検出された。

〔規模・形状〕

全長は約80m以上、幅は最大15m、検出面からの深さは90cm（断面A-A'付近）である。③区と④⑤区の境界を西から東側へと下り、④⑤区東縁部に沿って北東方向へ向い、調査区外へと延びている。

〔堆土と堆積状況〕

第33図上段のA-A'は、沢跡2の調査区内における中央部を横断するように設定した「沢跡トレシチ1」の断面である。5・7・9層はいずれも礫層であるが、それぞれ異なる時期の流路の最下部に堆積したものと思われ、ほぼ同様のコースで開析・埋没を繰り返した様子が観察できる。最上層の1層は沢跡1と同様、十和田a降下火山灰層、2層は池状遺構の3a～3c層に対比される粘土質シルト層である。

〔重複遺構〕

ⅢA 3rグリッドで沢跡1と交差している。下部の堆積層は沢跡1の下部堆積層に切られているが、最上部の堆積層は連続しているまた、建物跡4を構成する柱穴群は沢跡2最上層の十和田a降下火山灰層を切っている。

〔出土遺物〕

なし。

〔帰属時期〕

沢跡1に切られていることから、沢跡1における放射性炭素年代測定結果から5～6世紀以前までさかのぼる可能性がある。十和田a降下火山灰の堆積時（10世紀初頭）にはすでに大半が埋没していたが、その後も継続して自然の流水があったものと思われる。

3 遺物 (表6~9、第34~45図、写真図版28~34)

(1) かわらけ

出土したかわらけの総量は大コンテナ(40%)4箱である。手づくねかわらけとロクロかわらけがある。

手づくねかわらけは70点を図示した。口径の分布には「14~16cm」及び「8~10cm」に顕著な集中がみられ、両者の間には明瞭な断絶が認められる。計測可能な個体48点のうち、前者は15点(31.3%)、後者は25点(52.0%)で、口径から大・小の二群に大別することができる。底径は「4~6cm」がやや多いが、その他が6cmから12cmの間に切れ目なく散布する状況である。器高は大半が1~3cmにおさまる。整形・調整は概して丁寧で、ほとんどがいわゆる「2段ナデ」とされるものに該当する。また、底面に「すのこ痕」が観察される個体が複数認められた。使用段階の痕跡としては、内外面に漆状の黒色塗膜が残るもの(32)、口縁から内面にかけて帯状のスス付着のあるもの(183)、などがある。

ロクロかわらけは29点を図示した。計測可能な個体13点は、口径「13.0~15.0cm」・器高「3.0~3.5cm」の群(3点)と、口径「8.0~10.0cm」・器高「1.6~2.1cm」の群(9点)の二群に大別できる。前者は緩く内弯して立ち上がる器壁をもった浅い楕形のもので、上述の手づくねかわらけの人口径の群に類似する。一方、後者はわずかに外傾・外反して短く立ち上がる器壁をもった小皿状のもので、あつい底部の外面に明瞭な回転糸切痕を残すものが多い。

(2) 国産陶器

国産陶器の出土総量は中コンテナ(28%)1箱である。常滑窯、渥美窯、須恵器系がある。常滑産陶器は52点を掲載した。器種には壺・鉢・片口鉢がある。いずれも12世紀後半期の所産とみられ、これらの過半(33点)は赤羽・中野生産地編年2型式(12世紀第三四半)に相当するものである。渥美産陶器は21点を掲載した。器種は壺・壺・鉢・片口鉢・山茶碗がある。226の鉢、235の山茶碗は12世紀中葉、その他は12世紀後半の所産とみられる。80は器面に枝を表現したと思われる刻画文をもち、破断面に漆織ぎの痕跡が認められる資料である。

須恵器系陶器は22点を掲載した。壺・壺・片口鉢がある。いずれも12世紀後半の所産とみられる。82は器外面の敵目に磨滅が認められ「おろし」に転用された可能性がある。85は内面に硯への転用の痕跡がみられる。

山茶碗を除き、これらの陶器類はすべて破片で出土したもので、全体形状を復元できたものはない。破損後に二次的に投棄・流入したものとおもわれる。

(3) 中國産磁器

出土資料は全て白磁で、総量は小コンテナ(20%)0.5箱である。このうち25点を図示した。器種には壺、瓶、皿がある。太宰府分類によれば、壺はII系(9点)・III系(2点)、碗はII類(1点)、IV類(3点)、V類(8点)、皿はIII類(1点)に相当する。

(4) 金属製品 (第45図、写真図版34)

301(a-b)は住居跡1の床面から出土した刀子様の鉄製品である。一部に木質の残存が認められる。鉄釘(303~308)は、⑥区の土坑1及び柱穴から出土したもので12世紀の遺物とみられる。

このほか、寛永通宝（309）や煙管（310・311）など、近世以降のものが出土している。

(5) 木製品（表8・第45図、写真図版34）

上坑6から木挽（401）が出土している。材質はケヤキで、表面に漆に似た黒色塗膜が残存する。出土時点から極めて脆弱であったため内部に上を残したまま取り上げ保存処理を行った。保存処理工程においても本体と土壤の分離が不可能だったため、内部観察や立体的な実測はできなかった。

(6) 土師器・須恵器

平安時代前期の土師器・須恵器は、主に住居跡1内部及びその周辺と、沢跡1内部に堆積した十和田a降下火山灰層の上下から出土した。

土師器は13点を掲載した。壺・坏があり、壺はロクロ整形とそうでないものがそれぞれ見られる。坏は内面に黒色処理が施され、119は底部下端及び底外面にケズリ調整が認められる。

須恵器は16点を掲載した。壺・壺・坏がある。122は壺と思われる胴下部で、底面に墨書きを持つ。173は小形の壺の胴部であろうか。

(7) 繩文時代の石器（第45図、写真図版34）

定形石器10点を掲載した。このほかに少量の剥片が出土している。V層には磨滅した時期不明の繩文土器細片が含まれており、これらの石器類も付近の繩文時代遺跡から流れ込んだものと推測される。

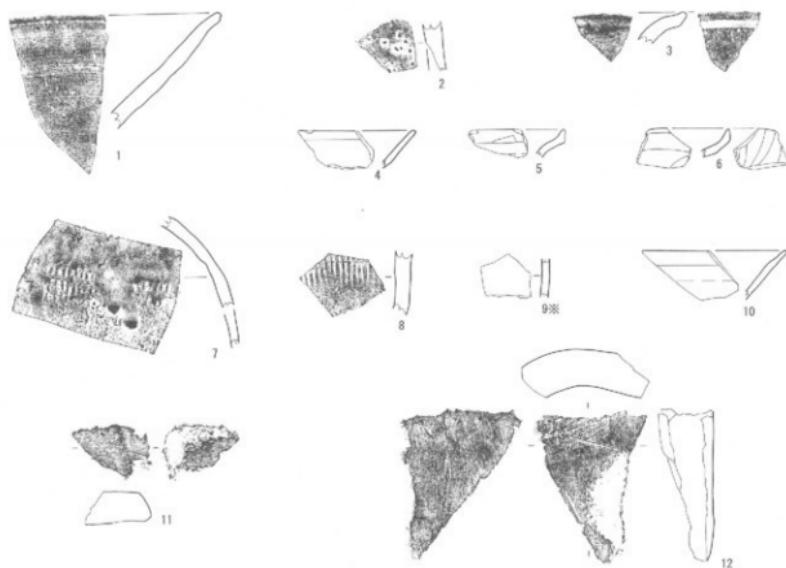
501は柳葉形の尖頭器、502～507は石鐵である。507のみ有茎で他は無茎鐵である。508は石錐の刃部であろう。509は素材剥片の打点側に抉りがみられることから、つまみ部作出の意図あるものと解釈し「石匙」とした。しかし刃部加工の剥離が不十分であり未成品あるいは粗製品の可能性が高い。

(8) その他の遺物

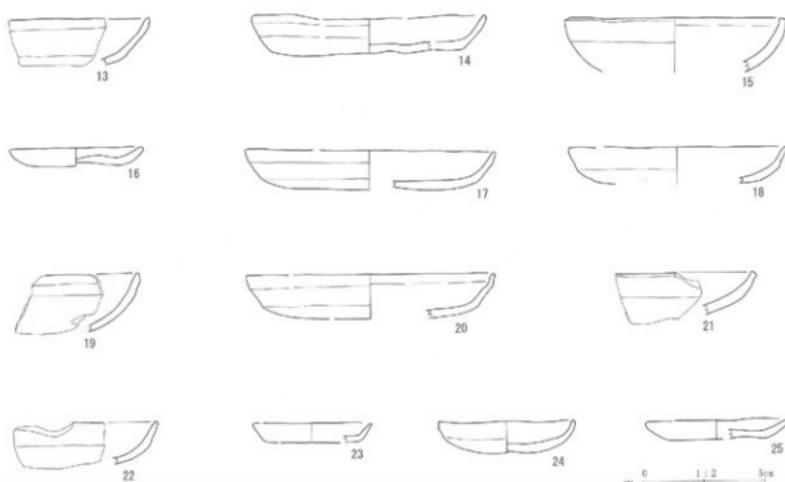
⑥区の南西部からは17世紀初頭の軒平瓦（11・12）が出土している。微高地頂部である⑥区が、当該期においても建物を配置する空間として利用された可能性を示す遺物である。

また④・⑤区の敷石遺構や池状遺構のさらに上位に堆積した上層（一部耕作土）からは近世の磁器が出土している（105・125・126）。

140の焼粘土塊は上坑5の埋土に含まれていたものである。焼成良好で橙色を呈する部分と、焼成の不十分な灰白色の部分がみられる。何らかの土製品あるいはフイゴ羽口などの一部の可能性がある。

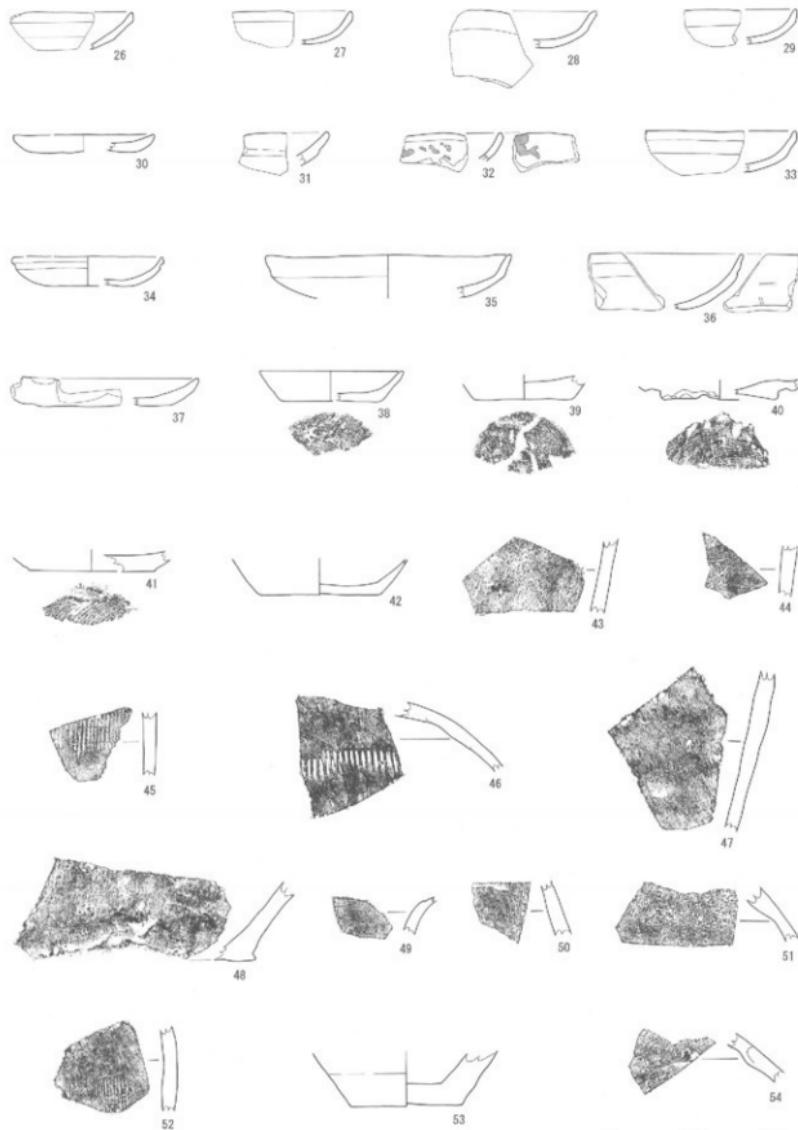


建物跡 1 ~ 3 とその周辺



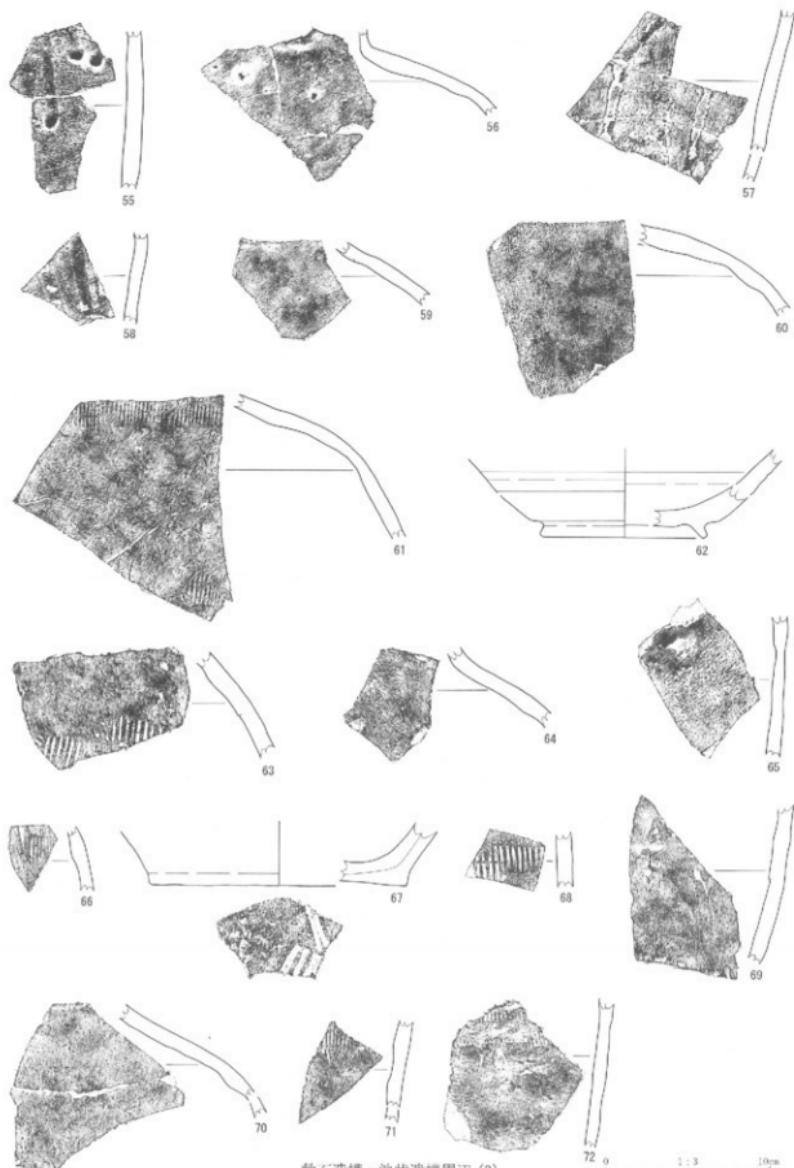
敷石遺構・池状遺構周辺 (1)
第 34 図 土器・陶磁器 (1)

0 1 : 2 5cm
0 1 : 3 10cm

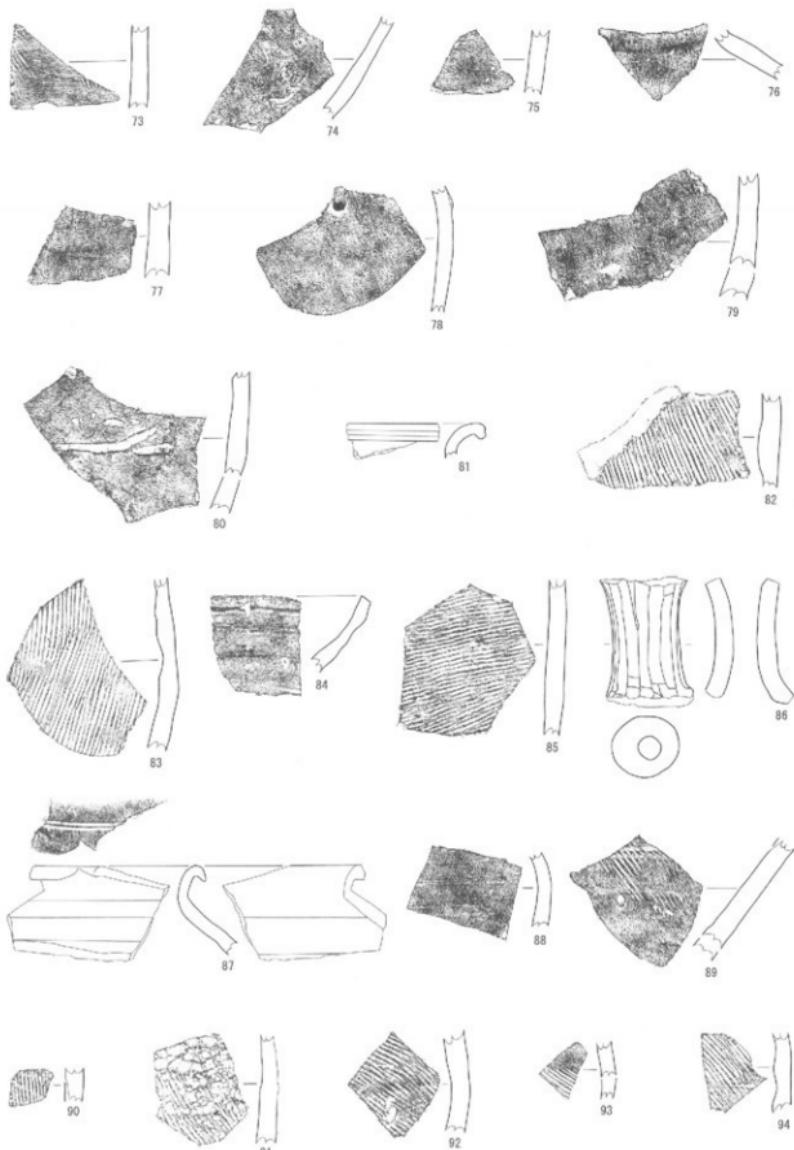


敷石遺構・池状遺構周辺(2)
第35図 土器・陶磁器(2)

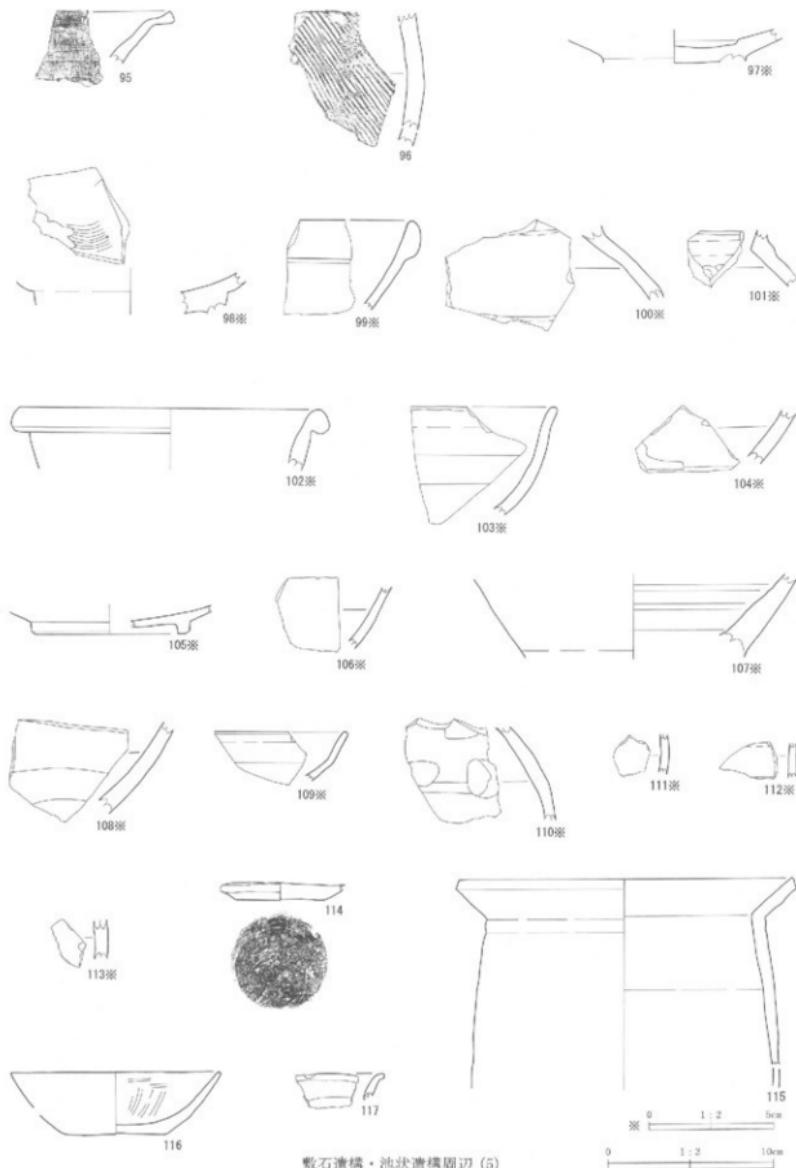
0 1:3 16cm



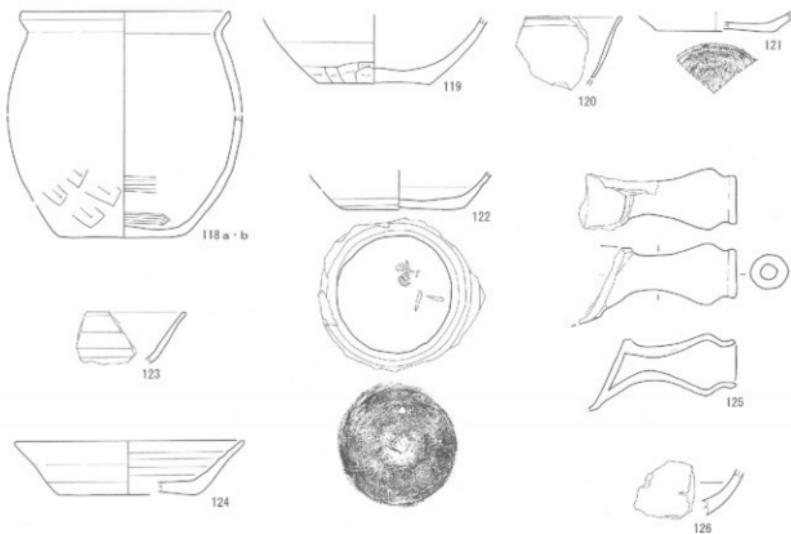
板石遺構・池状遺構周辺(3)
第36図 土器・陶磁器(3)



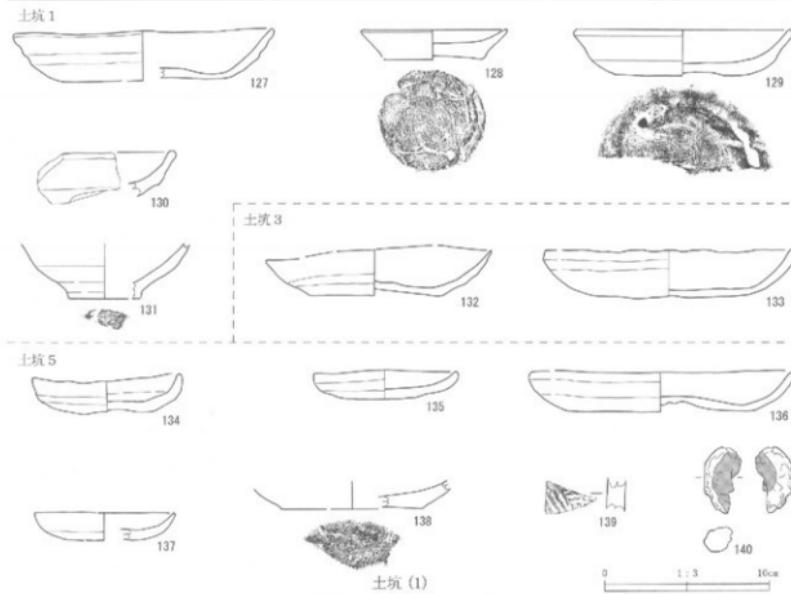
石遺構・池状遺構周辺 (4)
第37図 土器・陶器 (4)



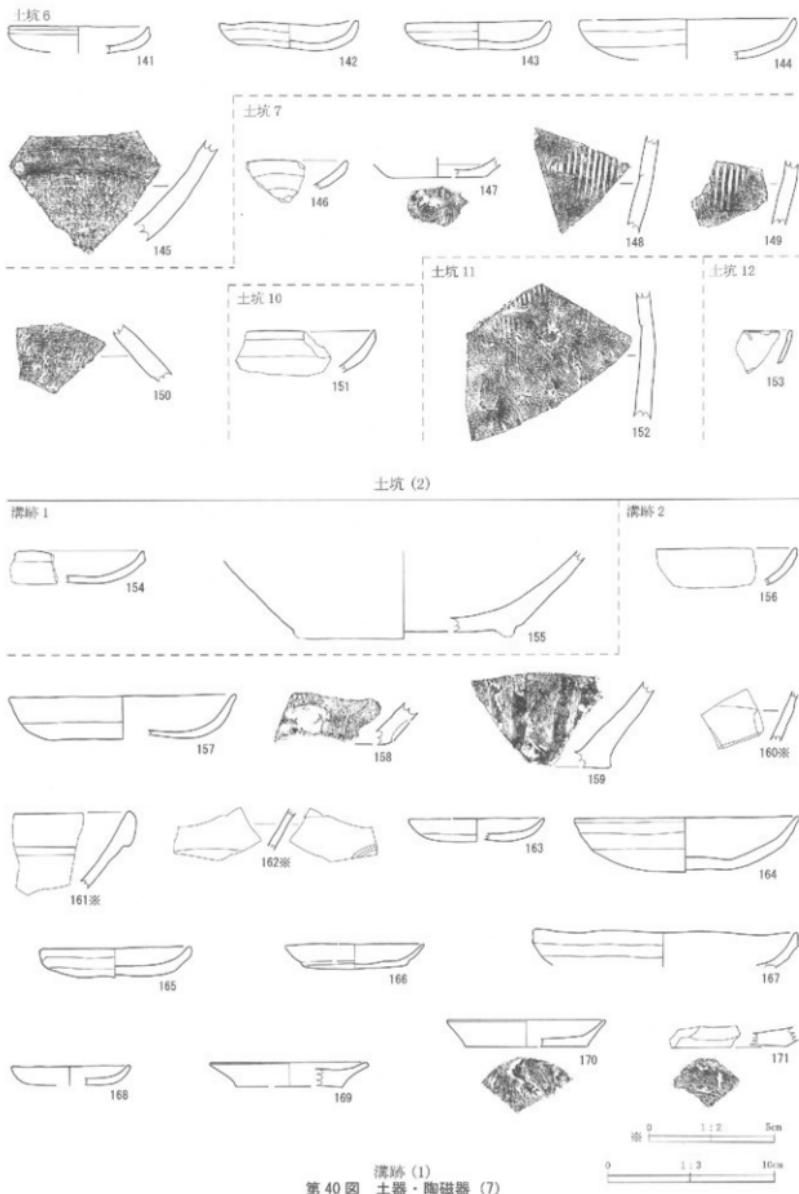
敷石遺構・池状遺構周辺 (5)
第38図 土器・陶磁器 (5)



敷石遺構・池状遺構周辺 (6)

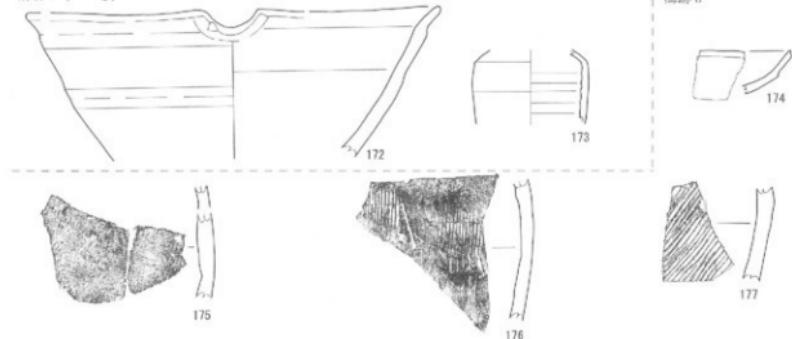


第39図 土器・陶磁器 (6)

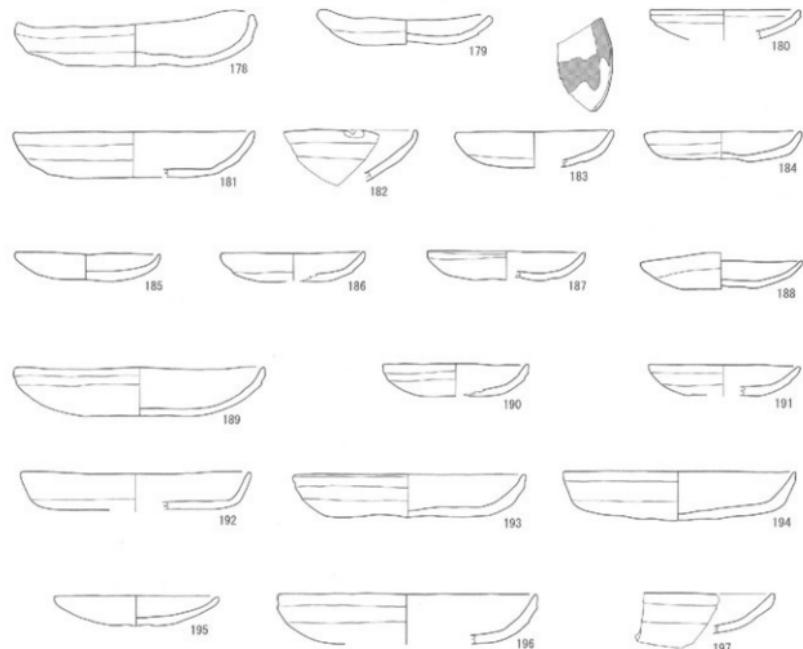


第40図 土器・陶磁器(7)

溝跡 2 (つづき)

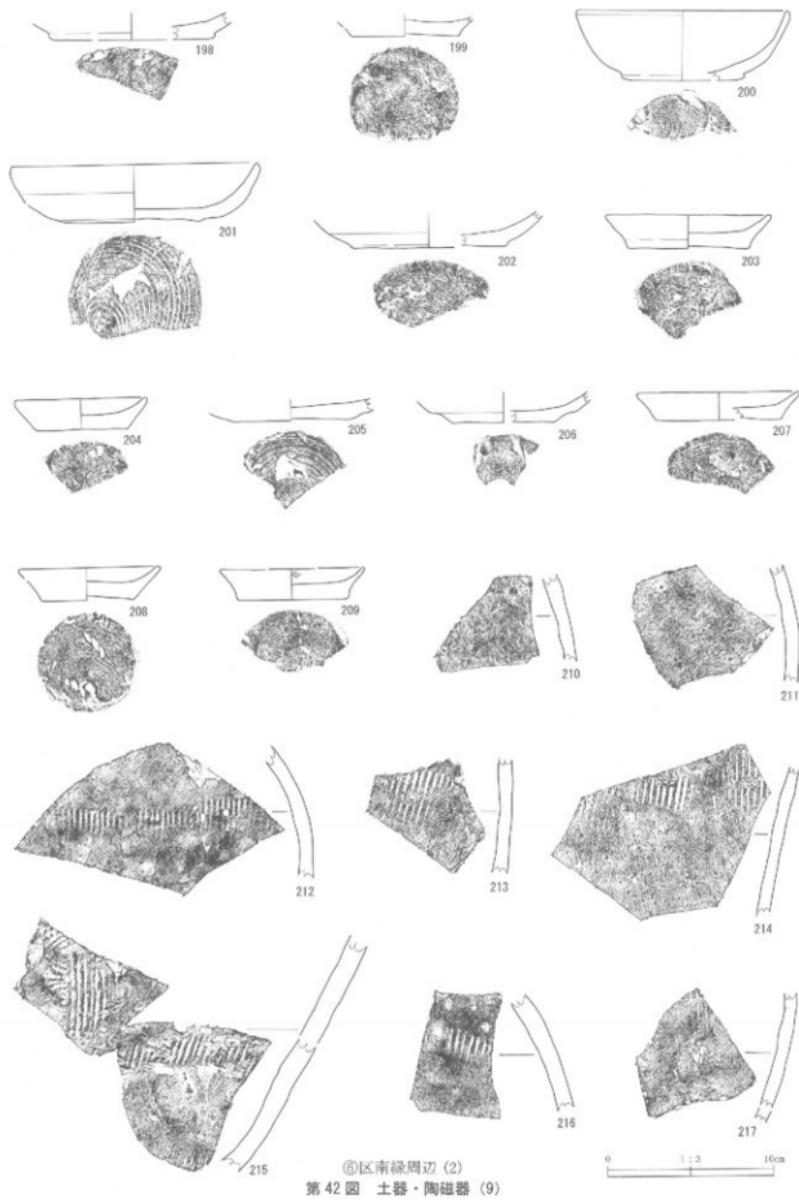


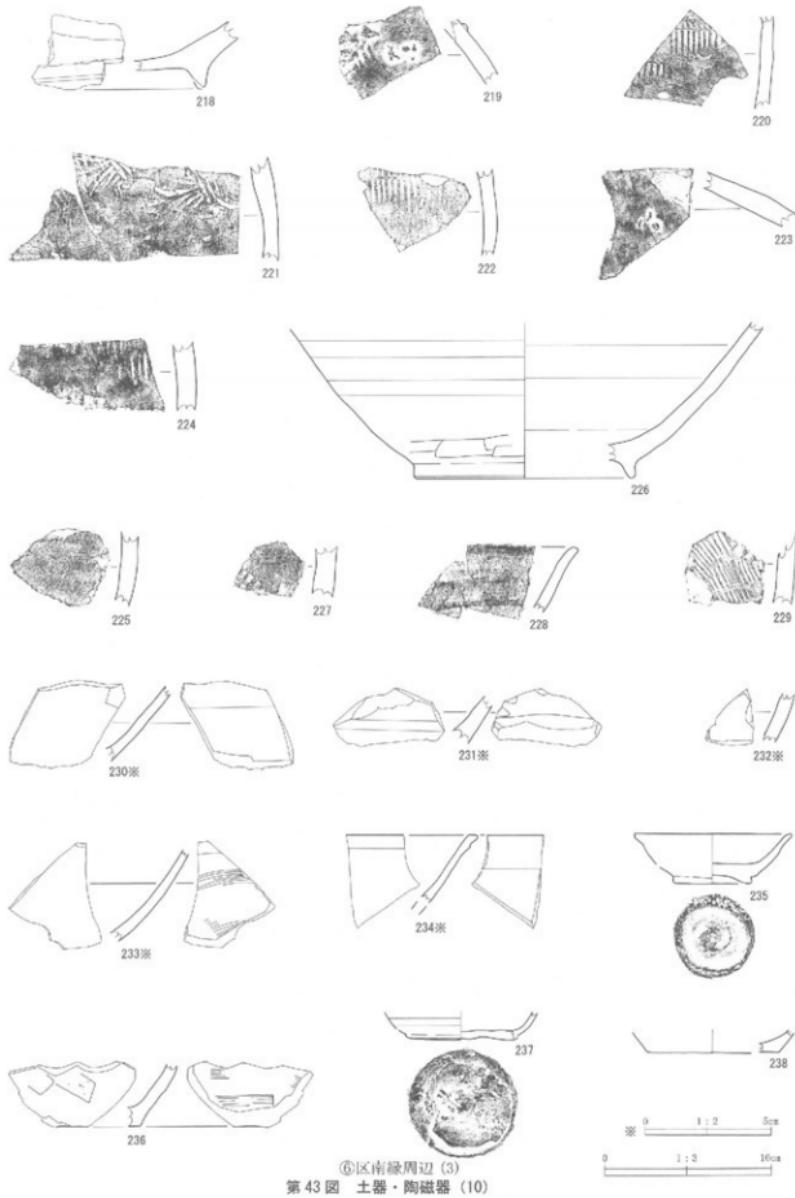
溝跡 (2)



⑥区南縁周辺 (1)
第41図 土器・陶磁器 (8)

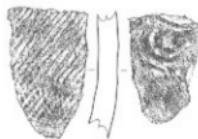
0 1:3 10cm







239



240

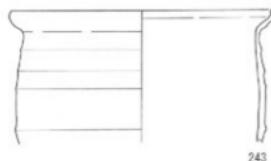
⑥区南縁周辺 (4)



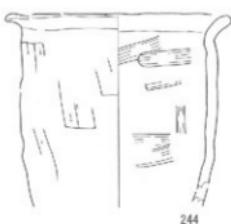
241



242



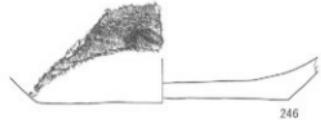
243



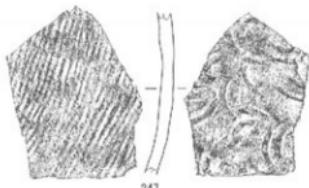
244



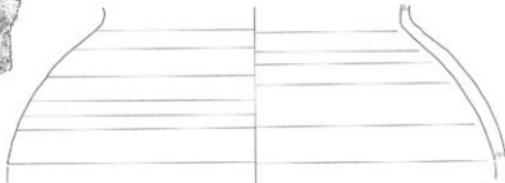
245



246



247



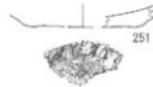
248

堅穴住居跡 1

②区



250



251



252

③区



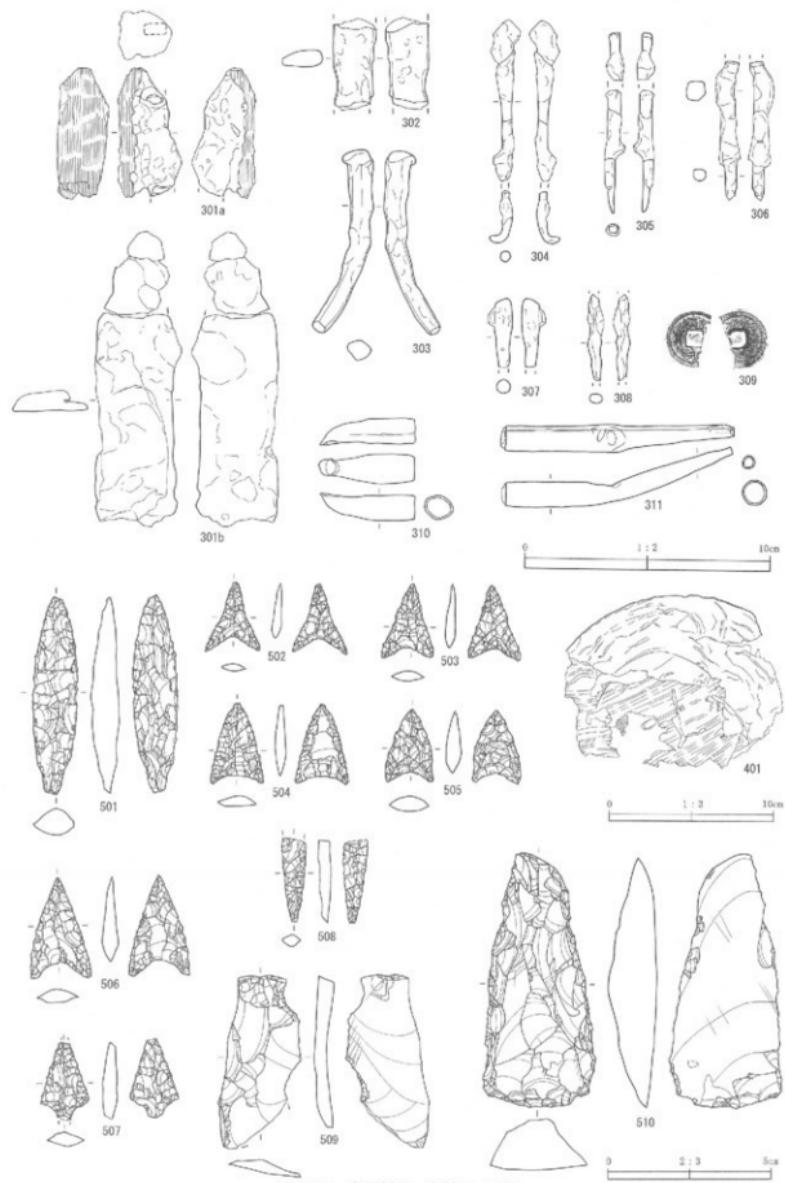
253



254

第 44 図 土器・陶磁器 (11)

0 1 : 3 10cm



第45図 金属製品、木製品、石器

表6 上器・陶磁器類

規範 番号	出土場所	出土品	グリッド	断面・旧地主 No.など	埋 分類	所見・発掘年代	口径	底径	高さ	備考	図 写真
1	128 住物跡3 (p70)		⑤	Ⅲ A 15. V	土	12世紀後半 (2~3回火)					31 28
2	124 住物跡3 (p69)		②	Ⅲ A 15. W	土	12世紀後半					34 28
3	125 住物跡3 (p69)		②	Ⅲ A 15. W	土	12世紀後半 (2~3回火)					34 28
4	123 住物跡1 (p24)		②	Ⅲ A 19. 8	土	12世紀後半					34 28
5	6 住物跡1 (p81)		②	Ⅲ A 20. 1	土	12世紀後半					34 28
6	7 住物跡 (p64)		②	Ⅲ A 21. 1	土	12世紀後半					34 28
7	142 住物跡1・2周辺 (①住物跡) ②			掏出面	瓦	12世紀後半 (2重瓦)					34 28
8	144 住物跡1・2周辺 (①住物跡) ②			検(?)面	瓦	12世紀後半 (2重たたみ式)					34 28
9	227 住物跡3付近 (②住物跡)		②	Ⅲ A 19. x~15. y	掏出面	瓦					34 28
10	143 住物跡1・2周辺 (①住物跡) ②			掏出面	瓦	12世紀後半					34 28
11	253 住物跡1・2周辺 (①住物跡) ②			掏出面	瓦	12世紀後半					34 28
12	254 住物跡1・2周辺 (①住物跡) ②			掏出面	瓦	12世紀後半					34 28
13	43 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 26. k	No. 129			瓦	12世紀後半					34 28
14	44 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 26. l	No. 133			瓦	12世紀後半					34 28
15	46 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 1. k	No. 40			瓦	12世紀後半					34 28
16	45 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 1. k	No. 37			瓦	12世紀後半					34 28
17	48 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 1. l	No. 48			瓦	12世紀後半					34 28
18	47 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 1. l	No. 53			瓦	12世紀後半					34 28
19	50 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 1. m	No. 61			瓦	12世紀後半					34 28
20	53 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 2. k	No. 72			瓦	12世紀後半					34 28
21	52 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 2. k	No. 69			瓦	12世紀後半					34 28
22	56 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 2. k	No. 74			瓦	12世紀後半					34 28
23	58 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 2. k	No. 94			瓦	12世紀後半					34 28
24	61 磁石器・灰吹焼窯跡 (P-036) (④~⑦) H. 2. l	No. 94			瓦	12世紀後半					34 28

25	69	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.2.1	No. 96	てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	34
26	64	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.2.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
21	74	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.3.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
28	75	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.3.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
29	77	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.4.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
30	76	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.4.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
31	79	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.4.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
32	80	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.4.1		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
33	70	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.4.1	No. 101	てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
34	92	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5 ~ 7 k.		てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
35	81	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5	No. 124 + 125 + 123	てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
36	83	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤			てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
37	117	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①			てづくりね	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
38	59	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.2.1		ロクロ	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
39	62	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.2.1		ロクロ	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
40	68	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.2.1		ロクロ	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
41	73	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.3 k.	No. 96	ロクロ	かわらけ	12世紀第3回半	8.6	4.6	1.2	35
42	60	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.2.1	1番	土器			7.1	4.2	1.2	35
43	150	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.4 ~ 7 k		水槽		12世紀第3回半(?)				35
44	158	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5 ~ 7 k		水槽		12世紀第3回半(?)				35
45	159	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5 ~ 7 k		水槽		12世紀第3回半(?)				35
46	205	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5 ~ 7 k		水槽		12世紀第3回半(?)				35
47	206	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5 ~ 7 k		水槽		12世紀第3回半(?)				35
48	205	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤	III-A.5 ~ 7 k		水槽		12世紀第3回半(?)				35
49	153	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤			板石壺上一端		12世紀第3回半(?)				35
50	154	施(?)漆解・油井漆解四切(?)・漆解四切(?)	①・⑤			板石壺		12世紀第3回半(?)				35

			高句	先	12世紀後半（2世紀後半）	
51	162	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.4	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
52	222	柳葉連珠-波狀圓瓣口（⑦区）⑦	II A 2 b	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	35 28
53	222	柳葉連珠-波狀圓瓣口（⑦区）⑦	II A 2 b	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	35 28
54	226	柳葉連珠-波狀圓瓣口（⑦区）⑦	II A 2 i	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	35 28
55	162	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.13	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 28
56	164	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.15	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 28
57	169	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.17	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 28
58	161	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.98	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
59	162	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.137	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
60	163	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.146	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
61	164	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.147	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
62	165	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.53	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
63	167	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.166	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
64	168	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.182	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
65	170	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.22	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
66	171	熊谷連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.24	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
67	176	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.176	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
68	177	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.102	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
69	180	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.121	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
70	181	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.124-125	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
71	186	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.177	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
72	204	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.51-78	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	36 29
73	185	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.16	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	37 29
74	187	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.18	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	37 29
75	177	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.107	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	37 29
76	179	柳葉連珠-波狀圓瓣口（④-⑤区）④-⑤	No.120	高句 先	12世紀後半（2世紀後半）	37 29

129	17	L級0.1	◎	II A 8 w	3w, 3	ロクロ	ロクロ	13.2	8.0	3.0	20	31
130	16	±L級0.1	◎	II A 8 w	3w, 5	ロクロ	ロクロ	13.2	8.0	3.0	20	31
131	19	L級0.1	◎	II A 8 w	3w, 1	ロクロ	ロクロ	13.2	8.0	3.0	20	31
132	11	±L級0.3	◎	II A 17 s + 17 t	3w, 1	ロクロ	ロクロ	14.0	8.0	3.1	20	31
133	12	L級0.3	◎	II A 17 s + 17 t	3w, 2 - 3 - 5	ロクロ	ロクロ	15.0	8.0	2.9	20	31
134	26	±L級0.5	◎	II A 19 w	中央	てづくりね	てづくりね	9.0	3.5	2.3 13.4 + 12.5 + 12.2 漬物ねこ味噌で伏せた枝	20	31
135	26	L級0.5	◎	II A 19 w	中央	ロクロ	ロクロ	8.9	4.2	13.4 + 12.5 + 12.2 漬物ねこ味噌で伏せた枝	20	31
136	21	±L級0.5	◎	II A 19 w	3w, 1	てづくりね	てづくりね	16.0	10.6	2.5 5%で四分之一	20	31
137	24	±L級0.5	◎	II A 19 w	3w, 4	てづくりね	てづくりね	8.4	4.4	1.7 5%で四分之一	20	31
138	21	L級0.5	◎	II A 19 w	3w, 3	ロクロ	ロクロ	8.6	1.3	5%で四分之一	20	31
139	130	±L級0.5	◎	II A 19 w	3w, 1	醤油	醤油	-----	-----	-----	20	31
140	22	±L級0.5	◎	II A 19 w	3w, 2	醤油	醤油	14.0	7.0	1.6 12%味噌3回半	20	31
141	85	±L級0.6	◎	II A 7 l + 7 k	3w, 2	てづくりね	てづくりね	8.4	1.6	-----	20	31
142	89	±L級0.6	◎	II A 7 l + 7 k	3w, 3	てづくりね	てづくりね	8.5	5.5	2.9 12%味噌3回半	20	31
143	99	±L級0.6	◎	II A 7 l + 7 k	3w, 4	てづくりね	てづくりね	8.8	4.0	1.8 12%味噌3回半	20	31
144	91	±L級0.6	◎	II A 7 l + 7 k	博士	てづくりね	てづくりね	13.2	7.0	2.6 12%味噌3回半	20	31
145	105	±L級0.6	◎	II A 12 v	3w, 1	常滑	常滑	-----	-----	-----	20	31
146	12	L級0.7	◎	II A 12 v	3w, 1	てづくりね	てづくりね	-----	-----	-----	20	31
147	14	±L級0.7	◎	II A 12 v	博士	ロクロ	ロクロ	8.0	(1.2)	-----	20	31
148	127	±L級0.7	◎	II A 12 v	1番	常滑	常滑	-----	-----	-----	20	31
149	128	±L級0.7	◎	II A 12 v	1番	常滑	常滑	-----	-----	-----	20	31
150	129	±L級0.7	◎	II A 12 v	博士上位	常滑	常滑	12%味噌3回半 + また12%味噌	-----	-----	20	31
151	29	±L級1.0	◎	II A 17 s + 17 y	博士	てつね	てつね	-----	-----	-----	20	31
152	211	±L級1.1	◎	II A 21 t	博士	常滑	常滑	12%味噌3回半 + 25度	-----	-----	20	31
153	212	±L級1.2	◎	II A 21 t	博士	常滑	常滑	12%味噌3回半 + 25度	-----	-----	20	31
154	27	±L級1	◎	II A 17 s + 17 y	博士	てつね	てつね	12%味噌3回半	2.0	-----	20	31

					第Ⅲ章	第Ⅳ章	第Ⅴ章	第Ⅵ章	第Ⅶ章	第Ⅷ章	第Ⅸ章	第Ⅹ章
155 131 滝等 1	①・② MA1 k.w.k.	土	土	土	12世紀後半(2~3型)水							
156 84 滝等 2	④・⑤ TA25 k.w.k.	土上	土上	土上	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
157 85 滝等 2	④・⑤ TA25 k.w.k.	土上	土上	土上	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
158 178 滝等 2	④・⑤ MA4 i	泥土土	泥土	泥土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
159 186 滝等 2	④・⑤ TA26 k-w-HA1 k	泥土J.	泥土J.	泥土J.	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
160 243 滝等 2	④・⑤ MA6 k.w.k.	泥土I.	泥土I.	泥土I.	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
161 244 滝等 2	④・⑤ MA6 k.w.k.	泥土J.	泥土J.	泥土J.	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
162 226 滝等 2	④・⑤ MA1 j	泥土	泥土	泥土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
163 36 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA24 p	No. 161	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
164 32 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA23 r	No. 169	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
165 33 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA23 r	No. 171	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
166 26 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤	土上	土上	土上	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
167 39 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤	土+泥	土+泥	土+泥	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
168 40 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤	土+泥	土+泥	土+泥	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
169 34 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA4 o	No. 163	土	土	コクロ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
170 37 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤	土	土	土	コクロ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
171 36 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤	土	土	土	コクロ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
172 146 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤ HA22 s	No. 173	土	土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
173 145 滝等 2 (④・⑤(北側))	④・⑤ HA22 s	No. 172	土	土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
174 116 滝等 3-a	④・⑤ MA25 i	No. 1	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
175 100 滝等 3-c	④・⑤ MA1 4	No. 7	土	土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
176 225 滝等 3-e	④・⑤ MA23 i	No. 3	土	土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
177 224 滝等 3-e	④・⑤ MA25 i	No. 2	土	土	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水	泥土	12世紀後半(2~3型)水
178 8 ④・⑤(西側)2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA19 w.k.	地出山	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
179 9 ④・⑤(西側)2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA19 w.k.	斜出山	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水
180 26 ④・⑤(北側)2 (④・⑤(北側))	④・⑤ MA20 w	No. 1	土	土	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水	小矢かけ	12世紀後半(2~3型)水

151	29	「世界地図」(原書直訳)	①	II A 20 x	No.3	「世界地図」(原書直訳)	14.6	7.0	2.8	41	31
182	96	「世界地図」(原書直訳)	③	II A 20x	No.41	「世界地図」(原書直訳)	8.8	4.0	1.7	41	31
183	115	「世界地図」(原書直訳)	⑤	II A 20 x	No.6	「世界地図」(原書直訳)	9.4	2.5	2.2	41	31
184	99	「世界地図」(原書直訳)	⑥	II A 21 u	No.01	「世界地図」(原書直訳)	9.5	6.2	1.9	41	31
185	100	「世界地図」(原書直訳)	⑦	II A 21 u	No.03	「世界地図」(原書直訳)	8.8	4.0	1.7	41	31
186	101	「世界地図」(原書直訳)	⑧	II A 21 u	No.04	「世界地図」(原書直訳)	8.8	4.4	1.8	41	31
187	109	「世界地図」(原書直訳)	⑨	II A 21 v	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	9.8	6.0	1.8	41	31
188	110	「世界地図」(原書直訳)	⑩	II A 21 v	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	9.6	4.7	2.2	41	32
189	107	「世界地図」(原書直訳)	⑪	II A 21 v	No.08	「世界地図」(原書直訳)	15.2	7.4	3.0	41	32
190	104	「世界地図」(原書直訳)	⑫	II A 21 v	No.31	「世界地図」(原書直訳)	8.8	4.4	2.0	41	32
191	105	「世界地図」(原書直訳)	⑬	II A 21 v	No.34	「世界地図」(原書直訳)	9.0	4.2	1.9	41	32
192	106	「世界地図」(原書直訳)	⑭	II A 21 v	No.54	「世界地図」(原書直訳)	14.0	11.2	2.3	41	32
193	108	「世界地図」(原書直訳)	⑮	II A 21 w	No.37	「世界地図」(原書直訳)	14.0	10.2	2.6	41	32
194	111	「世界地図」(原書直訳)	⑯	II A 21 x	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	14.0	11.6	2.0	41	32
195	111	「世界地図」(原書直訳)	⑰	II A 21 x	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	10.0	3.8	1.9	41	32
196	112	「世界地図」(原書直訳)	⑱	II A 22 u ~ 25 u	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	16.8	10.0	3.0	41	32
197	41	「世界地図」(原書直訳)	⑲	II A 22 u ~ 25 u	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	16.8	10.0	3.0	41	32
198	10	「世界地図」(原書直訳)	⑳	II A 22 u ~ 25 u	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	16.8	10.0	3.0	41	32
199	10	「世界地図」(原書直訳)	㉑	II A 21 v	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	9.6	4.6	2.2	42	32
200	30	「世界地図」(原書直訳)	㉒	II A 21 v	No.4	「世界地図」(原書直訳)	6.5	4.2	2.2	42	32
201	97	「世界地図」(原書直訳)	㉓	II A 21 v	No.42	「世界地図」(原書直訳)	15.0	7.4	4.3	42	32
202	98	「世界地図」(原書直訳)	㉔	II A 20 ~ II A 21 x	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	15.0	8.0	3.6	42	32
203	111	「世界地図」(原書直訳)	㉕	II A 21 v	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	9.2	4.2	2.2	42	32
204	105	「世界地図」(原書直訳)	㉖	II A 21 v	No.13	「世界地図」(原書直訳)	16.0	7.4	2.1	42	32
205	106	「世界地図」(原書直訳)	㉗	II A 21 v	No.25	「世界地図」(原書直訳)	8.0	5.6	1.9	42	32
206	116	「世界地図」(原書直訳)	㉘	II A 21 w	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	7.3	4.2	2.2	42	32
207	108	「世界地図」(原書直訳)	㉙	II A 22 ~ 24 u	■■■■■	「世界地図」(原書直訳)	6.2	4.9	2.2	42	32

207	114	◎(北)海綿周辺 (3区)	◎	自管	II A. 19 w 付近	口外	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	9.8	7.6	1.7	—	—	—	—
208	87	◎(北)海綿周辺 (④・⑤・△七ヶ瀬町) ②・③	②	排水渠	海山町	口外	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	8.1	5.6	5.0	—	—	—	—
209	31	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	②	排水渠	海山町	口外	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	8.8	6.8	1.9	—	—	—	—
210	158	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	②	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
211	159	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	②	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
212	140	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	②	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
213	137	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	②	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
214	141	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	②	II A. 20 x	No. 6	常流	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
215	213	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 20 x ~ II A. 21 x 週回	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
216	214	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 20 x ~ II A. 21 x 週回	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
217	218	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 21 w	週回	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
218	215	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 21 w	No. 29	常流	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
219	219	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 21 x	週回	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
220	147	◎(北)海綿周辺 (△一ノ区北側25)	④・⑤	II A. 22 x ~ 23 x 週回	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
221	148	◎(北)海綿周辺 (△一ノ区北側25)	①・②	II A. 22 x ~ 23 x 週回	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
222	149	◎(北)海綿周辺 (△一ノ区北側25)	④・⑤	II A. 23 x	週回	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
223	160	◎(北)海綿周辺 (△一ノ区北側25)	④・⑤	II A. 23 w	週回	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
224	220	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
225	132	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	④・⑤	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
226	190	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	④・⑤	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
227	132	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	④・⑤	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
228	221	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	④・⑤	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
229	135	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	④・⑤	II A. 19 w 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
230	238	◎(北)海綿周辺 (△七ヶ瀬町)	④・⑤	II A. 22 x 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
231	252	◎(北)海綿周辺 (3区)	③	II A. 23 p 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—
232	238	◎(北)海綿周辺 (△一ノ区北側25)	④・⑤	II A. 23 p 付近	海山町	排水渠	かみかげ かみかげ	12.壁面第3割手 12.壁面第3割手	—	—	—	—	—	—	—

223	260	④ 住居跡 2 (S.E.)	⑤	II.A.20.t ~ II.A.21.s Ⅲ层	白面	焼	V面				43	32	
234	351	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑥	II.A.21.w	Ⅲ层	白面	焼	Ⅲ层 12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	9.4	4.6	2.0	43	22
235	112	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑦	II.A.21.x		焼	焼	12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	(3.9)			43	32
236	86	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑧	II.A.21.y		焼	焼	12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	6.6	(1.7)		43	32
237	191	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑨	II.A.19.w/25	④ - ⑤	焼	焼	12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	7.6	(1.4)		43	32
238	136	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑩	II.A.19.w/25	④ - ⑤	焼	焼	12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	(5.4)			43	32
239	217	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑪	II.A.21.w	Ⅲ层	焼	焼	12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	6.4	(3.2)		43	32
240	134	⑤ 住居跡 2 (S.E.)	⑫	II.A.19.w/25	Ⅲ层	焼	焼	12世紀後半中葉 （先端主部に窓開口）	16.2	8.0		44	33
241	2	⑤ 住居跡 1	⑬	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	13.6	(11.8)		44	33
242	3	⑤ 住居跡 1	⑭	II.A.20.t ?	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	(2.5)			44	33
243	3	⑤ 住居跡 1	⑮	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	15.9	(2.0)		44	33
244	4	⑤ 住居跡 1	⑯	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	(0.7)			44	33
245	122	⑤ 住居跡 1	⑰	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	1.7			44	33
246	121	⑤ 住居跡 1	⑱	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	5.8	(1.4)		44	33
247	119	⑤ 住居跡 1	⑲	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	4.4			44	33
248	120	⑤ 住居跡 1	⑳	II.A.20.t	⑯	II.A.20.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	(0.7)			44	33
249	1	⑤ 住居跡 1	㉑	II.A.21.t	⑯	II.A.21.t	⑯	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	9.4			44	33
250	94	③ T	㉒			焼	焼	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	5.8			44	33
251	91	③ T	㉓			焼	焼	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	5.9	(1.1)		44	33
252	210	③ T	㉔	II.A.23.k/12		焼	焼	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	7.2	(1.6)		44	33
253	91	③ T	㉕			焼	焼	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	5.4			44	33
254	209	③ T	㉖			焼	焼	12世紀後半 （先端主部に窓開口）	5.4			44	33

表7 金属製品

番号	出土地點	出土区	グリッド	層位・地上 No.など	堆積分類	断面	所見・特徴年代	長	幅	厚	備考	測定
301 D.4 住居跡 1		②		住居跡, Hn.29 柱場	万子? J.フ	a・b面, 人質穴, a.	(17.0) 2.5	17.0	3.0	0.7		65 34
302 B.10 住居跡周辺(334)		③	II A.31 u					0.6	1.0			65 34
303 灰 7 住居跡 1 (p30)		②		裏 I:	灰		7.6 1.2 1.0					65 31
304 B.6 1.0.1		②		灰土	灰		(8.9) 1.1	1.1	0.4			65 34
305 D.5 +E.1		②		地上	灰		(7.1) 0.9	0.9	0.6			65 34
306 E.11 住居跡 1 (p30)		②		裏 I:	灰		(5.8) 0.9	0.9	0.8			65 31
307 D.8 住居跡 3 (p33)		②		灰土	灰		(2.9) 1.0	1.0	0.6			65 34
308 E.9 住居跡 3 (p32)		②		灰土	灰		(1.1) 0.6	0.6	0.4			65 31
309 E.1 1.0.K		①		桃川面	灰土							65 34
310 D.5.2 2.0.K		②		桃川面	灰土		3.9 1.2	1.0	1.2			65 34
311 D.3 3.0.K		④⑤		桃川面	灰土		9.5 1.2	1.0	1.0			65 34

表8 木製品

番号	出土地點	出土区	グリッド	層位・地上 No.など	堆積分類	断面	所見・特徴年代	口径	底径	高さ	備考	測定
401 水 1 土 1.0		④⑤		生土	灰		(15.6) 8.9 (4.0)	8.9	4.0			65 34

表9 石器

番号	出土地點	出土区	グリッド	層位など	断面	計測値 (cm)	幅	厚さ	備考	測定	
501 S.1 1.0.江戸前		①・②	III A.3 k	V面 T.5	矢頭	6.1 1.4 0.8	6.1	0.8	矢頭, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
502 S.4 1.0.江戸前		④・⑤		V面 T.25	右端	2.2 1.7 0.3	2.2	1.7	右端, 沿合瓦, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
503 S.6 1.0.江戸前		④・⑤		V面 T.35	右端	2.3 1.6 0.2	2.3	1.6	右端, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
504 S.2.2.2		②		桃川面	石頭	2.5 1.6 0.3	2.5	1.6	右端, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
505 S.9.10.住居跡 (1.レンゲ付)		②		V面 T.45	右端	2.2 1.5 0.6	2.2	1.5	右端, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 31
506 S.7 1.0.住居 1		②		裏 I: 通	右端	3.1 1.9 0.5	3.1	1.9	右端, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
507 S.3 1.0.住居		①・②		新石器	右端	2.4 1.5 0.5	2.4	1.5	右端, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
508 S.8 1.0.住居		①・②		新石器	右端	2.6 0.8 0.4	2.6	0.8	右端, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
509 S.9 2.0.K		②		瓦上	瓦上	5.3 2.6 0.5	5.3	2.6	瓦上, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34
510 S.10.3.0.K (トランche-II)		④・⑤		新石器	右端	7.9 3.5 1.5	7.9	3.5	瓦上, 奥羽山脈, 新潟・八代新第三紀		65 34

V まとめ

ここでは、今回の成果の中心となる敷石遺構について調査所見を元に若干の考察を加えたい。まず、敷石遺構に認められる属性や特徴を整理し、以下に列挙する（i～iv）。

- (i) 幅1.5m前後の帶状の平坦面が造成によって設けられ、拳大の跡が敷かれていること。
- (ii) 帯状敷石面の両側縁に、連続または断続する溝跡（側溝）を伴うこと。
- (iii) 敷石面上には廃絶後に転落したと思われる大きめの礫が点在していることから、舗装用の拳大礫に加え、規格の異なる礫を使い分けた構築された構造物であると思われること。
- (iv) 建物等を配置するような主たる空間（高位面）の外縁部を区画し、外部（低位面）との境界を形成していること。

側溝を伴う帶状の平坦面は「道路」としての機能を自ずと想起させる。平泉町内ではすでにいくつかの遺跡で敷石を伴う道路状遺構が確認されており、このうち無量光院第8次発掘調査では、「北土器外側（北側）の犬走り状部分から、縁石に頭大、内部に拳大、その上に細かな目潰し石を敷き詰めた玉石敷き面」（幅1.5m程度）が検出され、「道路跡と推定」されている（平泉町教委 2000）。

無量光院例の形態上の諸属性は、本遺跡例の(i)～(iii)によく類似する。このような「石敷き道」は寺院等に関連して特殊な機能を与えられた道である可能性があるといい（平泉町教育委員会八重樫忠郎氏教示）、関山中尊寺に接する立地の本遺跡例も同様の事例に列せられるかもしれない。

さて、帶状敷石面の側縁に沿う溝を道路側溝と仮定すれば、敷石の残存の有無を問わず、溝跡の走行方向には道路のルートを想定できることになる。まず敷石面東縁に沿う溝跡2は、池状遺構を巻き込むように東へ屈曲し、掘立柱建物等が配された空間（⑥区）の南縁を区画するように走行して、遺跡東方に広がる低位面（北上川方面）へと延びている。一方、敷石面西縁の溝跡3は、概ね南北方向に伸展する敷石範囲の、さらに北へ向かって断続的に直進しており、溝跡2とは明らかに方向を異にしている。従って溝跡から想定されるルートには、敷石遺構の延長線上にあたる南北方向に真っ直ぐ延びるルートと、東方から上ってきて池状遺構付近でこれに合流するルートの二つが想定できるわけだ。しかし残念ながら、二つのルートが接する地点は現代の防火水槽によって大きく破壊を受け、また後世の水田耕作によって敷石面が大きく乱されているため、細部を検討するための十分な材料を得ることはできなかった。道路のルートについては、将来の周辺部の調査に期するところが大きい。

再び無量光院例と本遺跡例の比較に戻ろう。次は無量光院例が境内内部と外界を区画する土壌の外側に沿って設けられている点に注目してみたい。このことは本遺跡例の特徴(iv)と通底する、もう一つの重要な要素であると筆者は考える。当該遺構が単に道路機能にとどまらず、「外郭施設」としての性格をも有する可能性を浮かび上がらせているからだ。本遺跡では、上述の二つの道路ルートが合流する付近においてテラス状の張り出し部が認めら



参考写真1 無量光院跡「石敷き道」(平泉町教委 2004より)

れ、また、周囲の自然傾斜面にも敷石が施されているなど、帶状敷石面（道路面）の周辺が複雑な様相を呈することがわかっている。礫を用いた地表の舗装は道路面に限らず、周辺部を含んだ広い範囲に積極的に行われた可能性があり、立体的・多層的な構造を持っていたことが想像できる。本報告において、道路機能が想定される部分のみを「帶状敷石面」として区別し、これを内包する敷石構造物全体を「敷石遺構」と仮称したのは、道路機能のみに限定した解釈が進むことで全体像がかすんでしまうのを避けたかったためである。道路としての帶状敷石面、外郭施設としての敷石遺構（周辺部含む）、そして外界から区画されるべき主たる空間。これらからなる遺跡の全体像を復元するためには、今次調査区の周辺にも視野を広げて理解を進める必要があろう。この点についても将来情報が蓄積されるにつれ詳細が明らかになると期待したい。

ところで、本遺跡の敷石遺構については検出当初から、当該礫群が隣接の池状遺構に伴う「州浜」であろうとの見解が各方面から寄せられた。平成17年度に発掘調査が実施された「衣川遺跡群」のうち、最も注目を集めた衣の関道遺跡の「州浜状遺構」に類似するためであった。

現時点では衣の関道遺跡の調査は中断され、当該遺構の精査も未了のままとなっている。そのため詳細については正式な報告を待たねばならないのだが、その話題性の高さからか、各種の検討会や書籍において衣の関道遺跡における「圓池」の存在は既成の事実として扱われ、現在では衣川遺跡群の「重要性」を示す有力な証左として一人歩きを始めている。このことから本遺跡の当該遺構の検討にあたっては衣の関道遺跡例を避けては通れない状況となっている。坂下遺跡の池状遺構について筆者は湿地管理の形態であり、いわゆる「圓池」とは異なる実用的な水利用の痕跡と考えている。一方、衣の関道遺跡の池状遺構が「圓池」とみなされる根拠は州浜を伴う点にあり、池状遺構本体からそれを示す根拠は見出されていない。やはり「州浜状遺構」そのものに検討を加える必要がありそうだ。

幸いなことに衣の関道遺跡の調査機関は当埋蔵文化財センターであり、当該遺構の検出状況写真や断面写真、各種の図面等を見ながら、調査時の状況について調査担当者と意見交換する機会を設けることができた。このとき筆者は、州浜とされる帶状の礫群の全景写真と、坂下遺跡の敷石遺構の全景写真が瓜二つであることに気がついた（参考写真2・3）。衣の関道遺跡の礫群は、坂下遺跡における当該遺構の精査途上段階の礫出土状況に酷似していたのだ。坂下遺跡では「池状遺構」に向かって傾斜する黒色土層面から大きめの礫が多く出土し、これらが下位の水平な敷石面本体の廃絶後に高位面から低位面へ向かって転落・流入したものであることがわかっている。衣の関道遺跡で州浜とされた傾斜する礫面はこれに酷似しており、精査途上の擬似的な現象である可能性は残念ながら高いと思わざるを得なかった。州浜に二時期の変遷があるとする見解も、部分的にあらわれた下位の敷石面を古段階に位置づけた結果ではなかろうか。このほかにも、全景写真を見ると帶状に分布する礫群の延長線上に数条の溝跡が平行して延びる様子が認められ（参考写真4、正面奥）、同様に礫群を断ち割った写真や実測図にも礫群側縁に並走する溝跡らしき痕跡が認められることや、現在も湧水がある低湿地に面した高位面の縁辺部境界に位置すること、池の対岸（むしろその存否そのもの）が不明であることなど、坂下遺跡例に類似する点が極めて多いことがわかったのだ。

さてそれでは、衣の関道遺跡例に酷似する坂下遺跡の敷石遺構・池状遺構は、既成事実化した前者にならない、それぞれ「州浜」・「圓池」と呼ばれるべきなのだろうか。いや、それは全く逆であろう。調査未了の衣の関道遺跡例についてこそ、一通り調査が済んだ坂下遺跡例の調査成果を踏まえ、現時点で知りうる事実を元にもう一度冷静に検討・解釈する必要があることは明らかだ。繰り返しになるが、筆者はこの種の遺構を、低位面にあるはずとされる圓池に付属するものと見なすのではなく、むしろ高位面の主体的空間の縁辺部を区画する護岸的な構造物が、一部に道路としての機能を併せ持つ



参考写真2 坂下遺跡「散石遺構」



参考写真3 衣の間道遺跡「州浜状遺構」



参考写真4 衣の関道遺跡「池状遺構」

たものとみるのが妥当と考えている。ここで一旦圓池の存否を再考することが、衣の関道遺跡や衣川遺跡群の重要性そのものを根底から搖るがすとは筆者には思われない。とはいえども、圓池の存在に大きく依拠する解釈にとってみれば、足下の砂が瞬く間に流れ去る一大事ではあろう。

飛躍が過ぎては同じ轍を踏みかねないが、衣の関道遺跡例については、調査未了であることを十分に念頭において取り扱う必要があることを重ねて強調しておきたい。もし精査未了の遺構が不完全なまま持ち出され、考古学的所見とは無縁なところで都合の良い結論を与えられることなどがあるとしたら、一介の調査者としても強い憂慮を禁じ得ないのだ。衣の関道遺跡例を「圓池」と断じ、その後に重要居館の存在までを強弁する論が連なった編書の結尾で、入間田氏は「調査未了につき詳細不明」とする調査担当者の態度に配慮するよう繰り返し注意を促している（入間田編 2007）。この信頼に応えるためにも、我々調査者は遺跡に対して真摯に向き合い、ありのままの事実を淡々と発信する態度を堅持することが何より肝要だ。世界遺産登録を切望する熱波に四方を取り囲まれた今こそ、静かに意を新たにしたい。

参考・引用文献

- 平泉町教育委員会 2000 『平泉遺跡群発掘調査略報』 岩手県平泉町文化財調査報告書第75集
平泉町教育委員会 2004 『特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅰ』 岩手県平泉町文化財調査報告書第87集
及川真紀・福島正和 2006 「衣川遺跡群とは何か」『歴史評論』No.678 校倉書房
入間田宣夫 編 2007 『平泉・衣川と京・福原』 高志書院

附 編

附編 1 放射性炭素年代測定

坂下遺跡放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

坂下遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字坂下 43-5 (北緯 38° 59' 59"、東経 141° 6' 31") に所在する。衣川と北上川の合流点付近に形成された氾濫原上に位置する。

(2) 測定の意義

堆積層の形成年代を推定する。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、坂下遺跡第 10 次調査で出土した炭化物 4 点である。試料 No.1 (IAAA-61638) が池状遺構 D-D' ベルト 2a 層下面、No.2 (IAAA-61639) が同遺構 D-D' ベルト 2b 層中位、No.3 (IAAA-61640) が同遺構 E-E' ベルト 4b 層下面、No.5 (IAAA-61642) が敷石遺構 D-D' 断面 2 層下部 (西側溝埋土) から出土した。試料は採取後、アルミホイルで包み、チャック付きビニール袋に入れて保管した。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001 ~ 1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°C で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°C で 30 分、850°C で 2 時間加熱する。
- 4) 液体室素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により ¹³C/¹²C の測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- 2) BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950

年を基準年として選る放射性炭素年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が 1 つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{AS} - {}^{14}\text{AR}) / {}^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{AS} - {}^{13}\text{APDB}) / {}^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{AS}$: 試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度 : $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_s$ または $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_R$

${}^{14}\text{AR}$: 標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度 : $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_s$ または $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{AS} = {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 (${}^{14}\text{A}_q$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$\Delta^{14}\text{A}_q = {}^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_s \text{ として } {}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_s \text{ として } {}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_q - {}^{14}\text{A}_p) / {}^{14}\text{A}_p] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベースを用い、OxCalv3.10 較正プログラムを使用した。

(7) 測定結果

池状遺構 D-D' ベルト 2a 層下面から出土した試料 No.1 (IAAA-61638) が 910 ± 30 yrBP、D-D' ベルト 2b 層中位から出土した No.2 (IAAA-61639) が 1220 ± 30 yrBP、E-E' ベルト 4b 層下面から出土した No.3 (IAAA-61640) が 1590 ± 30 yrBP、敷石遺構 D-D' 断面 2 層下部 (西側側溝埋土) から出土した No.5 (IAAA-61642) が 910 ± 30 yrBP の ^{14}C 年代である。池状遺構の堆積土中から出土した炭化物の年代は、No.1 が暦年較正年代 ($\Delta\sigma$) で $1040\text{AD} \sim 1170\text{AD}$ 、No.2 が $700\text{AD} \sim 870\text{AD}$ 、No.3 が $420\text{AD} \sim 540\text{AD}$ に相当する。下層ほど古い値であるが、人為的に構築された遺構埋土の年代としては時間幅が広い。池状遺構 2a 層下面と敷石遺構 2 層下部から出土した炭化物は共に平安時代後期後半に相当する暦年較正年代であり、同一時期の堆積物と考えられる。

参考文献

Stuiver, M. and Polash, H. A. (1977) Discussion : Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon*, 19 : 355-363

IAAA

IAAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-61638	試料採取場所 : 岩手県西磐井郡平泉町 平泉字坂下 43-5	Libby Age (yrBP) : 910 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -23.55 ± 0.65
	試料形態 : 木炭	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -107.5 ± 3.2
	試料名(番号) : No.1	pMC (%) = 89.25 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -104.8 ± 3.0
		pMC (%) = 89.52 ± 0.30
		Age (yrBP) : 890 ± 30
#1450-1	試料採取場所 : 岩手県西磐井郡平泉町 平泉字坂下 43-5	Libby Age (yrBP) : $1,220 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -23.77 ± 0.68
	試料形態 : 木炭	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -141.2 ± 3.2
	試料名(番号) : No. 2	pMC (%) = 85.88 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -139.1 ± 3.0
		pMC (%) = 86.09 ± 0.30
		Age (yrBP) : $1,200 \pm 30$
IAAA-61639	試料採取場所 : 岩手県西磐井郡平泉町 平泉字坂下 43-5	Libby Age (yrBP) : $1,590 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -26.66 ± 0.69
	試料形態 : 木炭	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -179.5 ± 3.1
	試料名(番号) : No. 3	pMC (%) = 82.05 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -182.3 ± 2.9
		pMC (%) = 81.77 ± 0.29
		Age (yrBP) : $1,620 \pm 30$
#1450-2	試料採取場所 : 岩手県西磐井郡平泉町 平泉字坂下 43-5	Libby Age (yrBP) : $1,040 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -23.55 ± 0.65
	試料形態 : 木炭	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -107.5 ± 3.2
	試料名(番号) : No. 4	pMC (%) = 89.25 ± 0.32
#1450-3	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -104.8 ± 3.0
		pMC (%) = 89.52 ± 0.30
		Age (yrBP) : 890 ± 30

1 放射性炭素年代測定

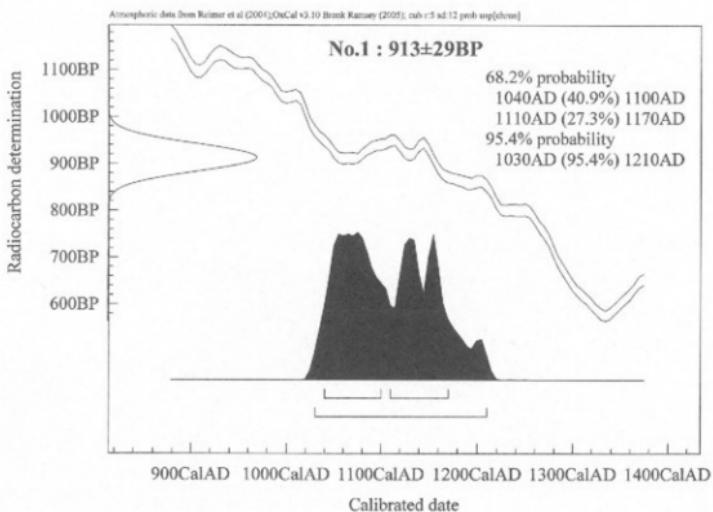
IAAA-61642 #1450-5	試料採取場所 : 岩手県西磐井郡平泉町 平泉字坂下 43-5	Libby Age (yrBP) : 910 ± 30
	試料形態 : 木炭	$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -29.24 ± 0.56
	試料名(番号) : No. 5	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -107.3 ± 3.2
		pMC (%) = 89.27 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -115.1 ± 3.0
		pMC (%) = 88.49 ± 0.30
		Age (yrBP) : 980 ± 30

7AA

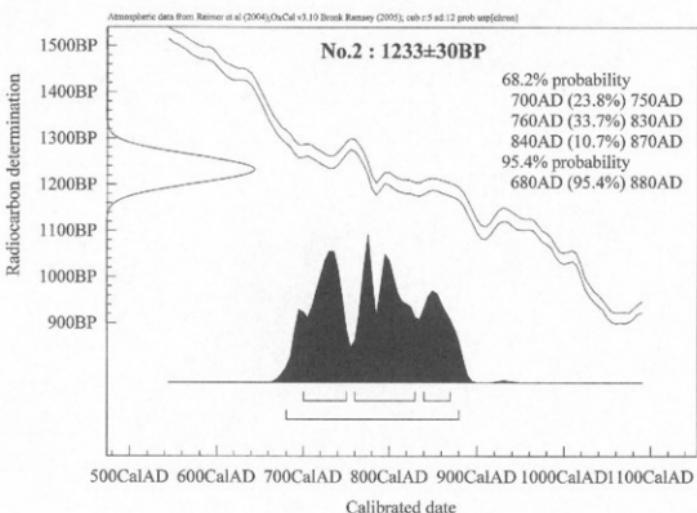
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-61638	No. 1	913 ± 29
IAAA-61639	No. 2	1233 ± 30
IAAA-61640	No. 3	1590 ± 30
IAAA-61642	No. 5	912 ± 29

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下 1 桁を丸めない値です。

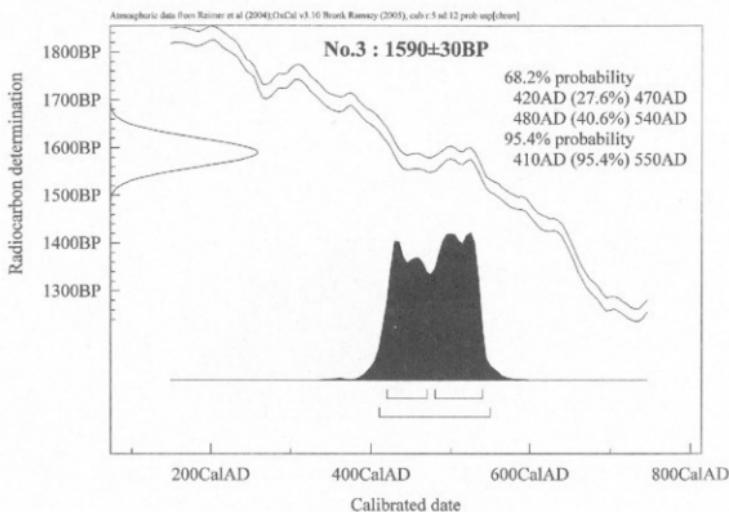
【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



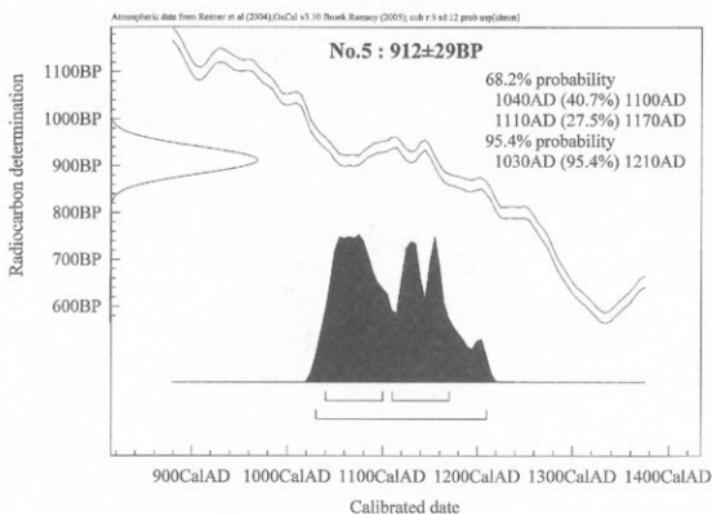
【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：曆年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：曆年補正 Radiocarbon determination】



附録2 火山灰同定・微化石分析

坂下遺跡(第10次調査)の自然科学分析調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県平泉町に所在する坂下遺跡は、北上川中流域の右岸、支流の衣川が合流する付近の沖積低地に位置する。発掘調査所見によれば、今回の発掘調査区の位置は、中尊寺のある丘陵である関山の東側斜面直下に位置し、関山から流れ下る小規模な沢筋に挟まれた微高地帯にあるとされている。今回行われた第10次調査では、掘立柱建物跡や敷石上遺構、池状遺構などの遺構が検出され、12世紀のものを中心とするかわらけ、陶磁器片などが出土している。

今回の分析調査では、調査区内で検出された沢筋の堆積物中に認められた火山灰(テフラ)とされる堆積物について、その碎屑物の性状を明らかにすることにより、テフラであることの確認と、テフラである場合には既知のテフラとの対比を行う。また、池状遺構の堆積物を対象として、珪藻、花粉、植物珪酸体の各微化石分析を行う。この結果から、池状遺構内の堆積環境や周辺の古植生等について検討を行う。

1 火山灰の同定

1 試 料

試料は、沢筋の断面が作成された④・⑤区中央トレンチの1層より採取された、火山灰とみられる堆積物1点である。試料の外見は、にぶい黄橙色を呈する砂質シルトである。

2 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。さらに火山ガラスが検出された場合には、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3 結 果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスと多量の軽石から構成される。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の纖維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型も認められる。軽石は、最大径約0.8mmで粒径の淘汰は良好、白色を呈し、発泡はやや良好～やや不良である。火山ガラスと軽石の他には、少量の斜長石などの遊離結晶が認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図1に示す。 $n1.497 \sim 1.508$ のレンジに入り、 $n1.505 \sim 1.506$ にモードがある。

4 考 察

試料は、細粒の軽石および火山ガラスからなるテフラである。上述した碎屑物の特徴および坂下遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか(1981; 1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など）との比較から、試料は、十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか, 1981）。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町田ほか(1981)は、To-aのn1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は南方へ広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとしている。しかし、今回の屈折率測定結果は、低屈折率の火山ガラスも微量ながら、岩手県南部まで及んでいることを示唆するものといえよう。

今回の試料は、テフラの本質物以外の碎屑物が極めて少ないとから、To-a噴出時に沢内に降下堆積したものである可能性が高い。その場合、テフラ層より下位の沢内堆積物は、10世紀以前の堆積層、テフラ層より上位の堆積物は10世紀以後の堆積層となる。今回のTo-aの産状は、調査区内の沢跡を中心とした堆積層の時期を推定する上で、重要な手がかりになると考えられる。

II 池状遺構堆積物における微化石分析

1 試 料

試料は、④⑤区で検出された池状遺構に十字形に作成されたベルトのうち、西側のベルトの中程より、発掘調査者側により採取された。試料は、幅・奥行きともに約20cm、高さ約30cmの柱状ブロックとして採取されている。柱状ブロックの基底には、径7cmほどの角礫が数個含まれており、池の基底に相当すると考えられる。ブロックの基底直上には、厚さ約5cmの黄褐色シルト質粘土層が認められ、その上位に厚さ約25cmの暗灰褐色を呈する粘土質シルト層が認められた。また、この暗灰褐色粘土質シルト層の中程は、やや色調の暗い層位が認められた。分析試料は、暗灰褐色粘土質シルト層の上部、中部、下部およびその下位の黄褐色シルト質粘土層の各層位から1点ずつ採取し、上位より試料番号1～4とした（図2）。分析には、これらのうち、試料番号1と3の2点を選択した。

2 分 析 方 法

(1) 珊 蘆 分 析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、1プレパラートあたり50個体以上の試料については2枚検鏡する）。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺(2005)、Witkowski et al.(2000)などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann(1990)に従った。

同定結果は、中心類(Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae)と羽状類

(Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 広義のタサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分けた。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に分け、貧塩性種については、はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、真塩性種～中塩性種については小杉 (1988)、貧塩性種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については、Asai & Watanabe (1995)、渡辺 (2005) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) や葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤 (2004) の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基底とする百分率で求めた。

3 結 果

(1) 硅藻分析

結果を表 1、図 3 に示す。いずれの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、約 50% と化石の保存状態は良好とは言えない。産出分類群数は、合計で 35 属 96 分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

試料番号 1、3 ともに淡水域に生育する水生珪藻 (以下、水生珪藻と言う) が全体の約 70-80% を占

め優占する。これに付随して、陸上のコケや土壤表面など多少の温り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻も約 20% 前後産出する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は近似しており、貧塩不定性種、pH 不定性種と真十好アルカリ性種、流水不定性種が優占あるいは多産する。2 試料とともに同様な種が産出するが、産出割合に違いが見られる。

試料番号 3 は、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が約 10% と比較的多く出現し、流水不定性の *Gomphonema angustatum*、*Caloneis silicula*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Cymbopleura naviculiformis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*、*Eunotia minor*、止水性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia acrosphaeria*、*Pinnularia nodosa* 等を伴う。また、陸生珪藻としては、耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys* 等を伴う。

試料番号 1 は、好流水性の *Placoneis elginensis* var. *neglecta* が約 10% と比較的多かった他は、流水性で中～下流性河川指標種群の *Planothidium lanceolatum*、流水不定性の *Gomphonema angustatum*、*Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia gibba* var. *linearis*、止水性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia nodosa* 等を伴う。また、陸生珪藻としては、陸生珪藻 A 群の *Luticula mutica*、*Hantzschia amphioxys* 等を伴う。

なお、今回調査対象とした試料の中には、*Actinocyclus ingens* 等の第三紀絶滅種を含む海水生種の *Paralia sulcata*、*Coscinodiscus* spp. 等も少量ながら産出した。

(2) 花粉分析

結果を表 2、図 4 に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料においても花粉化石の産出状況が良好であり、保存状態も良い。

試料番号 3,1 のいずれも、花粉群集組成は類似しており、木本花粉ではマツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ属、ニレ属一ケヤキ属が多く産出する。その他ではサワグルミ属、クマシデ属一アサダ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属などを伴う。

草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、ナデシコ科などを伴う。また、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出され、栽培種であるソバ属も認められる。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表 3、図 5 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

試料番号 1 と 3 では、同様な植物珪酸体の産状が見られる。すなわち、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属の産出が目立ち、栽培植物のイネ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。なお、試料番号 1 ではイネ属の出現率が試料番号 3 よりも高くなる。

4 考察

(1) 池内の堆積環境について

試料番号 1、3 ともに同じ様な種類が産出したが、主要種の産出割合が異なっていた。下位の試料番号 3 は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種によって特徴付けられ、水深のある湖沼等に生育する浮遊性種は全く産出しなかった。よって、本試料が堆積する頃は、水深の浅い池沼あるいは沼沢地のような水域であったと考えられる。試料番号 1 になると、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が増加したことから、造構内に流水の流れ込みがあったと考えられる。また、陸生珪藻も増加したことから周囲の乾いた場所から陸生珪藻を含む土壤が流水と共に流れ込んだと考えられる。

すなわち、水深の浅い池が、周辺からの土砂の流れ込みにより堆積していった過程が、珪藻化石の産状から確認されたといえる。

なお、今回の珪藻分析では、第三紀絶滅種を含む海水生種が産出したが、その給源としては衣川以南に分布する磐井丘陵を構成する海成の中・後期中新統（小野寺, 1957）があげられる。このことも、池を埋積した土砂が、周辺の堆積物に由来することを示唆している。

(2) 植生について

花粉化石の産状から、比較的広域の植生を反映する木本類についてみると、マツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属、コナラ亜属、ニレ属、カエデ属などが多く認められ、サワグルミ属、クマシデ属、アサダ属、ハンノキ属、トチノキ属などを伴う。このうち、ニレ属、カエデ属は、河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種を含む分類群であり、サワグルミ属、クマシデ属、アサダ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属なども、同様の生育環境を示す。また、ブナ属、コナラ亜属などは、冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素である。

本地域の潜在自然植生（人間の影響を一切停止したときに、現在の気候、地形、土壤条件下で成立すると考えられる自然植生）をみると、河川沿いなどにはハンノキ、ヤチダモ群集、シロヤナギ群集、周辺丘陵部はモミーイヌブナ群集、アブラツツジーイヌブナ群集、クリーコナラ群集、山地部ではチシマザサーブナ群集とされている（宮脇編著, 1987）。これらのことから、堆積当時の本遺跡周辺では、後背の丘陵・山地部にはブナ属を主体とする落葉広葉樹林が成立しており、丘陵縁辺部や低地部などには部分的にスギ属などの林分も認められたと思われる。また、衣川、北上川沿いなどの河畔や低湿地には、ハンノキ属を主体とした湿地林が分布していたと推測される。

一方、本遺跡内及びその周辺を反映する草本類の花粉化石についてみると、イネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、アザゼ科、ナデシコ科などを伴う。これらはいずれも、開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、本遺構周辺の開けた草地に、これらの草本類が生育していたと思われる。また、わずかであるが、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属などの、水湿地生植物に由来する花粉が検出されることから、これらが遺構内及びその周囲の湿地部に生育していた可能性がある。

植物珪酸体の産状からは、池状遺構の内部や周辺の湿润な場所にはヨシ属など、周辺の乾いた場所にはネザサ節などが生育していたことが推定される。

なお、いざれの標準からも栽培種であるソバ属の花粉化石が検出されることから、当時周辺域ではソバ栽培が行われていた可能性がある。さらに、遺構の下部試料からは、栽培植物のイネ属もわずかに検出された。周辺から土壤が流入していたと考えられることから、検出されたイネ属は周囲の稻作地から流入したものと思われる。また、上部の試料からもイネ属が検出され、下部よりも出現率が高かった。しかし、現状での土地利用は稻作地であり、埋積物の直上で稻作が行われていた可能性があるため、上部の試料から検出されたイネ属は上位の耕作土からの落込みの可能性もある。池状遺構に水域があった当時の本遺跡周辺における稻作については、今後さらに周辺に分布する同時期の堆積物を対象としてイネ属の層位的な消長や分布域を確認した上で検討することが望まれる。

引用文献

- 安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による農業指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
 Arai, F. & Machida, H., Okunura, K., Miyazuchi, T., Soda, T., Yamagata, K., 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephra occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.
 Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic

- Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35–47.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123–133.
- 原山 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の珪藻 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527–600.
- 早川由紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで 10 世紀に相次いで起きた二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—. 火山, 43, 403–407.
- Hustedt, F., 1937–1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomaceen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. *Archiv für Hydrobiologie, Supplement*, 15:131–177, 15:187–295, 15:393–506, 15:638–790, 16:1–155, 16:274–394.
- 伊藤 良永・畠内 誠示, 1991, 遺生珪藻の現在に於ける分布と古環境復元への応用. 硅藻学会誌, 6, 23–45.
- 近藤 錢三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ベドロジト, 48, 46–64.
- 小杉 正人, 1988, 建造の環境指標群群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1–20.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. *BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26*. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1996, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaccace. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band 2 / 2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariacace, Eumotiaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band 2 / 3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. I., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In *Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/ 4-74-005*. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 町田 淳・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 淳・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562–569.
- 町田 淳・新井房夫・杉原重丈・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—. 渡辺直樹(編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎, 865–928.
- 宮脇 啓(編著), 1987, 日本植生誌. 東北・平文堂, 605p.
- 小野寺信吾, 1957, 岩手県一関市で発見された *Desmostylus* と、その産地附近の地質. 地質学雑誌, 63, 238–253.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, *The diatoms. Biology & morphology of the genera*. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 渡辺 仁治, 2005, 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指標 DAipo, pH 耐性. 内田老舗圖, 666p.
- Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D., 2000, *Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I*. A. R. G. Gantner Verlag K. G., 881p.

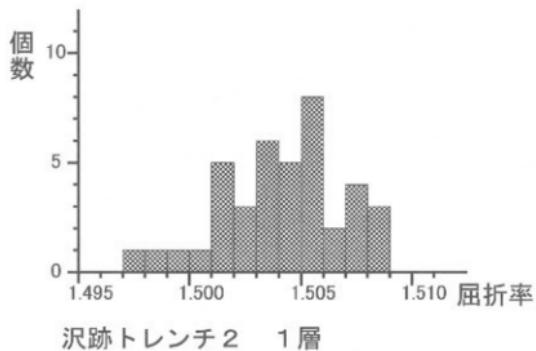


図1. 火山ガラスの屈折率測定結果

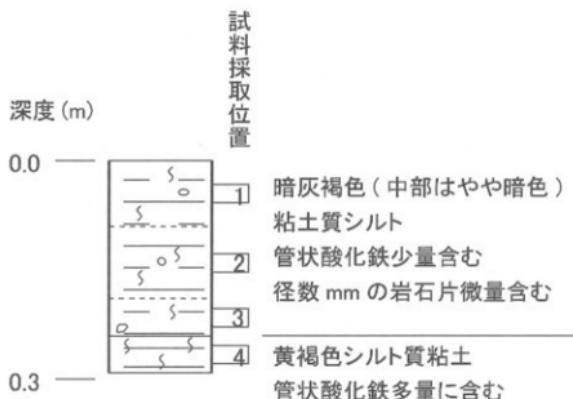


図2. ④⑤区池状遺構堆積物の柱状図

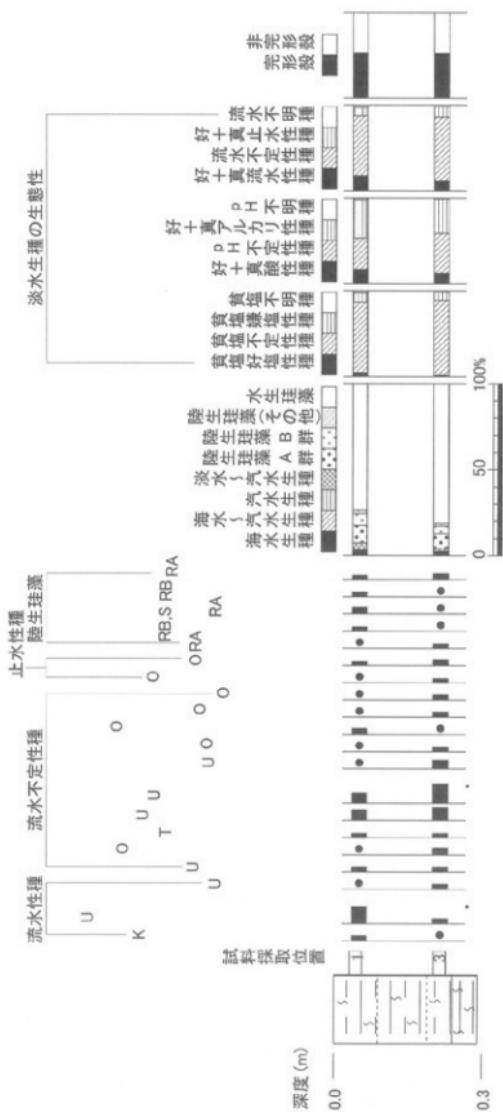


図3.④⑤区池状遺構植物における主要珪藻灰石群集の層位分布
 海水-汽水-淡水生産出率、各種産出率、完形殻産出率は全体基數、淡水生種の生態性の比率は
 淡水生種の合計を基數として百分率で算出した。
 いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。

环境指標

K: 中～下流河川指標種 O: 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
 S: 好汚染性種 U: 広域適応性種 T: 好溝水性種(Asai and Watanabe, 1995)
 R: 隆山珪藻(RAA群) BBB群: 未区分、伊藤・堀内, 1991

表1. 珠藻分析結果(1)

種類	生態性			環境指標種	4-5区底状遺構堆積物		
	場分	pH	海水		1	3	
Centrio Diatoms(中心型硅藻類)							
Coscinodiscus spp.	Euh				3	2	
Actinocyclus ingens Rattray	Euh			B	1	1	
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh				1	1	
Thalassiosira antiqua (Grun.)Cleve	Euh				1	-	
Arapia Pennate Diatoms(無錫溝羽狀珪藻類)							
Fragilaria capucina var. permixta (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-i ²	ind		-	3	
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	K.T	-	1	
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	K.T	1	-	
Syndra ulna (Nitzsch.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	-	1	
Thalassiosira nittezziana (Grun.)Grunow	Euh			A.B	1	-	
Monoraphia Pennate Diatoms(單葉溝羽狀珪藻類)							
Karayevia clevei (Grun.)Round & Kubitnyarova	Ogh-ind	al-i ²	ind	T	1	2	
Planothidium lanceolatum (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	K.T	6	3	
Birash Diatoms(双錫溝羽狀珪藻類)							
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	6	6	
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	R.A.U	4	5	
Gymnella tumida (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-i ²	ind	T	1	-	
Gymnopleura naviculiformis (Auerswalds)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O.U	3	8	
Encyonema caespitosum Kuetzing	Ogh-ind	al-i ²	ind	T	-	1	
Encyonema mesianum (Holmky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	
Encyonema silesiacum (Bleisch.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	5	5	
Placoneis elginiensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-i ²	ind	O.U	2	1	
Placoneis elginiensis var. neglecta (Krasske)H.Kobayashi	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	U	20	6	
Gomphonema heteromimeta Mayama & Kawashima	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	U	-	1	
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	-	1	
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	12	15	
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-i ²	ind	U	1	-	
Gomphonema angustatum var. undulata (Greg.)Grunow	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	1	-	
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-i ²	I-ph	O.U	-	2	
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	12	23	
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayashi	Ogh-ind	al-i ²	I-ph	T	-	3	
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	unk	1	1	
Diploneis ovalis (Hiltz.)Cleve	Ogh-ind	al-i ²	ind	T	1	2	
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	ind	ind	ind	3	3	
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-i ²	ind	U	2	1	
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	-	1	
Navicula viridula (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	K.U	1	1	
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	unk	1	1	
Gyrosigma procerum Hustedt	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	2	-	
Gyrosigma scalpoides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	U	2	-	
Gratulia cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-i ²	ind	S	1	1	
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-i ²	I-ph	U	-	3	
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	4	
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	R.I	-	1	
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	2	2	
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	nd	ind	RB	2	1	
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	I-ph	O.U	2	-	
Stauroneis phoenicenteron fo. hattori Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	2	-	
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind	ind	1	-	
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	U	-	1	
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-i ²	ind	U	-	2	
Diadesmis confervacea Kuetzing	Ogh-ind	al-i ²	ind	RB,S	5	1	
Diadesmis contenta (Grunow Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-i ²	ind	R.A.T	-	1	
Diadesmis contenta var. biceps (Amott ex Grunow)Hamilton	Ogh-ind	al-i ²	ind	R.A.T	1	-	
Luticola goeppertiae (Bleisch.)D.G.Mann	Ogh-hil	al-i ²	ind	S	1	-	
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-i ²	ind	R.A.S	8	3	
Neidium productum (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	nd	ind	ind	1	1	
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-i ²	r-ph	U	2	2	
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	I-ph	RB	1	1	
Caloneis limosa (Kuetz.)R.M.Patrick	Ogh-ind	al-i ²	I-bi	ind	1	-	
Caloneis minute (Grunow)Ohtsuka et Fujita	Ogh-ind	al-i ²	ind	ind	1	1	
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-i ²	ind	ind	4	10	
Pinnularia acrospheraea W.Smith	Ogh-ind	al-i ²	I-ph	O	4	5	
Pinnularia acuminata W.Smith	Ogh-ind	al-i ²	I-ph	O	1	1	
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	-	
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1	

表1. 地質分析結果(2)

<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith	Ogh-hob	ac-il	r-ph	-	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O.U.	2
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustadt	Ogh-hob	ac-il	ind		5
<i>Pinnularia graciloides</i> Hustadt	Ogh-ind	ac-il	ind		7
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	r-ph	-	1
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	r-ph		1
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	r-ph	O	5
<i>Pinnularia obscura</i> Kresske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	sc-il	ind		1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	4
<i>Pinnularia streptopharia</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	r-ph	-	2
<i>Pinnularia subangulata</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RBS	5
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustadt	Ogh-hob	ac-il	r-ph		4
<i>Pinnularia ueno</i> Skvortzow	Ogh-hob	sc-il	r-ph		1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O.U.	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		6
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	3
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1
管狀藻類					-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	5
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Sm.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		7
<i>Nitzschia fonticola</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	Grunow	1
<i>Nitzschia parvuloides</i> Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind		-
<i>Nitzschia tubicola</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
<i>Tryblionella plana</i> (W.Sm.) Peletan	Ogh-ind	al-il	ind	S	1
<i>Tryblionella victoriae</i> Grunow	Meh			-	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2
真管狀藻類	Ogh-Meh	el-il	ind	U	2
<i>Suriella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	ai-il	r-bi	U	1
<i>Suriella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	sl-il	r-ph	U	2
短壁管類					6
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O.T	1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	6
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	r-ph	RB,O.T.	1
海水生種					-
海水～汽水生種					7
汽水生種					4
淡水～汽水生種					0
淡水生種					0
淡水生種					1
淡水生種					8
硅藻化石總數					3
					190
					197
					205
					205

凡例

HR: 塩分濃度に対する適応性	pH、水素イオン濃度に対する適応性	O.R.: 流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	i-bi : 真止水性種
Meh : 汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	i-ph : 好止水性種
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種	ind : pH 不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-hob : 貧塩缺塩性種	unk : pH 不明種	unk : 流水不明種
Ogh-unk : 貧塩不明種		

環境指標種群

- A:外洋指標種 B:内湾指標種(小杉, 1988)
 K:中～下流性河川指標種 U:沼澤湿地付着生種(安藤, 1990)
 S:好汚濁性種 U:広域適応性種 T:好清水性種(以上はArai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・脳内, 1991)



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

表2. 花粉分析結果

種類	試料番号	泡状遺構堆積物	
		1	3
木本花粉			
モミ属	1	2	
ツガ属	-	1	
トウヒ属	-	5	
マツ属複管束東ア属	12	8	
マツ属(不明)	31	23	
スギ属	63	31	
イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科	-	1	
ヤナギ属	1	-	
ケワグルミ属	3	12	
クルミ属	1	2	
クマシテ属--アサダ属	9	12	
カバノキ属	3	6	
ハンノキ属	11	8	
ブナ属	27	23	
コナラ属コナラ属	20	26	
コナラ属アカガシ属	2	3	
クリ属	1	1	
ニレ属一ケヤキ属	19	25	
コクサギ属	-	1	
ウルシ属	-	2	
カエデ属	3	10	
トネノキ属	1	7	
ブドウ属	1	1	
ウコギ科	-	2	
ミズキ属	-	1	
トネリコ属	-	1	
クサギ属	-	1	
草本花粉			
サジョモダカ属	-	1	
イネ科	163	87	
カヤツリグサ科	9	17	
ミズアオイ属	-	1	
ユリ科	-	1	
クワ科	9	8	
イブキトラノオ節	2	1	
サナエタデ節一ウナギツカミ節	12	14	
タデ属	1	-	
ソバ属	1	1	
アザ科	27	16	
ナデシコ科	16	6	
カラマツソウ属	-	1	
キンポウゲ科	6	2	
アブラナ科	2	-	
マメ科	-	1	
ツリフネソウ属	-	2	
セリ科	1	1	
ネナシカズラ属	1	-	
オオバコ属	1	1	
ヨモギ属	153	78	
オナモミ属	3	6	
キク属	3	1	
タンボボ属	-	4	
不明花粉	20	15	
シダ類胞子			
シダ類胞子	197	175	
合計			
木本花粉	209	215	
草本花粉	410	250	
不明花粉	20	15	
シダ類胞子	197	175	
総計(不明を除く)	816	640	

表3. 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	泡状遺構堆積物	
		1	3
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属		8	1
タケ亜科ネザサ節		27	31
タケ亜科		17	28
ヨシ属		42	49
ウシクサ族スキ属		2	8
イチゴツナギ亜科		-	3
不明キビ型		4	5
不明ヒケシバ型		8	9
不明ゲンチク型		9	10
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属		14	2
タケ亜科ネザサ節		51	79
タケ亜科		12	20
ヨシ属		36	38
ウシクサ族		13	14
不明		25	25
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体		117	144
イネ科葉身機動細胞珪酸体		151	176
総計		268	320
珪化組織片			
イネ属短細胞列		4	-

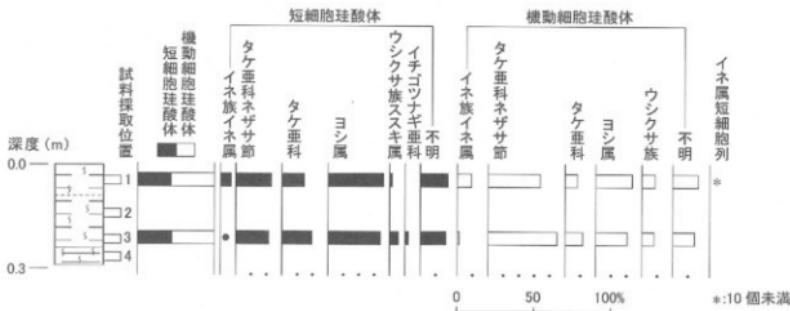
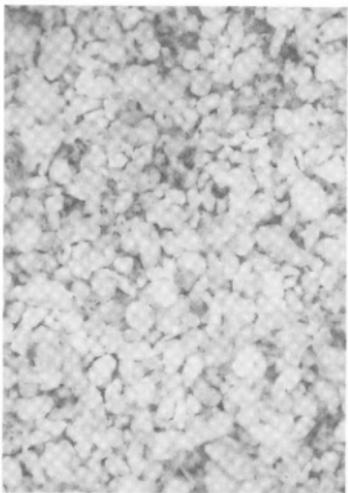
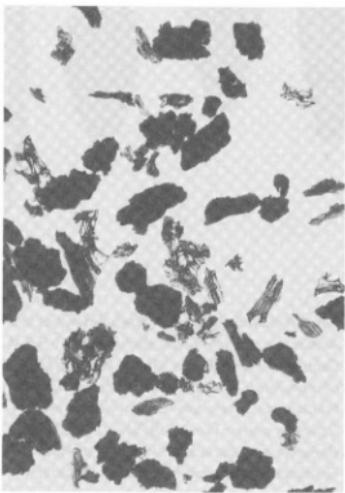


図5.④⑤区池状遺構堆積物における植物珪酸体群集
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として
百分率で算出した。なお、●は1%未満を示す。また、珪化組織片の産状を*で示す。

図版1 テフラ



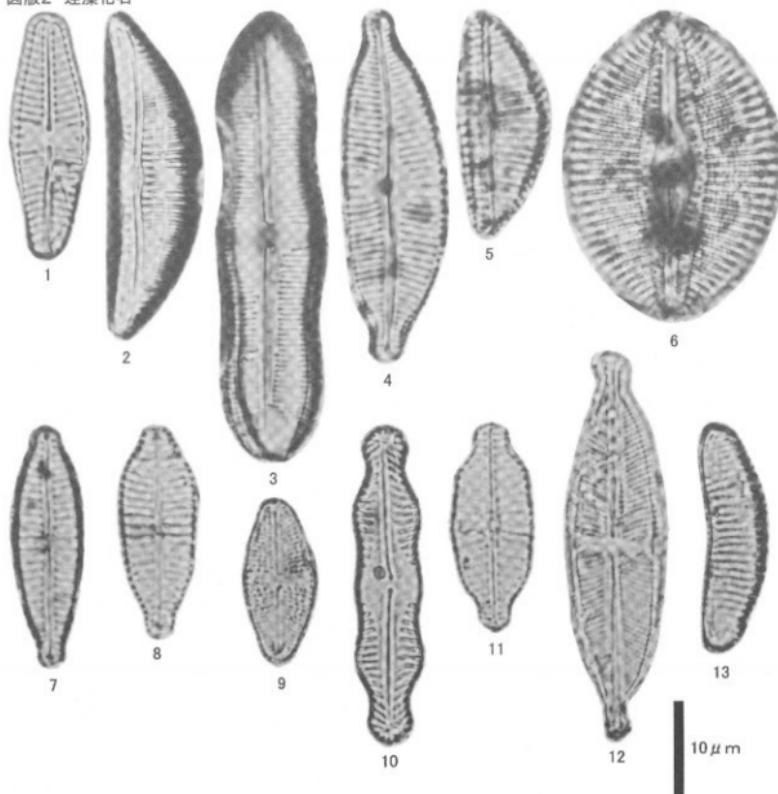
1. To-aの軽石(沢跡トレンチ2;1層)



2. To-aの火山ガラス(沢跡トレンチ2;1層)

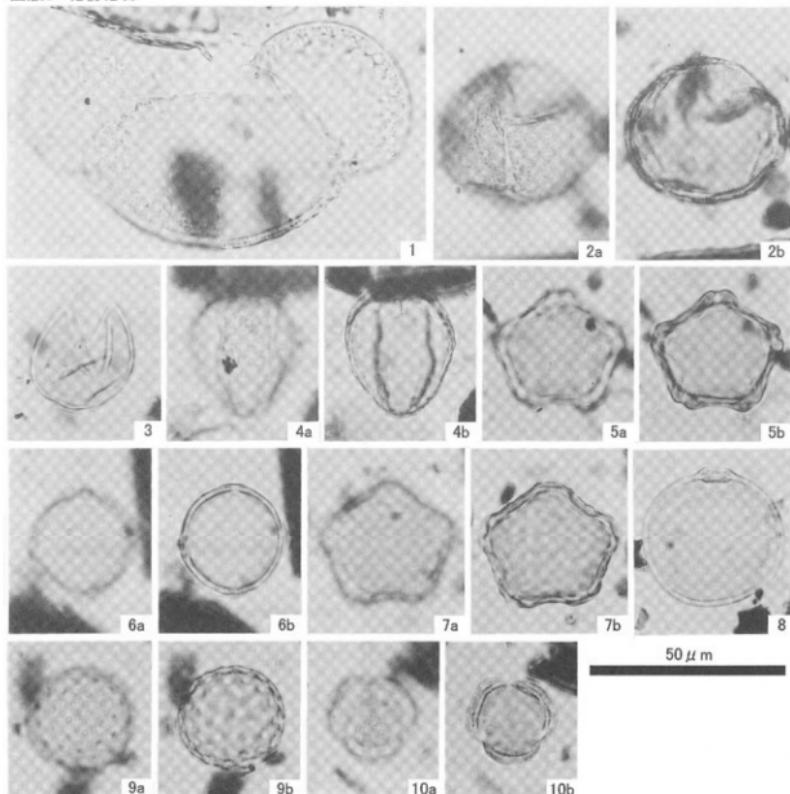


图版2 硅藻化石



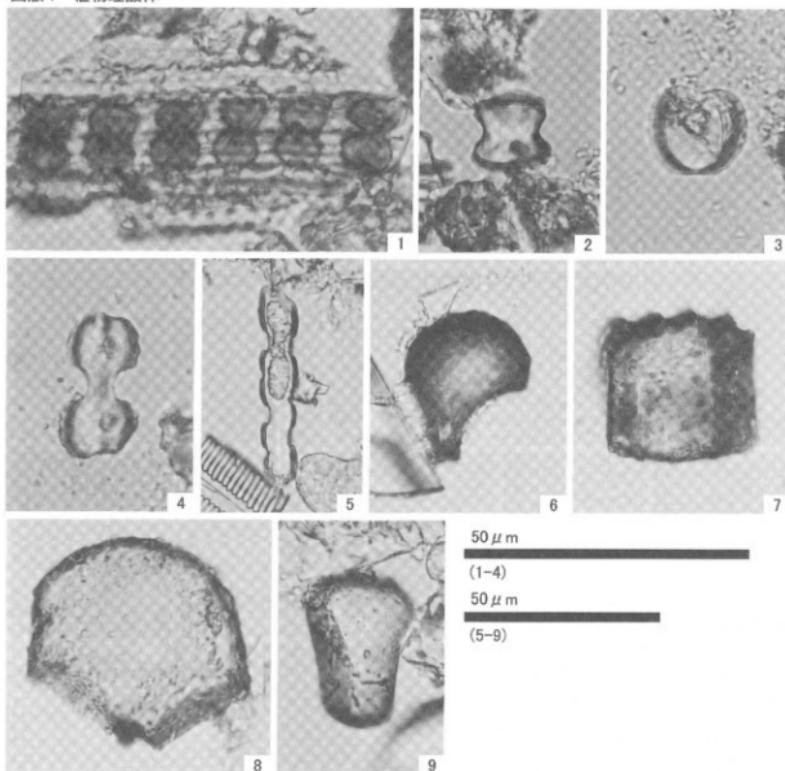
1. *Planothidium lanceolatum* (Breb.)Round et Bukhtiyarova (④⑤)区池状遗構堆積物;3)
2. *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald (④⑤)区池状遺構堆積物;1)
3. *Caloneis silicula* (Ehren.)Cleve (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
4. *Cymbopleura naviculiformis* (Auerswald)Krammer (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
5. *Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
6. *Diploneis parma* Cleve (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
8. *Gomphonema angustatum* (Kuetz.)Rabenhorst (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
9. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann (④⑤)区池状遺構堆積物;1)
10. *Pinnularia nodosa* Ehrenberg (④⑤)区池状遺構堆積物;1)
11. *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krass.)H.Kobayasi (④⑤)区池状遺構堆積物;1)
12. *Stauroneis anceps* Ehrenberg (④⑤)区池状遺構堆積物;3)
13. *Eunotia minor* (Kuetz.)Grunow (④⑤)区池状遺構堆積物;3)

図版3 花粉化石



1. マツ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
 3. スギ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
 5. ハンノキ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
 7. ニレ属—ケヤキ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)
 9. アガツ科(④⑤区池状遺構堆積物;3)
2. ブナ属(④⑤区池状遺構堆積物;1)
 4. コナラ属コナラ亞属(④⑤区池状遺構堆積物;1)
 6. クマシデ属—アサダ属(④⑤区池状遺構堆積物;1)
 8. イネ科(④⑤区池状遺構堆積物;3)
 10. ヨモギ属(④⑤区池状遺構堆積物;3)

图版4 植物硅酸体



1. イネ属短細胞列(④⑤区池状遺構堆積物;1)
2. ネザサ節短細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
4. ススキ属単細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;3)
5. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;3)
6. イネ属機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
7. ネザサ節機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;1)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(④⑤区池状遺構堆積物;3)

附録3 出土木椀の樹種同定

坂下遺跡（第10次）出土木製品の樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は坂下遺跡（第10次）より出土した木椀1点である。

3 方 法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（糹目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結 果

試料はケヤキ *Zelkova serrata* Mkinou であった。以下に同定の根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

ケヤキ *Zelkova serrata* Mkinou ニレ科 図版1・2・3

横断面：年輪のはじめに大型の道管1～2列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線上に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きく膨らんでいるものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞の中には大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

5 所 見

同定の結果、坂下遺跡（第10次）の木椀はケヤキであった。ケヤキは高木になり大きな材がとることができるもので、耐朽性ね、保水性は高く水湿にもよく耐える。縄文時代以降、現在まで伝統的に本地に用いられる材である。温帯に分布する落葉広葉樹で、谷沿いなどの適潤な肥沃地に生育する。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100
- 島地謙・伊東隆大(1988)日本の遺跡出土木製品総覽、雄山閣、p.296
- 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242

坂下遺跡（第10次）出土木製品の木材



横断面 ━━━━ : 0.5mm



横断面 ━━━━ : 0.2mm



横断面 ━━━━ : 0.2mm

1. 上付き柾 ケヤキ



放射断面 ━━━━ : 0.2mm



放射断面 ━━━━ : 0.1mm

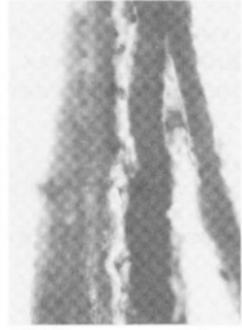


放射断面 ━━━━ : 0.1mm

2. 同上



接線断面 ━━━━ : 0.2mm



接線断面 ━━━━ : 0.1mm



接線断面 ━━━━ : 0.1mm

3. 同上

写 真 図 版



北東側から



南西側から

写真図版 1 調査開始時の状況



⑥区の柱穴跡



建物跡 1 (⑥区)

写真図版 2 挖立柱建物跡 (1)



建物跡 3 (⑥区)



建物跡 4 (④⑤区)

写真図版 3 挖立柱建物跡 (2)



敷石遺構・池状遺構 全景（南西から）



敷石遺構 全景（北から）

写真図版4 敷石遺構・池状遺構（1）



敷石面の状況（南端部 南から）



敷石面の状況（断面 B - B' 付近 南から）



敷石面の状況（断面 F - F' 付近 東から）

写真図版 5 敷石造構・池状造構（2）



敷石遺構 断面 A - A' (北から)



敷石遺構 断面 B - B' (南から)

写真図版 6 敷石遺構・池状遺構 (3)



敷石造構 断面 C - C' (南東から)



同上 中央部 近影 (南から)

写真図版 7 敷石造構・池状造構 (4)



敷石造構 断面 D - D' と付近の敷石面の状況（北から）



敷石造構 断面 F - F' と敷石面を覆う大型礫の出土状況（東から）

写真図版 8 敷石造構・池状造構（5）



敷石遺構 断面 G - G' ~ I - I' (南から)



敷石遺構 断面 E - E' (南から)



敷石遺構 断面 G - G' (南から)



敷石遺構 断面 H - H' (南西から)



敷石遺構 断面 I - I' (東から)

写真図版 9 敷石遺構・池状遺構 (6)



敷石造構（手前）と池状造構（奥）（西から）



池状造構 全景（南東から）

写真図版 10 敷石造構・池状造構（7）



池状遺構 断面 Mw - Mw' (南西から)



池状遺構 断面 Nw - Nw' (南西から)

写真図版 11 敷石遺構・池状遺構 (8)



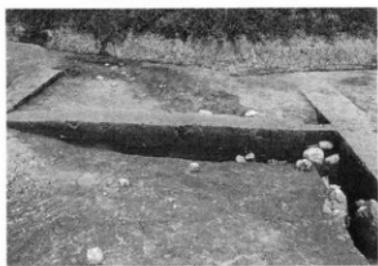
池状遺構 断面 On - On' (北東から)



池状遺構 断面 Ps - Ps' (南東から)



池状遺構 断面 Ps' - Ps'' (南から)



池状遺構 断面 Qw - Qw' (南西から)

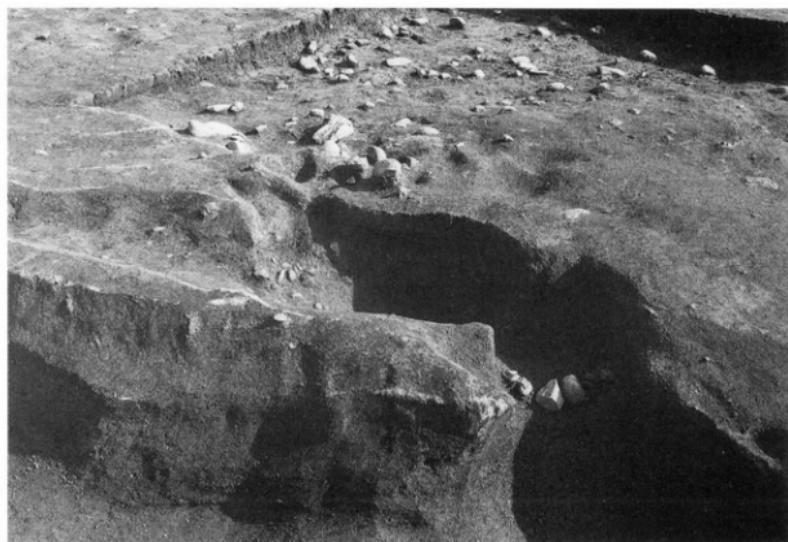


池状遺構 断面 Rw - Rw' (北西から)

写真図版 12 敷石遺構・池状遺構 (9)



取水口状造構 1 (南東から)



取水口状造構 1 (北東から)

写真図版 13 敷石造構・池状造構 (10)

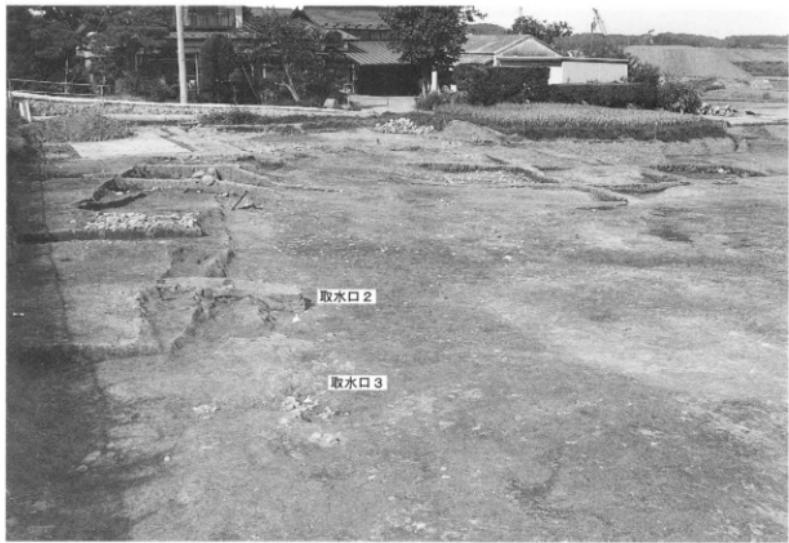


取水口状造構 1 (東から)



取水口状造構 1 付近の断面 (敷石造構断面 J-J' 西から)

写真図版 14 敷石造構・池状造構 (11)



取水口状遺構 2・3周辺の状況（南から）



取水口状遺構 2（東から）



取水口状遺構 3（東から）

写真図版 15 敷石造構・池状造構 (12)



⑦区 全景（東から）



敷石造構 新面 L-L'（南東から）

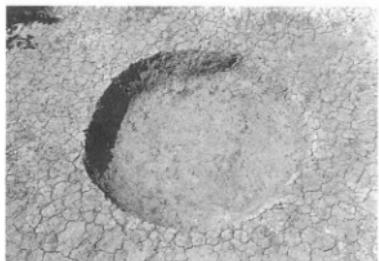


礎集中部の断面近影

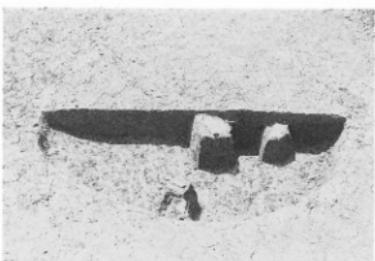


遺構 3-e 断面（南から）

写真図版 16 ⑦区の調査



土坑 1 全景



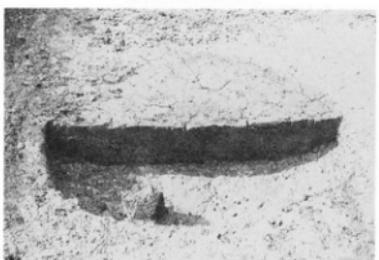
土坑 1 断面



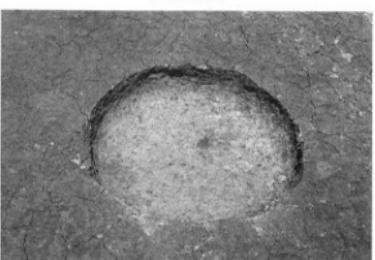
土坑 1 遗物出土状况



土坑 2 全景



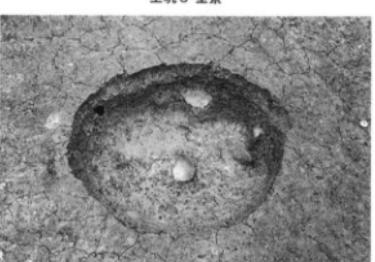
土坑 2 断面



土坑 3 全景

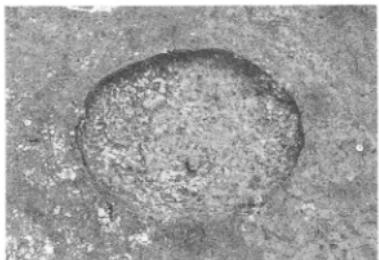


土坑 3 断面

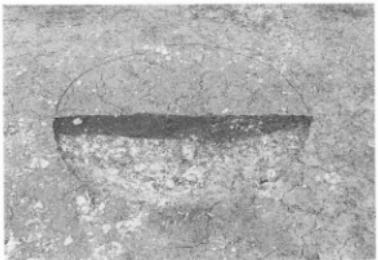


土坑 3 遗物出土状况

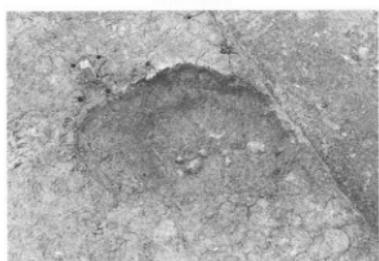
写真図版 17 土坑 (1)



土坑 4 全景



土坑 4 断面



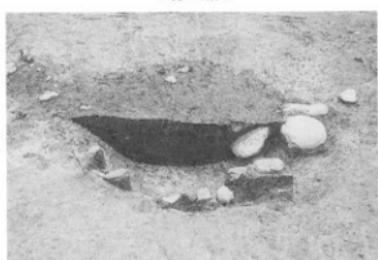
土坑 5 全景



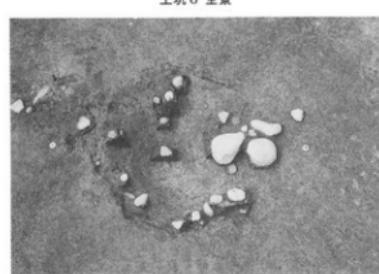
土坑 5 断面



土坑 6 全景



土坑 6 断面

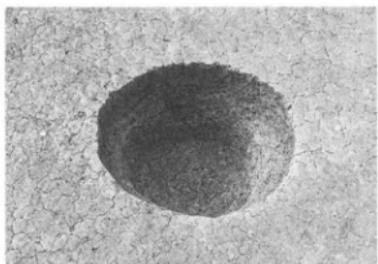


土坑 6 造物出土状况

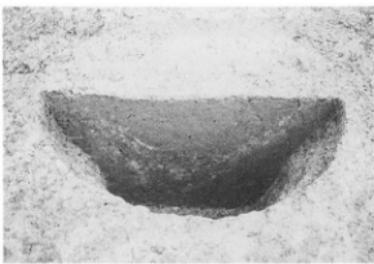
写真図版 18 土坑 (2)



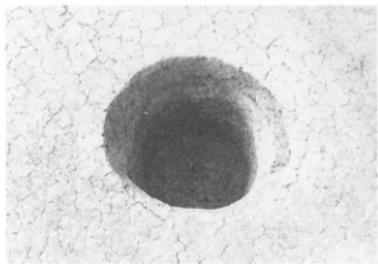
土坑 7 · 8



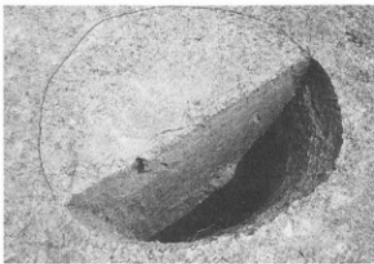
土坑 7 全景



土坑 7 断面

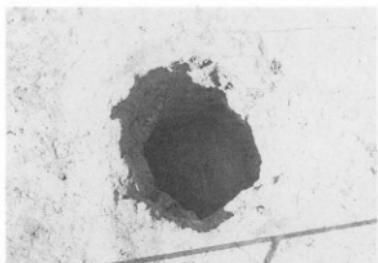


土坑 8 全景

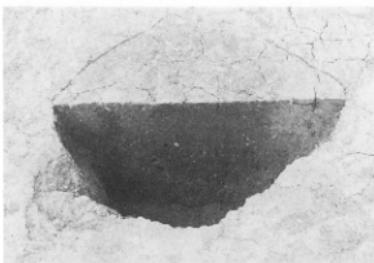


土坑 8 断面

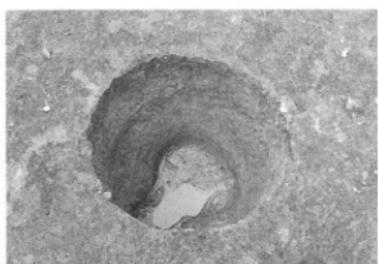
写真図版 19 土坑 (3)



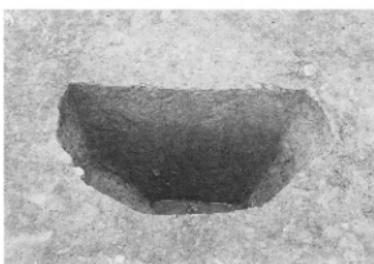
土坑 9 全景



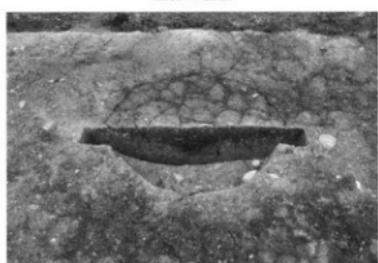
土坑 9 断面



土坑 10 全景



土坑 10 断面



土坑 11 断面



土坑 12 断面

写真図版 20 土坑 (4)



溝跡 1 (⑥区 東から)



溝跡 2e (左)・溝跡 2f (右) (④⑤区 西から)

写真図版 21 溝跡 (1)



溝跡 2e ((④)5区 東から)



溝跡 2e 遺物・出土状況



同 上



溝跡 2e 検出面の出土状況 (⑥区 東から)

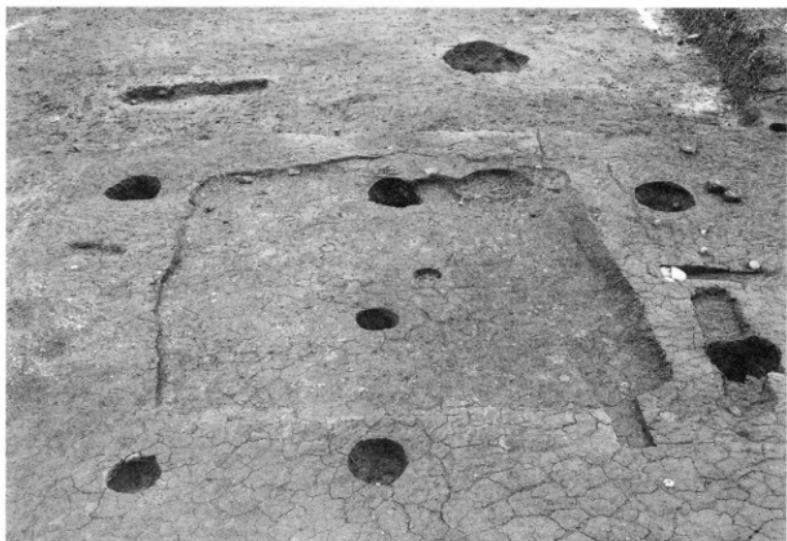


同左 近影 (1)



同左 近影 (2)

写真図版 22 溝跡 (2)



堅穴住居跡 1 (⑥区 西から)



同上 新面 (北西から)



堅穴住居跡 1 カマド前の遺物出土状況（北西から）



カマド 近影（西から）



遺物出土状況 全景（西から）



カマド内 土師器壺 (27) 出土状況



鉄製品 (301 刀子?) 出土状況

写真図版 24 堅穴住居跡 (2)



陥し穴 1



同左 断面



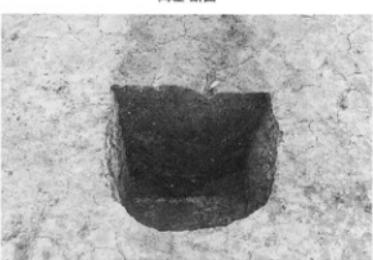
陥し穴 2



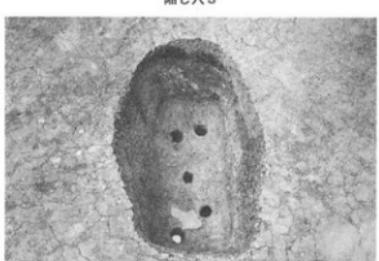
同左 断面



陥し穴 3



同左 断面

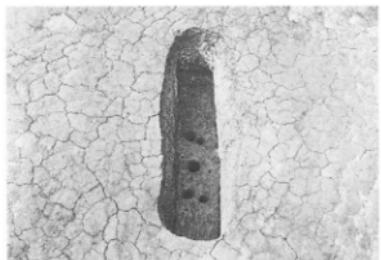


陥し穴 4

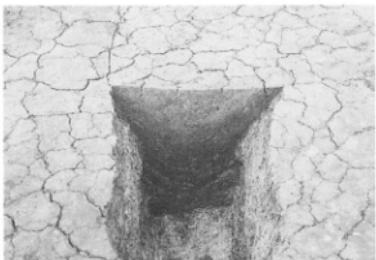


同左 断面

写真図版 25 陥し穴状造構 (1)



陥し穴5



同左 断面



「休憩中」

写真図版 26 陥し穴状遺構 (2)



④⑤区 北西部（敷石造横断面 K - K'）



同上（左半）



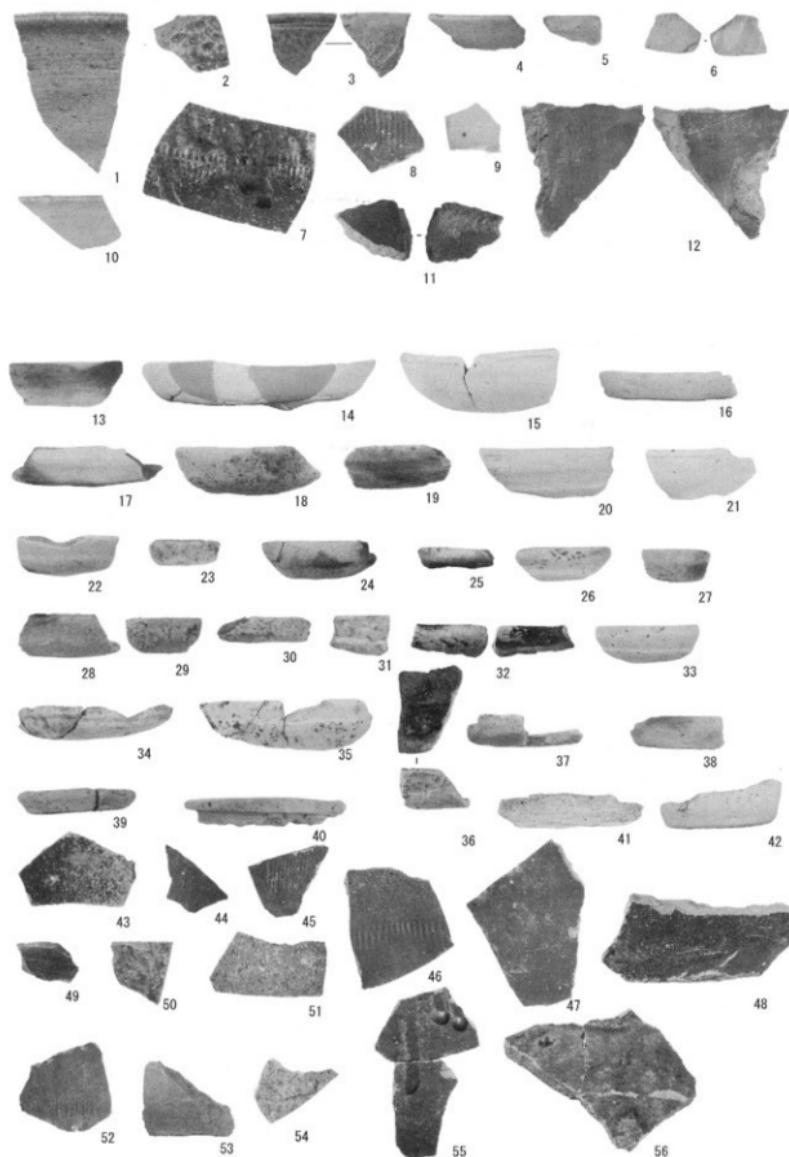
同上（右半）



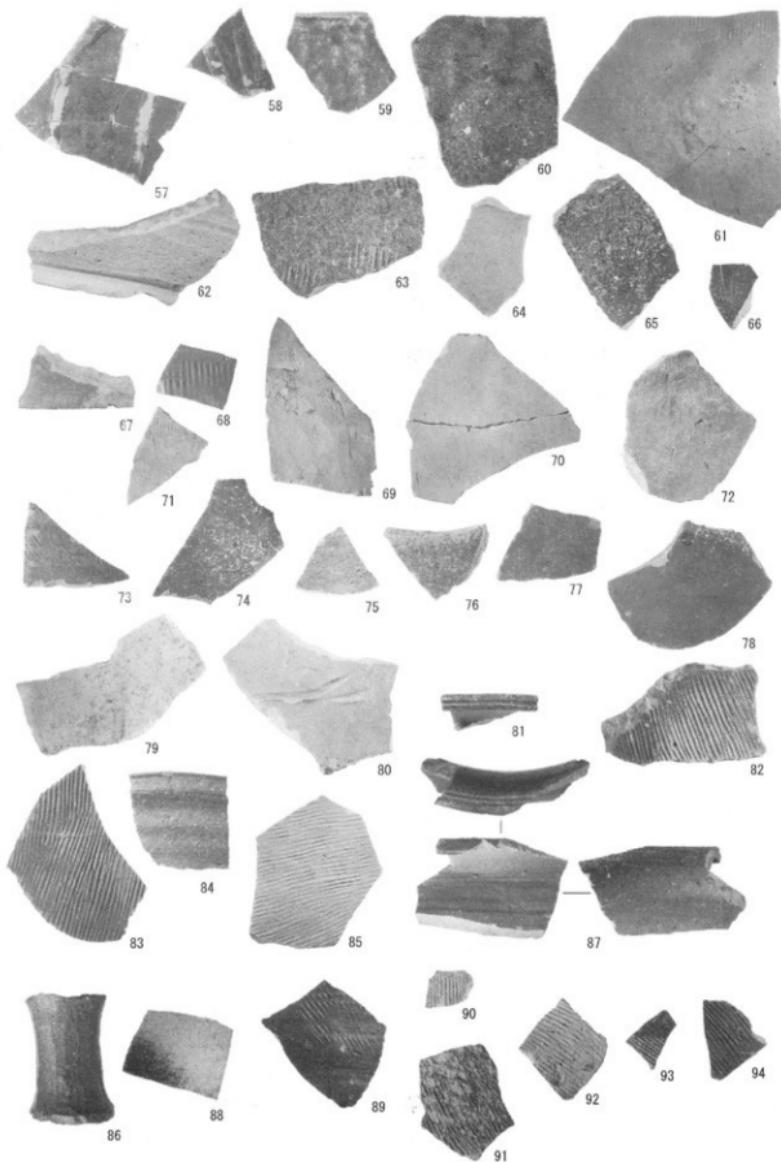
④⑤区 沢跡トレンチ 1



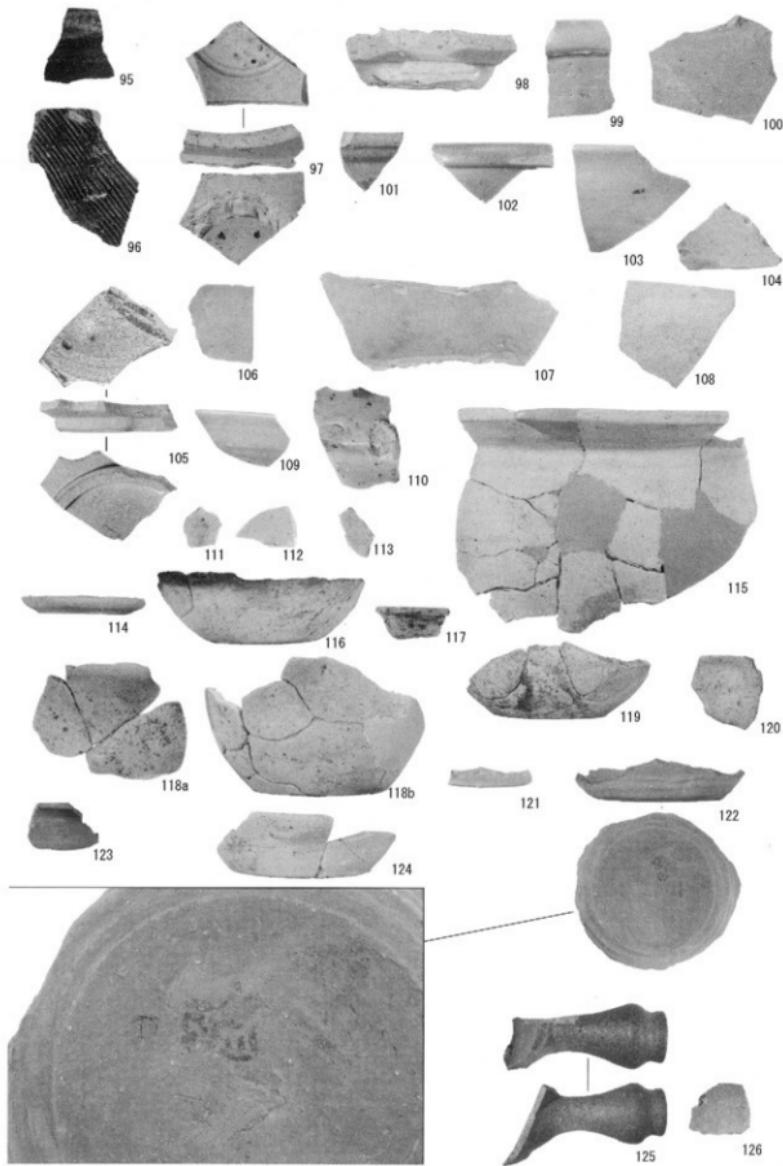
④⑤区 沢跡トレンチ 2



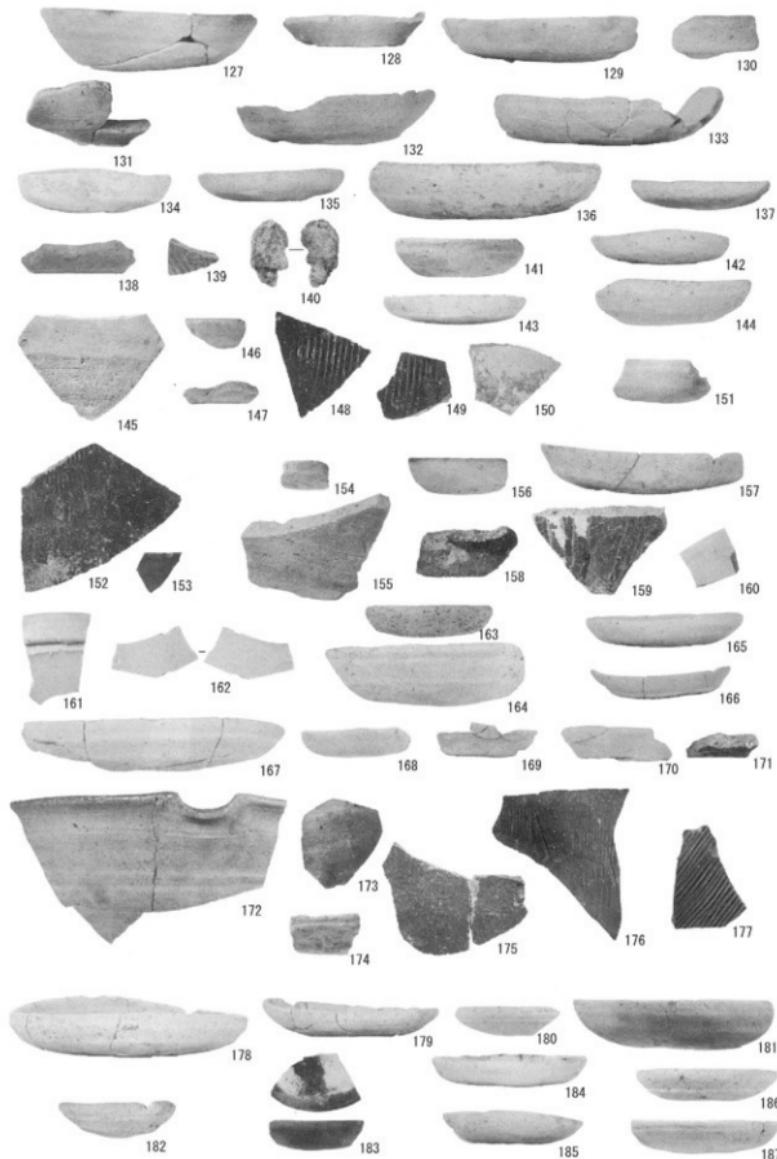
写真図版 28 出土遺物 (1)



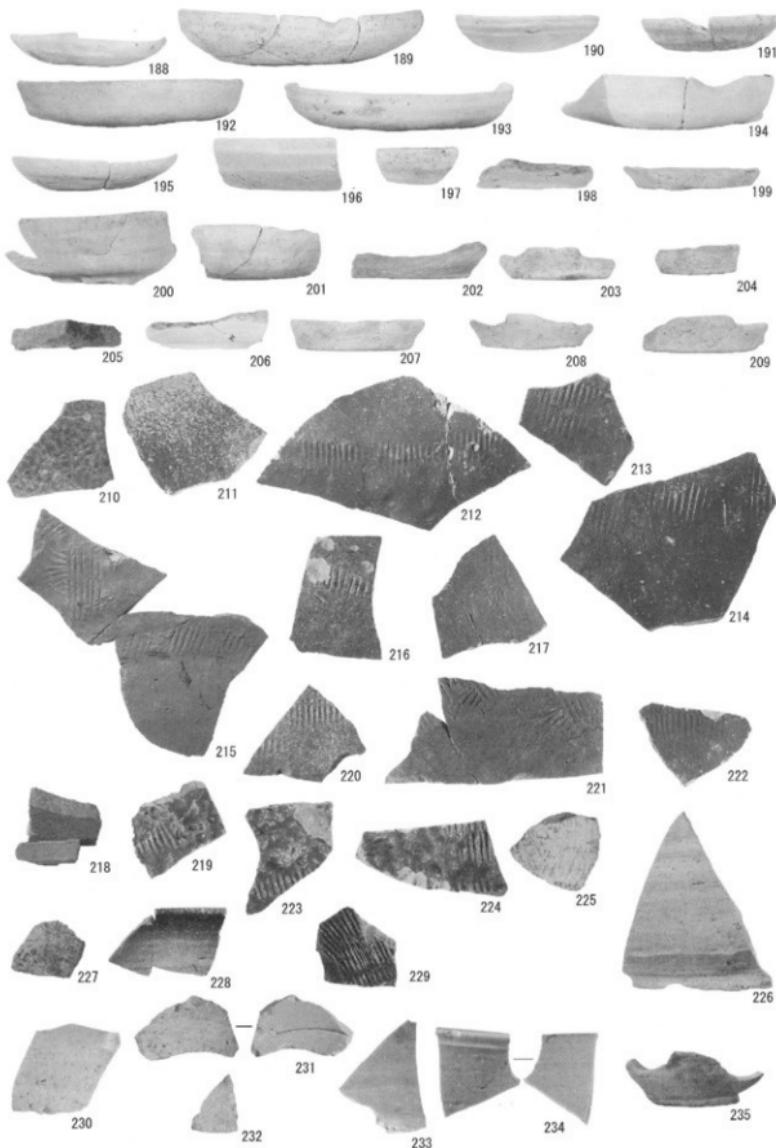
写真図版 29 出土遺物 (2)



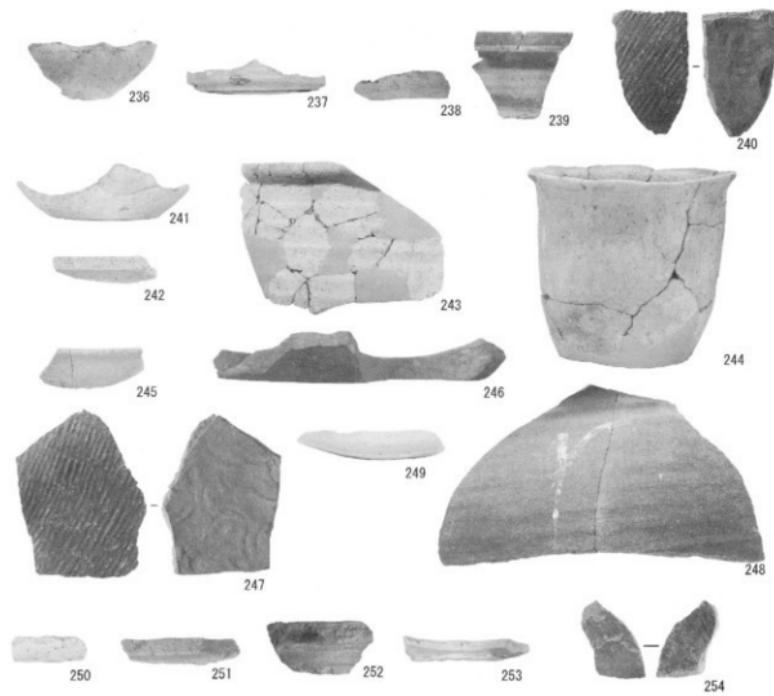
写真図版 30 出土遺物 (3)



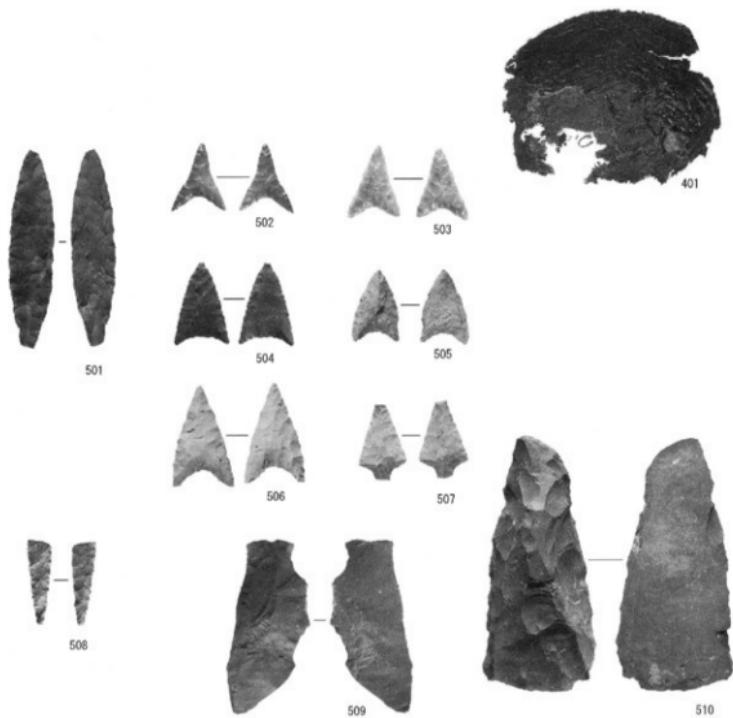
写真図版 31 出土遺物 (4)



写真図版 32 出土遺物 (5)



写真図版 33 出土遺物 (6)



写真図版 34 出土遺物 (7)

報告書抄録

ふりがな	さかしたいせきだいじゅうじはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	坂下遺跡第10次発掘調査報告書						
副書名	一関遊水地事業国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第509集						
編著者名	村上 拓・菅野 樹						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638 - 9001						
発行年月日	2008年3月17日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂下遺跡 第10次調査	岩手県西磐井郡平泉町平泉字坂下地内	03402	NE76-0000	39度00分09秒	141度06分22秒 ~ 2006.04.11 2006.10.18	8,420 m ²	一関遊水地事業 国道4号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
坂下遺跡 第10次調査		12世紀	掘立柱建物 敷石造構 池状造構 土坑 溝	4棟 1箇所 1箇所 12基 13条	かわらけ 国産陶器（常滑窯・渥美窯・須恵器系） 中国磁器 木挽 刀子		
要約	国指定特別史跡中尊寺が存する関山の東麓縁部の調査。12世紀の遺構・遺物が主体。掘立柱建物跡や円形土坑が分布する微高地上の空間の縁辺を構と敷石造構が区画する。縁接の低位面からは池状造構を検出。						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 509 集

坂下遺跡第 10 次発掘調査報告書

閑遊水地事業国道 4 号衣川橋橋梁改築工事関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 20 年 3 月 7 日

発 行 平成 20 年 3 月 17 日

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話 (019) 638 - 9001

FAX (019) 638 - 8563

印 刷 (株) 橋本印刷

〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 1 丁目 15 番 29 号

電話 (019) 652 - 1354
